

審査意見への対応を記載した書類（3月）

（目次）知能情報社会学部 知能情報社会学科

1. DP2では「デジタルツールを用いて情報収集、表現、コミュニケーションする力」とあるものの、通信教育課程である本学におけるデジタルツールを用いた「表現、コミュニケーションする力」とはどのような能力・実践力を想定しているのか、その意図するところが明らかではない。また、設置構想審査において「デジタルツールを用いたコミュニケーション力を深め、対面のコミュニケーション力にも役立つ教育を行う」といった発言があったが、その具体的な内容が明らかではないことから、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー等との整合性が判断できない。このため、「表現、コミュニケーションする力」の具体的な内容が明確になるよう説明するとともに、各ポリシーとの整合性を明確に説明し、必要に応じて適切に改めること。（是正事項）・・・5

2. 設置の趣旨等を記載した書類（本文）P25では大学名称の設定理由が「全人格にわたる自己の研鑽、自然な真理を探究できる善なる人材を育成し、全社会に貢献することを示すため」とされているものの、「自然な真理」の意味するところや、なぜアルファベット表記なのか明確な説明がないことから、上記設定理由が養成する人材像や3つのポリシーにどのように反映されているのか明確ではない。また、学部・学科名称に用いられている「知能情報社会」の説明についても英語名称にある「Social Informatics」と齟齬があるように見受けられるため、大学名称等が教育研究上の目的にふさわしいものであるか判断できないため、大学名称等の設定理由について明確に説明すること。（是正事項）・・・22

3. 審査意見1の通りディプロマ・ポリシーと他のポリシー等の妥当性や整合性が判断できないため、教育課程の妥当性を判断することができない。このため、関連する他の審査意見への対応を踏まえて、本学科の教育課程が、適正なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識や能力等に係る教育が網羅され、体系的が担保された上で、適切に編成されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。（是正事項）・・・27

4. 多様な学びを提供するカリキュラムであることから、設置の趣旨等を記載した書類（本文）P57～59において、クラス・コーチ（CC）が履修指導、学修指導、通信技術指導、クラス運営を行うとされているが、以下の点が明確になるように説明するとともに、必要に応じて改めること。（是正事項）・・・45

（1）入学時には必須面談が行われるものの、それ以降の面談は希望者のみが対象であると思われる。学生の関心が多岐にわたることやカリキュラム選択の自由度が高いこと、授業の多くがオンラインで行われることに鑑みれば、このような履修指導で全ての学生が本学の定めるディプロマ・ポリシーを達成できるか疑義があることから、入学時及び在学期間を通して、学位の授与に向けた組織的な履修指導が十分に行われることを明確にするか、必要に応じて適切に改めること。

（2）学生2万人に対してCCは100名であることから、一人当たり多数の学生を受け持つことと思われる。CCの業務である履修指導、学修指導、通信技術指導、クラス運営を行うためには、一定の知識や研修が必要と考えられるが、これらに関する説明がされていないため、履修指導等が適切に実施できるか判断できない。このため、CCの具体的な業務内容、業務量、頻度、CC採用時に求められる資質、採用前後の研修内容、処遇及び教員との連携体制を明確に説明すること。

5. 「卒業プロジェクト科目」について、設置の趣旨等を記載した書類（本文）P42等において、学生を40人程度のグループに分け、リアルタイム授業を実施するとあるが、最大125グループの多様な指向をもつ学生の指導をリアルタイムで実施可能かどうか、実効性に疑義がある。

また、指導補助者がファシリテーション等を行う計画であるが、授業担当教員は授業動画の構成や成績評価に関与するという記載があるものの、どのように指導に係る責任を果たすのか明確ではない。このため、同科目について、具体的なスケジュール、学生グループの編成方法、グループごとの課題の設定方法、教員と指導補助者の枠割り分担等を説明し、実施可能であることと授業担当教員が指導に係る責任を果たすことについて明確にすること。その際、授業科目における大半の授業を指導補助者が担当することは原則として想定されず、望ましくないことに留意すること。（是正事項）・・・60

6. 基本計画書の学位又は学科の分野欄に「社会学・社会福祉学関係」といった記載があり、教育課程の概要にも「社会・ネットワーク」という科目区分が記載されている。しかしながら、社会調査や社会ネットワークに関する科目が開設されていないため、社会学を学ぶための十分な授業科目が配置されているとは見受けられず、社会学・社会福祉学関係の学位を付与するに足るカリキュラムとなっているか疑義がある。このことから、学位又は学科の分野欄から社会学・社会福祉学関係の記載を削除するか、社会学・社会福祉学関係が学位に含まれることをディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、カリキュラムや講義内容との関連を示しつつ説明するとともに、必要に応じて改めること。（是正事項）・・・97

7. 設置の趣旨等を記載した書類（本文）P40では、「ライブ映像科目もZEN Studyで配信され、1,000人以上の同時視聴にも対応する。」とあるものの、例えば導入科目である「人工知能活用実践」は必修科目であり、多くの学生が視聴することが考えられることから、1,000人以上の同時視聴に対応することをもって、十分な環境が整備されているとは判断できない。このため、想定される最大の同時接続者数とその根拠を明確にした上で、それに耐えられる十分なシステム環境が整備されていることを説明すること。（是正事項）・・・100

8. 基本計画書の「教育課程等の概要」欄では「ゼミ（経済発展を考える）」が設けられるとされているが、「授業科目の概要」欄では同科目は記載されておらず、「基本計画書」に記載のない「ゼミ（社会学）」を設けることとされているなど、記載に齟齬が見受けられることから、授業科目に関する記載について、各資料における説明を整合させること。（是正事項）・・・102

9. DP1では「社会の基盤にある数理・情報技術とそれがもたらす影響力を理解する力」を身につけることとされているものの、その能力を獲得するために重要な役割を果たすと思われる「線形代数」や「解析学」が選択科目とされていることについて、その理由を明示すること。

また、本学は入試で数学力を問うていないことから、これらの科目を履修するために必要な学力を有していない学生の入学が予想される。設置の趣旨等を記載した書類（本文）P36では「カリキュラムの出発点となる『導入科目』の必修授業を履修するために必要となる基礎学力が不足している場合でも、アドバイザーによる補習授業やオンデマンド教材により大学での学びをサポートする」とあるものの、上記科目が配置される「展開科目」を履修するために必要な補習授業等は行われない計画となっていることから、必要な学力を有していない学生が受講を希望した場合の対応についても説明すること。

（改善事項）・・・103

10. 設置の趣旨等を記載した書類（本文）P36では「カリキュラムの出発点となる『導入科目』の必修授業を履修するために必要となる基礎学力が不足している場合でも、アドバイザーによる補習授業やオンデマンド教材により大学での学びをサポートする」とあるが、実効性が不明確であるため、補習授業等の内容や対象者数及び対象者の特定方法等を明示すること。（改善事項）・・・107

11. 設置の趣旨等を記載した書類（本文）P29では「『考究科目』は『演習科目』と『ゼミ』の2つの授業方法からなり、それぞれの授業運営に適した受講人数を設定の上、学修状況に応じて担当教員が学生の選抜を行う」とあり、同書類P43では演習科目についての学生数の目安は30名である旨説明があるが、学生の計画的な履修や公平性を担保するため、考究科目の科目ごとの定員や受講希望者が多い場合の選抜方法等についてあらかじめ示しておくこと。（改善事項）・・・113

12. 本学ウェブサイトの「教員予定者一覧」において学長の他に「チェアマン」が配置されるとある一方、学則等にはチェアマンに関する記載が無いことから、その職務内容が不明であるとともに、学長の他にチェアマンが配置されるのであれば、適切に管理運営が行えるか疑義がある。チェアマンの役割及び学内の指揮命令系統を明確にするとともに、必要に応じて学則等を改めること。（是正事項）・・・116

13. 設置の趣旨等を記載した書類（本文）P74では、法人事務組織に学事部門を置き、大学の管理運営等を担うとされている。しかしながら同書類P83では教学面における管理運営体制が示されており、大学に事務局長等の事務担当者を置くことが示されている。また、基本計画書に示された専属の事務職員数（252人）はCC、CA、TAの合計数と思われる、事務局に専属の事務職員が配置されないと考えられることから、書類間に不整合が見られる。このため、大学設置基準第7条第1項～第4項を踏まえ、大学に教育研究実施組織等が適切に編制されていることを説明すること。

その際、同書類P77で「職員が行う事務作業の大部分もオンラインで完結させる」とあることから、事務職員の逗子キャンパス勤務及びリモートワークの比率及びそれぞれ想定される業務についても明確に示すこと。（是正事項）・・・117

14. 設置の趣旨等を記載した書類（本文）P69等において、科目等履修生、特別聴講生、聴講生を受け入れる旨の記載があるが、受入れ科目や人数に関する記載が見られない。科目等履修生等の受け入れに関する詳細や教員、指導補助者等の負担を明らかにした上で教育に支障がないことについて説明すること。（是正事項）・・・121

15. キャリア・アドバイザー（CA）については、設置の趣旨等を記載した書類（P60～P61）において、職務内容の記載があるが、その詳細及び採用条件や研修の方法に関する記載がないことから、進路選択に関する指導が適切に行えるか確認できない。このため、CAの具体的な業務内容、業務量、採用条件、採用前後の研修内容、処遇及び教員との連携体制について説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。（是正事項）・・・123

16. 教員資格審査において、「不可」や「保留」、「適格な職位・区分であれば可」となった授業科目について、当該授業科目を担当する別の後任の教員を基幹教員以外の教員で補充する場合には、主要授業科目は原則として基幹教員が担当することとなっていることを踏まえ、当該授業科目の教育課程における位置付け等を明確にした上で、当該教員を後任として補充することの妥当性について説明すること。（是正事項）・・・133

17. 指導補助者とされているアカデミック・アドバイザー（AA）、ティーチング・アシスタント（TA）については、通信教育実施方法説明書において、採用条件や研修の方法に関する記載があるが、その詳細が明らかでない。このため、関連する審査意見への対応も踏まえ、指導補助者の具体的な業務内容、業務量、採用条件、採用前後の研修内容、処遇及び教員との連携体制について説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。なお、業務量を説明するに当たっては、設置の趣旨等を記載した書類（本文）P63において「オンデマンド科目での、フォーラムなどを用いた質疑対応では、1科目あたり週平均20件の質問が来ると想定」しているが、例えば導入科目では非常に多くの学生が受講すると考えられる科目もあり、想定及びそれに基づく質問対応体制や教員負担の見積りが適切かどうか判断できないことから、1科目あたり週平均20件の質問と想定した明確な根拠を示すか、想定及びそれに基づく体制の見直しを行うこと。（是正事項）・・・202

18. 研究環境について、設置の趣旨等を記載した書類（本文）P75に、事務組織の整備等について記載があるものの、審査意見17で指摘した質疑対応をはじめとする教員の教育に関わる業務量も明確ではないことに加え、リモートワークで研究を行う教員の研究環境確保については、「配慮する」と書かれるのみで具体的な内容は明らかではないことから、本学において適切に研究環境が整備されているか疑義がある。このため、教員の教育負担を明確にした上で、本学において大学としてふさわしい研究環境が整備されることを説明すること。（是正事項）・・・226

19. 設置の趣旨等を記載した書類（本文）P77では「教員が実施する教育活動及び研究、職員が行う事務作業の大部分もオンラインで完結させる」とあることから、各教職員はキャンパス以外の場所で研究情報や学生の個人情報にアクセスでき、かつ学生との面談を実施することになると考えられるが、機密情報や個人情報をどのように管理するのか記載がないことから明確に説明すること。（是正事項）・・・230

20. 設置の趣旨等を記載した書類（本文）P67において「学生から届く授業内容に関する質問、各科目ごとに実施する授業アンケートといった定性的な情報、確認テストなどの正答率やページ毎の閲覧時間・回数などといった定量的な情報を毎年分析し、学生がより理解できる教材にするための改善を行う」とあるものの、同書類（P63）では「1科目のオンデマンド科目は複数年にわたり使用される」といった記載も見られる。学生が速やかに各種分析の恩恵を受けることができるようにするとともに、学修データ等を用いた授業改善の具体的なスケジュールを示すとともに、授業内容のみならず、学生生活全般についても学生アンケート等により、不断の改善を図ることが望ましい。（改善事項）・・・232

(是正事項) 知能情報社会学部 知能情報社会学科

1. DP2では「デジタルツールを用いて情報収集、表現、コミュニケーションする力」とあるものの、通信教育課程である本学におけるデジタルツールを用いた「表現、コミュニケーションする力」とはどのような能力・実践力を想定しているのか、その意図するところが明らかではない。また、設置構想審査において「デジタルツールを用いたコミュニケーション力を深め、対面のコミュニケーション力にも役立つ教育を行う」といった発言があったが、その具体的な内容が明らかではないことから、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー等との整合性が判断できない。このため、「表現、コミュニケーションする力」の具体的な内容が明確になるよう説明するとともに、各ポリシーとの整合性を明確に説明し、必要に応じて適切に改めること

(対応)

1 DP2に内包される能力について

本学の定めるディプロマ・ポリシーのうち、DP2「デジタルツールを用いて情報収集、表現、コミュニケーションする力」について、明確に説明する。なお、説明の都合上、以下では、「情報収集力」も併せ、DP2に記載した力全てについて述べる。

(1) 「デジタルツールを用いた情報収集力」

アジャイルな知識体系の選択と修得を容易にしたり、翻訳や要約作業を自動化することで特定の学問分野への障壁を下げる特性を持つ、デジタルツールを使って情報収集をする力。そのために、高度な検索スキルやインターネット上の論文を利用するスキル、フェイクニュースの存在の理解やファクトチェックを行うスキル、その前提となる正しくコンピュータやデータベース、情報ネットワークを活用するスキルなどを身につける。

(2) 「デジタルツールを用いた表現力」

編集が容易であるというデジタルツールの特性を活かして表現する力。これは例えば、デジタルツールを利用したレポート、プレゼンテーションの作成スキルに加えて、画像加工編集スキル、映像加工編集スキル、AIを利用した文章、画像、音声などの生成スキルのほか、表現の発信における知財関連法規などを遵守するリテラシーなども含まれる。

(3) 「デジタルツールを用いたコミュニケーション力」

デジタルツールを用いることにより、地理的要因や言語的な障壁など従来あった様々な障壁を超えてコミュニケーションする力。これはビデオ会議ツールの利用スキルのほか、SNSの運用スキルや、クラウドツールやチャットツールを使ったコラボレーション、サイバーセキュリティを意識したコラボレーション、機械翻訳を通じたコミュニケーションを行うスキルが該当する。

2 「デジタルツールを用いたコミュニケーション力を深め、対面のコミュニケーション力にも役立つ教育を行う」と発言した意図について

設置構想審査における「デジタルツールを用いたコミュニケーション力を深め、対面のコミュニケーション力にも役立つ教育を行う」という発言の意図は、教育課程内で対面のコミュニケーション力を養うことを意図したものではなく、本学で行う教育課程内で養われる上記に記載したデジタルツールを用いたコミュニケーション力と、課外プログラムで提供されるリアルな体験プログラム等での対面でのコミュニケーションに関するものである。以下にこの点について説明する。

通信機器の進歩により、教育研究活動においても、社会的活動においても、デジタル上でコミュニケーションを行った後に対面でコミュニケーションする機会はもはや珍しくない。また、従来であれば地理的要因や言語的な障壁等により起こりえなかった交流に関しても、SNS等のデジタルツールを介したコミュニケーションがきっかけとなり、対面での友好的なコミュニケーションやコラボレーションが実現するケースもある。

本学に入学する多様な学生も、多くの場合、入学後はまずオンラインコミュニケーション

ンサービス等のデジタルツールにより、地理的要因等を超えて繋がることが想定される。また、本学は課外でリアルなプログラムを提供し、オンライン上でのコミュニケーションを対面でのコミュニケーションに繋げる機会も提供する。本学の学びによってデジタルツールを用いたコミュニケーション力を深めた学生は、在学時の課外プログラムや卒業後においても、交流した学生と協働でプログラムを実施することが想定される。

「デジタルツールを用いたコミュニケーション力を深め、対面のコミュニケーション力にも役立つ教育を行う」と発言した意図とは、教育課程内の授業で対面のコミュニケーション力を養うことを意味するのではなく、課外プログラムにおいて提供される対面でのコミュニケーション機会も念頭に置いたものあり、これらを合わせて「対面のコミュニケーション力にも役立つ教育」と表現したものである。

3 各ポリシーとの整合性について

次に、各ポリシーとの整合性について説明する。まず、本学の教育課程では、アドミッション・ポリシーにおいて「基礎的デジタルスキル」としてPCの立ち上げやインターネットの接続、簡単なPCの操作などの基礎的な能力を入学者に求める。これらの能力を持った学生が本学での学修にスムーズに入れるよう、入学時点でのガイダンスやクラス・コーチ（CC）の通信技術指導により、学修システムへの接続等を問題なく行えるようなサポートも実施する。このようにして学修を開始した学生が教育課程の各段階で身につけるDP 2の能力の概要について、以下にまとめた。

【表】教育課程の各段階で身につけるDP 2の能力の概要

カリキュラムポリシーの各段階で身につける力の概要	配置する主な科目の例	授業で取り上げるツールの例
導入科目（CP1）： 様々なデジタルツールを知り、使用法に関する基礎的な知識を学ぶ。	アカデミックリテラシー、ITリテラシー、デジタルツールの使い方、人工知能活用実践	ZEN Study、Webブラウザ、Google、KinoDen、ProQuest Research Library、CINII、J-STAGE、各種生成系AI、各種Googleサービス、Wordpress、Adobe Illustrator、Adobe Photoshop、Adobe Premiere Pro、Zoom、各種SNS、各種Webサービス等
基礎科目（CP2）： デジタルツールを適切に利用する方法を学ぶ。	情報セキュリティ概論、情報倫理と法、データサイエンス概論、多言語ITコミュニケーション	必要に応じたネットワーク、データベースなどを処理するソフトウェア、各種Googleサービス、Tableau、各種機械翻訳ツール、AIツール、ZEN study

展開科目（CP3）： 目的に応じたデジタルツールの選 択と活用方法を学ぶ。	機械翻訳実践	必要に応じた機械翻訳ツール やAIツール、ZEN study
卒業プロジェクト（CP4）： 社会課題の解決に向けてデジタル ツールを用いる実践力を身につけ る。	プロジェクト実践	プロジェクト実践のテーマに 応じて必要とされるデジタル ツール

具体的には、まずカリキュラムの出発点となる「導入科目（CP1）」に配置された「アカデミックリテラシー」「ITリテラシー」「デジタルツールの使い方」「人工知能活用実践」等の科目において、様々なデジタルツールの使用法を学ぶ中で、検索エンジンの活用法や、人工知能等の活用方法（情報収集力）、デジタルツールとAIの活用を通じて、文字や画像、音声、レポート作成する力（表現力）、ビデオ会議やSNS、ビジネスメールなどデジタル化された情報を理解、伝達する能力（コミュニケーション力）を身につける。

次に「基礎科目（CP2）」においては、「情報セキュリティ概論」「情報倫理と法」「データサイエンス概論」「多言語ITコミュニケーション」といった科目からの履修によって、単に検索するだけでなく、情報の倫理や数理的側面を理解し、情報収集・分析する力（情報収集力）、倫理上問題ない表現や、データの可視化等に関する基礎スキル（表現力）、多言語コミュニケーションや異文化理解のためのデジタルツールの活用等（コミュニケーション力）を身につける。

また、「展開科目（CP3）」の「多言語情報理解科目群（CP3-2）」は、「基盤リテラシー科目」「世界理解科目」の各領域を反復的に学修するための軸として、複数の学問領域に関してそれぞれの学びのプロセスをデジタルツールを活用して進めることを目的としている。「機械翻訳実践」等の科目で、目的に応じたデジタルツールの使用により情報収集、表現、コミュニケーションする力を身につけ、様々な学問領域に関する知識修得や理解を深める。これまでの「人工知能活用実践」等の授業の、文理横断的な学びの基礎を土台に、デジタルツールを用いて学問領域を横断的に学修する力を身につける。これにより、学生は複雑で変化の激しい社会において、環境の変化や関心に応じて学び続けることが可能になるとともに、デジタルツールを用いた各学問領域の学修を通じて、DP2に示した「情報収集力」「表現力」「コミュニケーション力」を実践的・反復的に磨く。

そして「卒業プロジェクト（CP4）」では、社会課題に関して、適切なデジタルツールを選択して情報収集・分析する力や、自らの考えをアウトプットを通じて表現し、解決に向かう力、デジタルツールを用いた双方向のやりとりやフィードバックを通じて実践的にコミュニケーションする力を身につけ、これらにより課題解決に繋げる実践力を修得する。

以上のように本学では、DP2に定めるこれらの能力を段階的に身につけるものとなっている。また、DP2に強く関連する主要授業科目で学ぶスキルについて以下にまとめた。

以上に述べたとおり、本学のDP2に定める能力は、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー等との整合性が取れたものとなっているが、これらの明確化のため、「設置の趣旨等を記載した書類」におけるカリキュラム・ポリシーを含む一部文章を修正した。

【表】 主要授業科目で学ぶスキル

DP2の分類	科目名	授業で扱う具体的なデジタルスキル	取り上げるデジタルツールの例
情報収集力	アカデミックリテラシー	学習プラットフォームの利用スキル	ZEN Study
情報収集力	アカデミックリテラシー	インターネットや検索エンジン使った初歩的な情報収集スキル	Webブラウザ Google
情報収集力	アカデミックリテラシー	フェイクニュースの存在やファクトチェックの重要性を理解するスキル	Webブラウザ Google
情報収集力	アカデミックリテラシー	インターネット上で論文を検索するスキル	KinoDen ProQuest Research Library CINII J-STAGE
表現力	アカデミックリテラシー	初歩的な生成AIの活用スキル	各種生成AI
表現力	アカデミックリテラシー	デジタルツールを活用した初歩的なレポートの作成スキル	Googleドキュメント Googleスプレッドシート
表現力	アカデミックリテラシー	デジタルツールを活用した初歩的なプレゼンテーションの作成スキル	Googleスライド Googleフォーム Googleサイト
コミュニケーション力	アカデミックリテラシー	ビデオ会議ツールの利用スキル	Zoom
コミュニケーション力	アカデミックリテラシー	SNS上での一般的なトラブル対応スキル	各種SNS
情報収集力	ITリテラシー	人工知能の特性について理解し、活用する姿勢を示せるスキル	
情報収集力	ITリテラシー	各種メディアの特性について理解しデジタルデータを扱うスキル	
情報収集力	ITリテラシー	仕組みを理解した上で、基礎的な正しいコンピューターの活用ができるスキル	

情報収集力	ITリテラシー	企業や組織でのコンピューターネットワークを理解し活用できるスキル	
情報収集力	ITリテラシー	家庭にインターネット回線やWi-Fi環境を導入するスキル	
表現力	ITリテラシー	知的財産関連法規を理解し、遵守するスキル	
コミュニケーション力	ITリテラシー	SNSの利点や危険性について理解し、SNSを活用するスキル	各種SNS
コミュニケーション力	ITリテラシー	サイバーセキュリティ関連法規を理解し、遵守するスキル	
コミュニケーション力	ITリテラシー	デジタルシティズンシップ教育を理解し、協力することができるスキル	
コミュニケーション力	ITリテラシー	マルウェアや攻撃手法の一般的理解と問題への対応ができるスキル	
コミュニケーション力	ITリテラシー	企業のシステム戦略を理解し、その運用に従うことができるスキル	
情報収集力	デジタルツールの使い方	検索クエリを利用した高度な検索スキル	Google
表現力	デジタルツールの使い方	OCRを活用したドキュメントデジタル化スキル	Googleドキュメント
表現力	デジタルツールの使い方	高度なプレゼンテーションデザイン作成スキル	Googleスライド
表現力	デジタルツールの使い方	インターネット上での情報発信スキル	Wordpress
表現力	デジタルツールの使い方	プログラミングでスプレッドシート業務を自動化するスキル	Googleスプレッドシート
表現力	デジタルツールの使い方	ロゴやポスターなどのベクター画像を加工、編集するスキル	Adobe Illustrator
表現力	デジタルツールの使い方	写真などのラスタ画像を加工、編集するスキル	Adobe Photoshop
表現力	デジタルツールの使い方	動画を編集し、テロップなどを入れるスキル	Adobe Premiere Pro

コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	ビジネスメールへの対応スキル	Gmail
コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	メーリングリストの活用スキル	Googleグループ
コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	クラウドストレージを使った協働作業スキル	Google Workspace
コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	クラウドドキュメントの変更履歴の利用スキル	Googleドキュメント
コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	クラウドスケジュールアプリの活用スキル	Googleカレンダー
コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	Webアンケートの実施スキル	Googleフォーム
コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	クラウドスプレッドシートを利用したデータ分析スキル	Googleスプレッドシート
コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	AIを利用したディープフェイクを認識するスキル	各種生成AI
コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	一次情報や複数情報源のすり合わせによるファクトチェックをするスキル	各種Webサービス
コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	ネット犯罪を察知し、回避するスキル	各種Webサービス
コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	SNSの適切な運用ができるスキル	各種Webサービス
コミュニケーション力	デジタルツールの使い方	情報の公開範囲を確認し、情報漏洩を未然に防ぐスキル	各種Webサービス
情報収集力	人工知能活用実践	人工知能を利用して情報収集するスキル	各種生成AI
情報収集力	人工知能活用実践	人工知能を利用してデータ分析するスキル	各種生成AI

表現力	人工知能活用 実践	人工知能を利用して文章を作成するスキル	各種生成AI
表現力	人工知能活用 実践	人工知能を利用して画像を作成するスキル	各種生成AI
表現力	人工知能活用 実践	人工知能を利用して音声を作成するスキル	各種生成AI
表現力	人工知能活用 実践	人工知能を利用して複合的に表現をするス キル	各種生成AI
表現力	人工知能活用 実践	人工知能を利用して高度なプレゼンテーショ ンを実施するスキル	各種生成AI
コミュニ ケーション 力	人工知能活用 実践	機械翻訳を用いたコミュニケーションに関す る基礎的な知識を身につける	各種生成AI
情報収集力	情報セキュリ ティ 概論	システムの信頼性評価指標を理解するスキル	
情報収集力	情報セキュリ ティ 概論	データベースの運用方法を理解することがで きるスキル	
情報収集力	情報セキュリ ティ 概論	ネットワークの基本的な設定などを理解する ことができるスキル	
表現力	情報セキュリ ティ 概論	知的財産権に関する法規を遵守するスキル	
コミュニ ケーション 力	情報セキュリ ティ 概論	マルウェアを理解し、被害を回避するスキル	
コミュニ ケーション 力	情報セキュリ ティ 概論	共通鍵暗号や公開鍵暗号を正しく利用するス キル	
コミュニ ケーション 力	情報セキュリ ティ 概論	情報セキュリティポリシーの重要性を理解し 守ることができるスキル	
コミュニ ケーション 力	情報セキュリ ティ 概論	情報セキュリティ啓発スキル	
コミュニ ケーション 力	情報セキュリ ティ 概論	データセンターやオフィスビルのセキュリ ティを守ることができるスキル	
コミュニ ケーション 力	情報セキュリ ティ 概論	サイバーセキュリティに関する法規を遵守す るスキル	

コミュニケーション力	情報セキュリティ概論	システムマネジメントを理解し、運用ルールに従うことができるスキル	
コミュニケーション力	情報セキュリティ概論	プロジェクトマネジメントを理解し、運用ルールに従うことができるスキル	
コミュニケーション力	情報セキュリティ概論	企業のシステム戦略を理解し、運用ルールに従うことができるスキル	
情報収集力	情報倫理と法	メディアごとの情報の特性と、受け取り側としての注意点を理解するスキル	
情報収集力	情報倫理と法	メディアリテラシーを理解した上での情報収集を実施するスキル	
表現力	情報倫理と法	知的財産関連法規を理解し、遵守するスキル	
コミュニケーション力	情報倫理と法	ネット時代のコミュニケーションに適したマナーを実行するスキル	
コミュニケーション力	情報倫理と法	悪意のある脅威、悪意のない脅威を理解し回避するスキル	
コミュニケーション力	情報倫理と法	ネット犯罪の仕組みを理解し、犯罪に巻き込まれないスキル	
コミュニケーション力	情報倫理と法	個人情報や他社のプライバシーを尊重したネットの利用をするスキル	
コミュニケーション力	情報倫理と法	情報倫理を意識した内部統制の運用に従うことができるスキル	
コミュニケーション力	情報倫理と法	デジタルデバйд対策に対応したITの活用を意識できるスキル	
コミュニケーション力	情報倫理と法	ユニバーサルデザインを理解し、運用することができるスキル	
コミュニケーション力	情報倫理と法	情報モラルを重んじ、他者の尊重をするSNSの利用ができるスキル	
情報収集力	データサイエンス概論	世の中にあるデータの種類、特性に応じて適切な分析を選択できるスキル	

情報収集力	データサイエンス概論	データの収集法について学習し、それがバイアスを持つ可能性について考察するスキル	
表現力	データサイエンス概論	基礎的な統計量を求め、データを適切な数値で要約するスキル	
表現力	データサイエンス概論	データを可視化することで、データ同士の関連や構造を発見するスキル	
表現力	データサイエンス概論	確率的な事象に対し、それを統計モデルに当てはめることで推測・予測を行うスキル	
表現力	データサイエンス概論	データの集計や可視化をデジタルツールを用いて実践するスキル	Googleスプレッドシート, Tableau
情報収集力	多言語ITコミュニケーション	機械翻訳を用いて、海外の言語で情報収集するスキル	各種機械翻訳ツール
情報収集力	多言語ITコミュニケーション	機械翻訳を用いて、特定テーマに対する国・文化ごとの議論を比較するスキル	各種機械翻訳ツール
情報収集力	多言語ITコミュニケーション	機械翻訳を用いて科学に関する最新の知見を収集するスキル	各種機械翻訳ツール
情報収集力	多言語ITコミュニケーション	ライセンス上の問題など、機械翻訳ツールを使う上での注意点を理解しているスキル	各種機械翻訳ツール
表現力	多言語ITコミュニケーション	機械翻訳を用いて、海外の言語で自身の考えを表現するスキル	各種機械翻訳ツール
表現力	多言語ITコミュニケーション	外国語でコミュニケーションする上での情報リテラシーについて学ぶ。	各種機械翻訳ツール
コミュニケーション力	多言語ITコミュニケーション	機械翻訳を用いて異なる言語でコミュニケーションする上での、文化的な背景を理解するスキル	各種機械翻訳ツール
コミュニケーション力	多言語ITコミュニケーション	多言語コミュニケーションのためにデジタルツールを活用するスキル	各種機械翻訳ツール
コミュニケーション力	多言語ITコミュニケーション	機械翻訳を用いて国際的なナレッジコミュニティに所属し、知識を交換するスキル	各種機械翻訳ツール
コミュニケーション力	多言語ITコミュニケーション	機械翻訳の利用を通して、SNSやVRで海外の人とコミュニケーションするスキル	各種機械翻訳ツール

情報収集力	機械翻訳実践	授業ごとのテーマについて、機械翻訳を利用して海外の文献から情報を収集するスキル	各種機械翻訳ツール
表現力	機械翻訳実践	複数の国の情報ソースから得られた情報を用いて特定テーマに関する理解をより広がりとし、その理解に基づいて自身の意見を醸成し、表現するスキル	各種機械翻訳ツール
コミュニケーション力	機械翻訳実践	機械翻訳等のデジタルツールを活用し、ITや異文化理解、日本文学、自然科学等、様々な分野に関して、情報を入手し理解を深め、そのプロセスを通して得られた気づきや考察をデジタルツールを介して他者と共有し、質問するスキル	各種機械翻訳ツール
情報収集力	プロジェクト実践	様々なデジタルツールを使い、複合的に情報収集するスキル	各種デジタルツール
表現力	プロジェクト実践	様々なデジタルツールを使い、複合的に表現するスキル	各種デジタルツール
コミュニケーション力	プロジェクト実践	様々なデジタルツールを使い、複合的にコミュニケーションをするスキル	各種デジタルツール

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (10ページ)

新	旧
教育方針2 デジタルツールの活用による横断的な学びの促進 教育方針1にて記載した通り、今後の複雑な社会の変化に対応するため、多様な学問分野の素養やものの見方を修得する必要がある。本学では横断的な学修を促進させるツールとしてデジタルツールを活用していく。特に米Open AIが発表したChatGPT(GPT-3.5)を中心とした人工知能ツールの活用は高等教育に新たな学びの可能性を示している。本学では何かを調べ、分析し、理解を深めるために人工知能ツールをはじめとしたデジタルツールを活用し、それによって効果的に新しい分野に飛び込むことが容易になると考える。 本学では高度情報社会の基盤となる数理・情報技術のリテラシーに加え、デジタルツールを活用した情報収集能力、表現力、コミュニケーション力を身につけ、人文社会科学を軸とする諸領域から広く学ぶことにより、多様なものの見方を修得した上で、デジタルツールを使って課題の解決を行う実践力を身につける機会を提供する。数理・情報技術のリテラシーと、人文社会の世界を理解する方法の横断的な学修	教育方針2 デジタルツールの活用による横断的な学びの促進 教育方針1にて記載した通り、今後の複雑な社会の変化に対応するため、多様な学問分野の素養やものの見方を修得する必要がある。本学では横断的な学修を促進させるツールとしてデジタルツールを活用していく。特に米Open AIが発表したChatGPT(GPT-3.5)を中心とした人工知能ツールの活用は高等教育に新たな学びの可能性を示している。本学では何かを調べ、分析し、理解を深めるために人工知能ツールをはじめとしたデジタルツールを活用し、それによって効果的に新しい分野に飛び込むことが容易になると考える。 本学では高度情報社会の基盤となる数理・情報技術のリテラシーに加え、デジタルツールを活用した情報収集能力、表現力、コミュニケーション力を身につけ、人文社会科学を軸とする諸領域から広く学ぶことにより、多様なものの見方を修得した上で、デジタルツールを使って課題の解決を行う実践力を身につける機会を提供する。数理・情報技術のリテラシーと、人文社会の世界を理解する方法の横断的な学修を、デジタルツールを活用

を、デジタルツールを活用する能力の涵養によって効果的に進めるカリキュラムを設計する。	する能力の涵養によって効果的に進めるカリキュラムを設計する。
--	--------------------------------

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (11ページ)

新		旧	
【表1】ZEN大学で活用するデジタルツールと導入の目的・効果		【表1】ZEN大学で活用するデジタルツールと導入の目的・効果	
導入の目的・効果	デジタルツールの例	導入の目的・効果	デジタルツールの例
多様なものの考え方について情報収集し、理解を深めるために導入	人工知能ツール（機械翻訳、画像生成、スライド作成、論点整理、プログラミング補助等）、表計算ソフト、プログラミング言語	多様なものの考え方について情報収集し、理解を深めるために導入	人工知能ツール（機械翻訳、画像生成、スライド作成、論点整理、プログラミング補助等）、表計算ソフト、プログラミング言語
デジタルツールを用いた表現力の養成	各種生成AI、データ視覚化ツール、ウェブサイト作成ツール、各種資料作成ソフト、各種デザインソフト	デジタルコミュニケーション能力の養成	オンラインコミュニケーションサービス、ZEN Study（フォーラム）、ビデオ会議システム、プレゼンテーションツール
デジタルコミュニケーション能力の養成	オンラインコミュニケーションサービス、ZEN Study（フォーラム）、ビデオ会議システム、プレゼンテーションツール	教育方法の提供	ZEN Study、ビデオ会議システム、オンラインコミュニケーションサービス
教育方法の提供	ZEN Study、ビデオ会議システム、オンラインコミュニケーションサービス		

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (12ページ)

新	旧
④ 養成する人材像 本学の教育方針に基づき、本学では学問領域を横断的に学び、複眼的な視野を獲得することで課題解決ができる人材を養成する。併せてデジタルツールを用いて情報収集し、表現、コミュニケーションができる人材を養成する。 複雑化した現代社会においては、様々な分野の知識を必要とする課題が発生し、その解決のためには複数の領域を横断する知識が求められる。しかし、複数の学問分野	④ 養成する人材像 本学の教育方針に基づき、本学では学問領域を横断的に学び、複眼的な視野を獲得することで課題解決ができる人材を養成する。併せてデジタルツールを用いて情報収集し、表現、コミュニケーションができる人材を養成する。 複雑化した現代社会においては、様々な分野の知識を必要とする課題が発生し、その解決のためには複数の領域を横断する知識が求められる。しかし、複数の学問分野

を深めるためには多大なリソースが求められる。デジタルツールは、多様な学問分野について学修し、それを自身の思考につなげるプロセスを支援できる。 しかしながら、このことはデジタルツールさえあれば、専門的分野の知識を獲得する必要がないことを意味しない。例えば、人工知能ツールを使って課題を解決するにあたり、専門分野の基礎的な概念と専門用語を知らなければ、人工知能ツールに質問もできなければ回答を理解することも難しい。また、人工知能ツールの出した答えが本当に正しいかも、専門分野の知識がなければ判定は困難であり、人工知能ツールがどこまで正しい答えを出せるかについては、その基礎的な原理を学ぶ必要があると考えられる。すべての分野において専門分野の知識を身につけることは現実的ではないにしても、必要に応じて特定の専門分野の知識をより深める経験が重要である。 また、高度情報化社会においてはデジタルコミュニケーションの能力は必須である。本学はテクノロジーを活用することで通信制大学の特性を活かし、デジタルツールを用いて情報収集、表現、コミュニケーションする力を養成する。 (略) ② 学位にふさわしい専門性とその修得 本学の学位にふさわしい専門性とは、数理・情報技術の基盤的なリテラシーに加え、デジタルツールを活用した情報収集能力、表現力、コミュニケーション力を身につけ、人文社会を軸とする諸領域から広く学ぶことにより多様なものの見方を修得した上で、これらを使って課題の解決を行う実践力を身につけることである。数理・情報のリテラシーと、人文社会の世界理解の方法の横断的な学修は、デジタルツールを活用する能力の涵養によって効果的に進められる。	を深めるためには多大なリソースが求められる。デジタルツールは、多様な学問分野について学修し、それを自身の思考につなげるプロセスを支援できる。 しかしながら、このことはデジタルツールさえあれば、専門的分野の知識を獲得する必要がないことを意味しない。例えば、人工知能ツールを使って課題を解決するにあたり、専門分野の基礎的な概念と専門用語を知らなければ、人工知能ツールに質問もできなければ回答を理解することも難しい。また、人工知能ツールの出した答えが本当に正しいかも、専門分野の知識がなければ判定は困難であり、人工知能ツールがどこまで正しい答えを出せるかについては、その基礎的な原理を学ぶ必要があると考えられる。すべての分野において専門分野の知識を身につけることは現実的ではないにしても、必要に応じて特定の専門分野の知識をより深める経験が重要である。 また、高度情報化社会においてはデジタルコミュニケーションの能力は必須である。本学はテクノロジーを活用することで通信制大学の特性を活かし、デジタルツールを用いて表現、コミュニケーションする力を養成する。 (略) ② 学位にふさわしい専門性とその修得 本学の学位にふさわしい専門性とは、数理・情報技術の基盤的なリテラシーに加え、デジタルツールを活用した情報収集能力、表現力を身につけ、人文社会を軸とする諸領域から広く学ぶことにより多様なものの見方を修得した上で、これらを使って課題の解決を行う実践力を身につけることである。数理・情報のリテラシーと、人文社会の世界理解の方法の横断的な学修は、デジタルツールを活用する能力の涵養によって効果的に進められる。
---	---

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (14ページ)

新	旧
② カリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施の方針) (略) CP 3-2「展開科目」における「多言語情報理解科目」は、「基盤リテラシー科目」「世界理解科目」の各領域を学生が主体的	② カリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施の方針) (略) CP 3-2「展開科目」における「多言語情報理解科目」は、「基盤リテラシー科目」「世界理解科目」の各領域を学生が主体的

に選択し、反復的に学修するための軸として、複数の学問領域に関してそれぞれの学びのプロセスをデジタルツールを活用して進めることを目的とする。様々な領域の多言語情報をデジタルツールを用いて収集・翻訳・分析、表現、コミュニケーションする力を涵養し、自身の関心に応じて幅広い領域を学修するコンピテンシーを身につける科目を配置する。	に選択し、反復的に学修するための軸として、複数の学問領域に関してそれぞれの学びのプロセスをデジタルツールを活用して進めることを目的とする。様々な領域の多言語情報をデジタルツールを用いて収集・翻訳・分析し、自身の関心に応じて幅広い領域を学修するコンピテンシーを身につける科目を配置する。
---	---

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (18ページ)

新	旧
DP 2 : デジタルツールを用いて情報収集、表現、コミュニケーションする力 ア DPの意義 複雑で変化の激しい社会において、一つの知識体系を身につけるだけでは社会を生き抜く上で十分でない。自身の置かれた環境や問題意識、好奇心に応じて、適切な複数の知識体系の引き出しを持ち、組み合わせて検討し活用する能力が求められる。 本学における情報収集、表現、コミュニケーションする力は具体的にはそれぞれ下記の能力を表す。 ・「デジタルツールを用いた情報収集力」：アジャイルな知識体系の選択と修得を容易にしたり、翻訳や要約作業を自動化することで特定の学問分野への障壁を下げる特性を持つ、デジタルツールを使って情報収集をする力。そのために、高度な検索スキルやインターネット上の論文を利用するスキル、フェイクニュースの存在の理解やファクトチェックを行うスキル、その前提となる正しくコンピューターやデータベース、情報ネットワークを活用するスキルなどを身につける。 ・「デジタルツールを用いた表現力」：編集が容易であるというデジタルツールの特性を活かして表現する力。これは例えば、デジタルツールを利用したレポート、プレゼンテーションの作成スキルに加えて、画像加工編集スキル、映像加工編集スキル、AIを利用した文章、画像、音声などの生成スキルのほか、表現の発信における知財関連法規などを遵守するリテラシーなども含まれる。 ・「デジタルツールを用いたコミュニケーション力」：デジタルツールを用いることにより、地理的要因や言語的な障壁など従来あった様々な障壁を超えてコミュニケーションする力。これはビデオ会議ツールの	DP 2 : デジタルツールを用いて情報収集、表現、コミュニケーションする力 ア DPの意義 複雑で変化の激しい社会において、一つの知識体系を身につけるだけでは社会を生き抜く上で十分でない。自身の置かれた環境や問題意識、好奇心に応じて、適切な複数の知識体系の引き出しを持ち、組み合わせて検討し活用する能力が求められる。

利用スキルのほか、SNSの運用スキルや、クラウドツールやチャットツールを使ったコラボレーション、サイバーセキュリティを意識したコラボレーション、機械翻訳を通じたコミュニケーションを行うスキルが該当する。

デジタルツールの活用によって、アジャイルな知識体系の選択と修得がより容易になる。人工知能ツールを用いた翻訳・要約作業は、特定の学問分野への参入障壁を下げる。また、そうして得た知識をデジタルツールを用いて様々な形式で表現することは、実践とフィードバックによる学修を押し進める。さらに、オンラインコミュニケーションサービスや授業内容に関して教員などに公開質問できるフォーラムなどのツールを用いれば、地理的要因など様々な理由で従来は困難であった、同じ問題意識と関心を持つ人々とのコミュニケーションが可能であり、オンラインでなければ実現できなかった議論と対話が可能になる。デジタルツールを用いて情報を収集し、表現し、コミュニケーションする能力は、社会の複雑性と変化の激しさに対応するためのアジャイルな学修を促進し、課題解決・ゴール達成のために必要であるため、これをDP 2 に設定する。

DP 2 によって、DP 1 とDP 3 を修得するための各分野の学修がより効果的になり、さらにDP 1 とDP 3 の修得過程で再度DP 2 に立ち返るといふ、反復的な学びが可能になる。

イ 養成の流れ

DP 2 に設定するデジタルツールを活用する能力は、必修科目から始めて、初学者にも入門しやすい養成の流れを設計している。ただし、PCの立ち上げやインターネットの接続、簡単なPCの操作などの基礎的な能力はあらかじめ求められる。AP 2 に定める基礎的デジタルスキルを入学の条件とし、すべての学生が効果的にDP2の学びに取り組めることを保証する。

CP 1 の「導入科目」において、必修科目の「ITリテラシー」「デジタルツールの使い方」「人工知能活用実践」により、ITに関する基本的な考え方や人工知能をはじめとするデジタルツールの使用法を学ぶ。**必修授業の履修を通して、学生はデジタルツールを用いた情報収集力、表現力、コ**

デジタルツールの活用によって、アジャイルな知識体系の選択と修得がより容易になる。人工知能ツールを用いた翻訳・要約作業は、特定の学問分野への参入障壁を下げる。また、そうして得た知識をデジタルツールを用いて様々な形式で表現することは、実践とフィードバックによる学修を押し進める。さらに、オンラインコミュニケーションサービスや授業内容に関して教員などに公開質問できるフォーラムなどのツールを用いれば、地理的要因など様々な理由で従来は困難であった、同じ問題意識と関心を持つ人々とのコミュニケーションが可能であり、オンラインでなければ実現できなかった議論と対話が可能になる。デジタルツールを用いて情報を収集し、表現し、コミュニケーションする能力は、社会の複雑性と変化の激しさに対応するためのアジャイルな学修を促進し、課題解決・ゴール達成のために必要であるため、これをDP 2 に設定する。

DP 2 によって、DP 1 とDP 3 を修得するための各分野の学修がより効果的になり、さらにDP 1 とDP 3 の修得過程で再度DP2に立ち返るといふ、反復的な学びが可能になる。

イ 養成の流れ

DP 2 に設定するデジタルツールを活用する能力は、必修科目から始めて、初学者にも入門しやすい養成の流れを設計している。ただし、PCの立ち上げやインターネットの接続、簡単なPCの操作などの基礎的な能力はあらかじめ求められる。AP 2 に定める基礎的デジタルスキルを入学の条件とし、すべての学生が効果的にDP2の学びに取り組めることを保証する。

CP 1 の「導入科目」において、必修科目の「ITリテラシー」「デジタルツールの使い方」「人工知能活用実践」により、ITに関する基本的な考え方や人工知能をはじめとするデジタルツールの使用法を学ぶ。これらの科目はデジタルツールを用いた学びを行う素地の修得を目的とする。

コミュニケーション力の全てを涵養する機会を得て、様々なデジタルツールを知り、使用法に関する基礎的な知識を学ぶ。これらの科目はデジタルツールを用いた学びを行う素地の修得を目的とする。

CP2の「多言語ITコミュニケーション」は、ITツールを用いて、様々な領域での情報理解やコミュニケーションを実行し、深めるための実践的な科目である。**必修である「多言語ITコミュニケーション」および情報領域の選択必修3科目のうちいずれかの履修を通して、学生は、デジタルツールを情報収集、表現、コミュニケーションに適切に利用する方法を学ぶ。**ここではツールは単なる道具ではなく、ツールの使用が世界を広げ、社会に対する解像度を上げるものとなることを体感する。

(中略)

CP3「展開科目」におけるCP3-1の情報領域の多岐にわたる科目群はデジタルツールに関する視野を身につけ、必要に応じて専門的な知識やスキルも修得できる。

そしてCP3-2の「多言語情報理解科目」からの選択必修6単位では、「基盤リテラシー科目」や「世界理解科目」に関連する複数の領域において、機械翻訳などのデジタルツールの使用により情報を入手し、理解を深め、コミュニケーションする力を身につけられる。

これらの授業の履修を通して、学生はデジタルツールを用いた情報収集力、表現力、コミュニケーション力について、目的に応じたデジタルツールの選択と活用方法を学ぶ。

CP3-4「社会接続科目」では実務者からデジタルツールに関する実践的なスキルを学び、自身のキャリアと紐付けてこれらの能力を修得する。

CP4の「プロジェクト実践」では、CP1からCP3にかけて培ったデジタルツールを用いた情報収集力や表現能力、コミュニケーション能力を用いて課題を分析し、テーマに対するプランを最終レポートの形で提出することで、これらの力を実践により身につける。**本学の集大成となる必修授業の履修により、学生は社会課題の解決に向けてデジタルツールを用いて、情報収集、表現、コミュニケーションし、課題に対して解決策を導く実践力を身につける。**

以上のカリキュラムの各段階で、身につける情報収集力、表現力、コミュニケーション力については、下記の表の通りであ

CP2の「多言語ITコミュニケーション」は、ITツールを用いて、様々な領域での情報理解やコミュニケーションを実行し、深めるための実践的な科目である。ここではツールは単なる道具ではなく、ツールの使用が世界を広げ、社会に対する解像度を上げるものとなることを体感する。

(中略)

CP3「展開科目」におけるCP3-1の情報領域の多岐にわたる科目群はデジタルツールに関する視野を身につけ、必要に応じて専門的な知識やスキルも修得できる。

そしてCP3-2の「多言語情報理解科目」からの選択必修6単位では、「基盤リテラシー科目」や「世界理解科目」に関連する複数の領域において、機械翻訳などのデジタルツールの使用により情報を入手し、理解を深め、コミュニケーションする力を身につけられる。

CP3-4「社会接続科目」では実務者からデジタルツールに関する実践的なスキルを学び、自身のキャリアと紐付けてこれらの能力を修得する。

CP4の「プロジェクト実践」では、CP1からCP3にかけて培ったデジタルツールを用いた情報収集力や表現能力、コミュニケーション能力を用いて課題を分析し、テーマに対するプランを最終レポートの形で提出することで、これらの力を実践により身につける。

る。

【表3】カリキュラム・ポリシーの各段階で身に付ける力（※欄外の注釈参照）

カリキュラムポリシーの各段階で身に付ける力の概要	（参考）情報収集力	表現力	コミュニケーション力
導入科目（CP1）：様々なデジタルツールを知り、使用法に関する基礎的な知識を学ぶ。	検索エンジンを通じて情報を収集や、人工知能等の活用方法を学ぶ。	デジタルツールとAIの活用を通じて、文字や画像、音声、レポート作成などの表現力を学ぶ。	ビデオ会議やSNS、ビジネスメールなどデジタル化された情報を理解、伝達する能力を身につける。
基礎科目（CP2）：デジタルツールを適切に利用する方法を学ぶ。	単に検索するだけでなく、情報の倫理や数理的側面を理解し、情報収集・分析する力を身につける。	倫理上問題ない表現や、データの可視化等に関する基礎スキルを学ぶ。	多言語コミュニケーションや異文化理解のためのデジタルツールの活用等を身につける。
展開科目（CP3）：目的に応じたデジタルツール	学問領域を横断的に学ぶため、目的に応じたアジャイルな情報	デジタルツールを紹介して自分の考えや疑問を表明する力を身に	様々な学問領域の学びに対して、デジタルツールを紹介して他

ルの選 択と活 用方法 を学 ぶ。	収集スキ ルを身に つける。	つける。	者と共 有、質問 する。	
卒業プ ロジェ クト（ CP 4） ： 社会課 題の解 決に向 けてデ ジタル ツール を用い る実践 力を身 につけ る。	社会課題 に関し て、適切 なデジタ ルツール を選択し て情報収 集・分析 する実践 力を身に つける。	社会課題 に対し て、自ら の考えを アウト プットを 通じて表 現し、解 決に向か う力	社会課題 に対し て、デジ タルツー ルを用い た双方向 のやりと りや フィード バックを 通じて実 践的なコ ミュニ ケーショ ンの力を 身につけ る。	
上記のCP 1 からCP 4 までの流れの中で、 学生はDP 2 の構成要素である情報収集 力、表現力、コミュニケーション力を身につける。				

※審査意見 3 の対応において「設置の趣旨等を記載した書類」に記載する表であるが、その記載箇所は審査意見 1 の対応においても記載する範囲であるため、審査意見 1 の新旧対照表においても記載するものとする。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類（資料）（37ページ）

新	旧
資料30 カリキュラム・ツリー デジタルツールを用いて情報収集、表現、 <u>コミュニケーション</u> する実践力を向上（ DP 2 の素地）	資料30 カリキュラム・ツリー デジタルツールを用いて情報収集、表現する 実践力を向上（DP 2 の素地）

(是正事項) 知能情報社会学部 知能情報社会学科

2. 設置の趣旨等を記載した書類(本文) P25では大学名称の設定理由が「全人格にわたる自己の研鑽、自然な真理を探究できる善なる人材を育成し、全社会に貢献することを示すため」とされているものの、「自然な真理」の意味するところや、なぜアルファベット表記なのか明確な説明がないことから、上記設定理由が養成する人材像や3つのポリシーにどのように反映されているのか明確ではない。また、学部・学科名称に用いられている「知能情報社会」の説明についても英語名称にある「Social Informatics」と齟齬があるように見受けられるため、大学名称等が教育研究上の目的にふさわしいものであるか判断できないため、大学名称等の設定理由について明確に説明すること。

(対応)

ZEN大学の名称は、漢字の「全、然、善」を表し、これらは本学で学生が享受できる学びを象徴するものである。

「全」は、デジタルツールを活かした幅広い学びによる全人格的な発展を表す。2006年に中央教育審議会が発表した「我が国の高等教育の将来像(答申)」は、「大学教育は、技能や知識の習得のみを目的とするのではなく、全人格的な発展の礎を築くためのものである」という基本的特性を明確にすることが重要である」としている。本学は多様な授業を通じた知識の修得を目的とする一方で、カリキュラム全体を通じた「全人格的な発展の礎」の構築を目的とする。「我が国の高等教育の将来像(答申)」は高等教育のグランドデザインの実現を念頭に置いたものであり、中央教育審議会が2018年に公表した「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」では、知識・技能と並びこれからの教育において重要なものとして「コンピテンシー」をあげている。同文書によると、「コンピテンシー」とは「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的リソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力」である。複雑化した変化の激しい社会の中で、どのような職についてもアジャイルに対応できる汎用的なコンピテンシーを身につけた学生が本学の目指す人材像であり、そのための多様な学びの主体的な選択によって、学生は「全人格的な発展」を達成できると考える。

こうした人材像の達成のため、「設置の趣旨等を記載した書類」では、3つの教育方針を立てた。第1が、「複眼的な視野を持ち、課題解決ができる学生の育成」である。複雑な社会での課題解決には、複数の学問分野からなる多様な知見の活用が求められる。そのため、本学では多様な学問領域からなる幅広いカリキュラムを編成し、さらに学生がそこから主体的に学修内容を決定できるようにサポートするクラス・コーチ(CC)を配置する。第2が、「デジタルツールの活用による横断的な学びの促進」である。本学では、デジタルツールを、教育方針1に示した横断的な学びを促進するためのものと捉える。学生が関心に応じて物事を調べ、分析し、理解を深め、さらに表現に繋げる各プロセスをデジタルツールによってサポートすることで、新たな学びが容易になり、生涯を通じて環境の変化に対応し、課題を解決するため学び続ける学生が育成できる。第3が、「デジタルツールの活用による多様な教育方法の提供とデジタルコミュニケーション能力の養成」である。本学は、授業料を抑えたオンライン教育の提供によって、地域、世帯年収、ジェンダーなどによって大学進学を妨げられてきた人々に、大学での学びの機会を提供する。オンライン教育の課題として、対面の大学のようなコミュニケーション経験の確保が難しい点が考えられるが、本学ではむしろオンラインの特性を活用し、各種プラットフォームを活用したオンラインコミュニケーションを促進する。オンライン上での教員からの適切なフィードバックやアカデミック・アドバイザー(AA)によるリメディアル教育の提供、また同じ関心や志を持つ学生との交流によって、幅広い学びが実現される。

教育方針に示したデジタルツールを活用した多様な学び、およびそれによる複雑化した社会を生き抜く人材育成のため、本学ではより具体的に、4つのDPを設定した。DP1「社会の基盤にある数理・情報技術とそれがもたらす影響力を理解する力」は、情報技術でつながった知能情報社会の基盤を理解する能力を意味する。DP3「社会や世界を形作ってきた学問分野の蓄積を適切に咀嚼し、世界を深く理解し、主体的な見解を紡ぎ出す力」は、多様な学問分野が世界を見る前提、およびそこから見た世界の多様性を理解し、複雑で捉えどころのない世界を適切に捉えるための能力である。さらに、DP1とDP3を達成するための柱として、DP2には「デジタルツールを用いて情報収集、表現、コミュニケー

ションする力」を設定した。DP 1 と DP 3 を達成するためには、複数の知識体系を身につける必要がある。そのための情報収集、表現、コミュニケーションなどの各プロセスをデジタルツールでサポートすることで、DP 1 と DP 3 を修得するための各学問分野の学びがより効果的になる。これは、在学時のみならず、卒業後にも環境や関心に応じて学び続けるために求められる能力となる。DP 1 から DP 3 を達成するための学びを継続した結果、多様なものの考え方を身につけ、課題解決に繋げるための DP 4 「文理に偏らない多様なものの考え方を手がかりに、課題を分析し、解決する力」の学びへと結実する。DP 1 から DP 4 までの学びを体系的かつ主体的に実現するため、本学では各 DP の基礎となる必修科目である「導入科目」、各領域からの選択必修である「基礎科目」、より自身の学修を深めるための選択科目である「展開科目」の流れで徐々に主体的に学びを選択するカリキュラムを設定し、さらにそのまとめとして、DP 4 を達成するための必修科目である「卒業プロジェクト科目」を配置した。

上記の学修の流れは、各学問領域の専門性を深めるのみならず、社会の基盤を理解し、多様なものの考え方を身につけ、さらにそのプロセスを促進するためのデジタルツールの活用方法を学び、課題解決の糸口を見つけるためのものでもあり、これによってどのような環境でも活躍できるための、グランドデザインで指摘する「コンピテンシー」を修得するために設定した。この能力が、複雑な社会を生き抜くための、本学の考える「全人格的な発展の礎」であり、ZEN 大学という名称が表現する「全」はこのカリキュラムの全体像を通して育成される人材を意味する。

ZEN が表す二つ目の漢字である「然」は、設置の趣旨等を記載した書類（本文）において、「自然な真理を探究」と説明した。「自然な真理を探究」という表現は「然」の意味を表すものとして誤解を招くものであるため、これを「自然の真理」の探究に改め、「自然の真理の探究」の意図するところを以下のとおり詳述する。

「然」はありのままの世界を指し、「自然の真理の探究」は、情報や数理の理解によってその基盤についての造詣を深め、同時に人文社会系諸領域の多様なものの考え方を修得して世界理解の方法の引き出しを増やすことを指す。日本語の「然」は、あるがまま、そのままという意味をもつ。自然も同様であり、古代ギリシャの自然哲学は、自然現象の説明から恣意的な「神々」を排し、ありのままの自然そのものの中にその原理を探究するところから始まった（中島 2008）【資料 1】。本学の学部名に含まれる「知能情報社会」は、情報によって繋がった現代社会のありのままの姿全体を理解すること、そしてそこで生き抜いていける学生を育てるためのカリキュラムを整備するという大学像を象徴している。

こうした理念を達成するため、本学では文理横断的な学びのあり方を、カリキュラムを通して実現する。まず DP 1 に、「社会の基盤にある数理・情報技術とそれがもたらす影響力を理解する力」を設定した。DP 1 を達成するための必修授業に「IT リテラシー」と「現代社会と数学」を設定し、また選択必修として「情報セキュリティ概論」、「情報倫理と法」、「データサイエンス概論」および「数学的思考とは何か」「数学史」、「現代社会とサイエンス」のいずれかの履修を課している。その背景として、情報技術で繋がった知能情報社会においては、情報を理解し、またその活用法に習熟することが、世界そのものの理解へと繋がる点がある。また、情報技術は数理的原理で稼働するものであり、目に見えない自然の摂理を掘り起こす数理への理解力を同時に涵養することで、学生は知能情報社会の基盤を理解できる。こうしたカリキュラムを通じた情報と数理の理解は、デジタルツールの活用法と限界を把握することにつながる。また、数理的なものの考え方の把握は、汎用性の高い思考モデルとなる。さらに、情報技術の発展は目覚ましく、新たな技術やツールが目の前に現れた時、その具体的なメカニズムは理解できなくとも、どのような数理モデルによって動いているかのイメージがつくことで、当該技術の活用に関する理解が可能になり、翻ってその技術と共に変化する社会の理解にもつながる。DP 1 の学びは、学生が世界の全体を理解し、その理解を状況に合った活動に繋げるための基盤となる。

さらに、DP 3 では、人文社会領域の様々な学問分野における、多様なものの見方を修得する。世界はありのままのものとして存在するが、複雑な世界をそのまま理解することを妨げる様々な思考様式や枠組みから、人間は自由ではない。複雑で変化の激しい世界、およびそこで生まれる様々な課題や関心を理解するためには、人間は特定の方法で世界を理解しており、またその世界の理解の仕方は多様であると受け入れ、むしろその引き出しを増やすことが肝要である。多様な学問領域は、それぞれに特定の世界の見方・方法論を表

している。よって、人文社会系の様々な学問領域からなる科目を用意し、さらに学問領域によって世界の見方は変わるということを理解するため、必修科目に「人文社会入門」を配置した。

以上に示したとおり、本学は文理を横断しながら、世界のありのままの姿に接近するためのカリキュラムを設計している。情報によって繋がった世界という現実がありつつも、その全体像をそのまま理解することは難しく、知能情報社会を生き抜くためにはその基盤を理解するための情報・数理と、世界の多様な見方を身につけるための人文・社会科学の素養を絶えず深め、広げ続ける必要がある。世界のありのままの姿全体を理解し、それによって激しい環境の変化に対応するために主体的に学び続ける姿を、「自然の真理の探究」と表現した。この探究は学部で4年間だけでなく生涯を通じて継続するべきものであり、そのために、DP2によって、デジタルツールを活用して自身の学びを促進する能力の修得も同時に達成する。

上記の「全」と「然」に表される文理横断的なカリキュラムの修得によって、本学はZENの三つ目の意味である「善」なる人材の育成を目指す。本学の学びの終着点であるDP4「分離に偏らない多様なものの考え方を手がかりに、課題を分析し、解決する力」を修得するためには、文理を跨いだ学びが求められる。DP1の修得を通して社会の基盤としての情報・数理を理解し、情報技術の活用法・限界を把握し、また汎用的な思考モデルが身に付く。DP3の修得を通して、目の前に現れた課題や関心事について検討するための多様なものの考え方が身に付く。さらに、DP2を通して、デジタルツールを活用して、環境の変化に対応し続ける力が身に付く。これらの修得は、卒業後の仕事や社会貢献で汎用的に通用する課題解決能力へと結実し、社会の中で活躍し、社会を変え、社会に求められる「善なる人材」が育成できると考える。

以上のように、「ZEN」は、複雑で変化の激しい社会で生き抜く人材の育成という、本学の理念を表す名称である。そのために求められる力はどのような環境でも活用できる汎用性のある能力であり、この能力を有する学生の活躍する範囲は国内にとどまらず、海外にも広がると考えられる。よって、より国際的通用性のある名称として、アルファベットの「ZEN大学」を採用した。また、「ZEN」が「全、然、善」を表現している点を広く理解してもらうため、特に海外向けの広報や情報公開では、ZENは日本語で全、然、善を意味すること、およびその教学上の意義の説明を徹底する。

上記に示した、情報技術でつながった複雑で変化の激しい社会を生き抜くためのカリキュラムを配置しているため、本学の学部・学科名称は「知能情報社会学部」としている。また、英語の学部・学科名称は"social informatics"としており、これは本学が情報を基盤とした社会の理解や、その中で生き抜くためのデジタルツールの活用方法の修得を目的としているためである。

Klingは、Social Informaticsの学際的な特性を強調しつつ、その特徴として情報技術をはじめとしたテクノロジーが社会のあり方を決定するという技術決定論ではなく、社会と技術が共に発展する視点を有している点を挙げている(Kling 2000)【資料2】。また、この視点は、情報技術の活用、情報システムの構築から情報システムと相互作用する社会の分析まで、非常に広い領域に活用される(Smutny and Vehvor 2020)【資料3】。本学では、カリキュラムの中で社会の基盤となる情報・数理と、様々な視点を獲得するための人文社会系科目の双方を全ての学生が学ぶ。複雑で先行きの見通しが立ちづらい知能情報社会において、デジタルツールの活用に親しみ、またその基盤としての数理の感覚を身につけると同時に、実際にデジタルツールを活用しながら生きていく社会について多くの授業を履修することで文理横断的に学び、社会での問題解決に繋げていくという「知能情報社会学部」の名称に込めた本学の理念はsocial informaticsの特徴と合致すると考え、英語の学部・学科名を「social informatics」とした。

(新旧対照表) 基本計画書 (1ページ)

新	旧
大学の目的 ZEN大学は、教育基本法及び学校教育法に基づき、学術の中心として、全世界に通用する日本の本格的オンライン大学として、いつでもどこでも学ぶ意欲のある全ての学生に対して知能情報社会に求められる実践的大学教育を受ける機会を提供することにより、全人格にわたる自己の研鑽、自然の真理を探究できる善なる人材を育成し、全社会に貢献することを目的とします。	大学の目的 ZEN大学は、教育基本法及び学校教育法に基づき、学術の中心として、全世界に通用する日本の本格的オンライン大学として、いつでもどこでも学ぶ意欲のある全ての学生に対して知能情報社会に求められる実践的大学教育を受ける機会を提供することにより、全人格にわたる自己の研鑽、自然な真理を探究できる善なる人材を育成し、全社会に貢献することを目的とします。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (27 ページ)

新	旧
3 大学、学部・学科等の名称及び学位の名称 (1) 大学の名称 (略) 理由：大学の名称は、<u>漢字の「全、然、善」を表し、これらは本学で学生が享受できる学びを象徴するものである。</u> <u>全世界に通用する日本の本格的オンライン大学として、いつでもどこでも学ぶ意欲のあるすべての学生に対して知能情報社会に求められる実践的大学教育を受ける機会を提供することにより、複雑で変化の激しい社会で通用する能力の修得による「全人格にわたる自己の研鑽」、数理・情報の観点からの社会基盤の理解及び世界理解する視点の涵養による「自然の真理」の探究によって、文理を横断した学びを活かして社会課題解決する「善なる人材」を育成し、全社会に貢献することを示すためこの名称とする。</u> また、英語の名称は「ZEN University」とする。 (2) 学部・学科の名称 学部・学科の名称は、特定の学問領域にこだわらず、人工知能をはじめとしたデジタルツールを活用しながら、高度に情報化した社会の基盤となる情報数理と、複雑で変化の激しい社会に対応するための多様な世界理解の方法を主体的に修得した人材の育成を行うことから、名称を「知能情報社会	3 大学、学部・学科等の名称及び学位の名称 (1) 大学の名称 (略) 理由：大学の名称は、全世界に通用する日本の本格的オンライン大学として、いつでもどこでも学ぶ意欲のあるすべての学生に対して知能情報社会に求められる実践的大学教育を受ける機会を提供することにより、全人格にわたる自己の研鑽、自然な真理を探究できる善なる人材を育成し、全社会に貢献することを示すためこの名称とする。 また、英語の名称は「ZEN University」とする。 (2) 学部・学科の名称 学部・学科の名称は、特定の学問領域にこだわらず、人工知能をはじめとしたデジタルツールを活用しながら、高度に情報化した社会の基盤となる情報数理と、複雑で変化の激しい社会に対応するための多様な世界理解の方法を主体的に修得した人材の育成を行うことから、名称を「知能情報社会

学部」とする。 また、英語の名称は、<u>デジタルツールを活用しながら文理を横断して学び、社会での問題解決に繋げるという理念に合致する</u>「Faculty of Social Informatics」「Department of Social Informatics」とする。	学部」とする。 また、英語の名称は「Faculty of Social Informatics」「Department of Social Informatics」とする。
--	--

(是正事項) 知能情報社会学部 知能情報社会学科

3. 審査意見1の通りディプロマ・ポリシーと他のポリシー等の妥当性及整合性が判断できないため、教育課程の妥当性を判断することができない。このため、関連する他の審査意見への対応を踏まえて、本学科の教育課程が、適正なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識や能力等に係る教育が網羅され、体系性が担保された上で、適切に編成されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

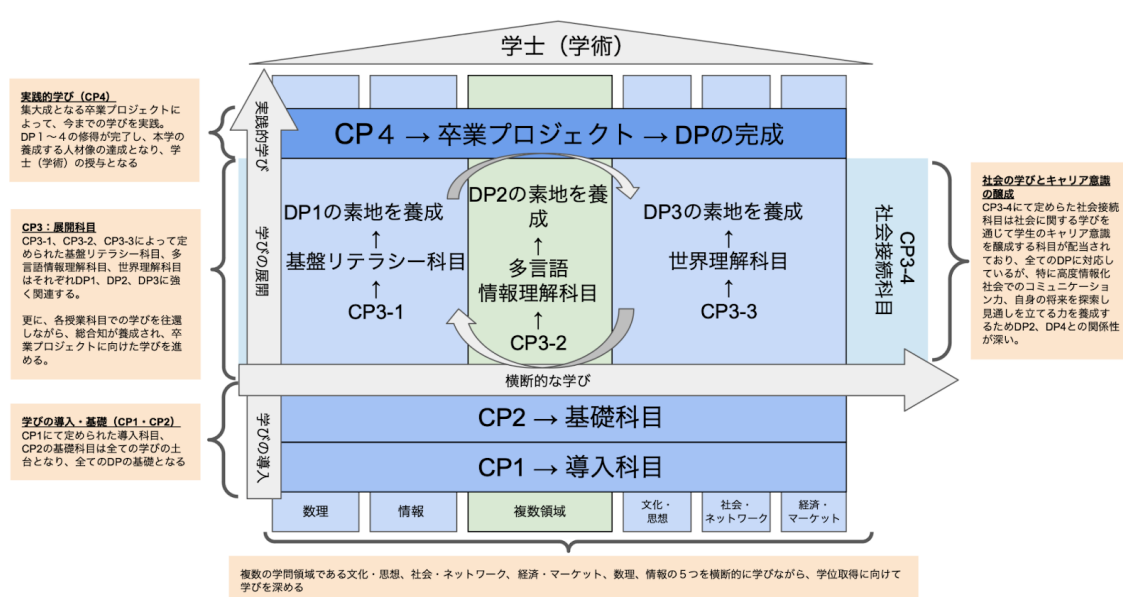
(対応)

1 DP2に関する修得すべき知識や能力等

「設置の趣旨」に記載の通り、審査意見1で指摘を受けたDP2は、文理を横断した幅広い学びを促進するためのデジタルツールの活用を指すものであり、本学での学び全体を促進する上で重要である。

本学では、数理・情報技術のリテラシーに加え、デジタルツールを活用した情報収集能力、表現力を身につけ、人文社会科学を軸とする諸領域から広く学ぶことにより、多様なものの見方を修得した上で、デジタルツールを使って課題の解決を行う実践力を身につける機会を提供する。

【図】ZEN大の学びの全体像の簡易図



上記の図に、本学における学びの全体像を示す。学生は図の下から上へと学びを進め、カリキュラムの修了をもって、学士（学術）を授与される。本学の学びの特徴の一つは学修する領域の幅広さにあり、上図の通り、「数理」、「情報」、「文化・思想」、「社会・ネットワーク」、「経済・マーケット」を主として、学生はCP1からCP4へと学びを深め、それによって4つのDPを達成する立て付けとなっている。

本カリキュラム構成は、複雑で変化の激しい知能情報社会を生き抜く能力を身につけるためのものであり、まず、あらゆるモノとヒトが情報技術によってつながった知能情報社会においては、DP1に示す「数理」「情報」に関する理解が、単に数式やテクノロジーに習熟するだけでなく、社会の基盤の理解につながる。その上で、DP3に示した多様な世界

理解の方法を主に「文化・思想」「社会・ネットワーク」「経済・マーケット」の科目群の履修によって修得し、それによって知能情報社会において学生を取り囲む環境が変化しても、学生はその環境を理解し、対応するための世界理解の引き出しを多く身につける。「数理」「情報」によって社会の基盤を理解し（DP 1）、「文化・思想」「社会・ネットワーク」「経済・マーケット」によって世界を見る多様な視点を身につける（DP 3）学びを、学生はカリキュラム全体を通して反復的・横断的に体験する。

このような幅広い反復的・横断的な学びを担保するものが、DP 2「デジタルツールを用いた情報収集、表現、コミュニケーションする力」である。DP 1とDP 3は多様な学問分野の学びによって達成されるため、学生は幅広い知識体系に触れる。しかし、多様な学問分野それぞれの学びを進めることは、時間と労力を要する。DP 2は、大きなリソースが求められる本学の学びを、デジタルツールによって効果的に進めるために設定しており、本学のカリキュラムの柱に位置付けられる。DP 2に含まれる「情報収集」「表現」「コミュニケーション」は、関心に応じて新たな学びに飛び込むにあたっての各プロセスを表しており、それぞれのプロセスをデジタルツールによって支援することで、学生はより効果的に学び、新しい分野に恐れずに飛び込めるようになる。よって、本学の学びにおけるデジタルツールの位置付けは、デジタルツールに直接答えを求めるのではなく、学生個人が学びを追求し、主体的に答えを探究する中で、そのプロセスでデジタルツールを活用するものである。学生は、卒業後も各ライフステージで様々な課題に直面し、さらに変化の激しい社会においてはその予見可能性が低く、大学で得た知識だけでは対応が難しいと考えられる。しかし、デジタルツールを用いて情報収集し、表現し、さらに地理的制約ではなく関心に基づいてつながった人と意見を交換するというデジタルツールによるコミュニケーションの特性を活用することは、どのような課題に直面してもその解決に向けてアジャイルに調べ、学び続ける能力そのものにつながり、この点でどのような社会の変化が起きても有用なものである。本学では、変化の激しい社会にアジャイルに対応するため、学びの各プロセスにデジタルツールを活用する力こそが、DP 2に示す、学生に求められる実践力であるとする。この実践力の修得を通して、DP 4に示した課題を解決する力の涵養が可能になる。

上述のように、DP 2は導入科目から展開科目にかけてのDP 1とDP 3の反復的・横断的学びの柱となり、さらにDP 4に結実するものである。しかし、「設置の趣旨等を記載した書類」では、DP 2の構成要素である「情報収集」「表現」「コミュニケーション」する力を十分に説明できていなかった。よって、以下、審査意見 1 の対応でのDP 2の明確化を受け、「情報収集」「表現」「コミュニケーション」する力のそれぞれが、カリキュラムを通してCP 1からCP 4へとどのように涵養されるかについて詳細に説明する。

まず、審査意見 1 の対応に記載した通り、DP 2の「デジタルツールを用いて情報収集、表現、コミュニケーションする力」は、次のような能力、実践力をさす。

（１）「デジタルツールを用いた情報収集力」

アジャイルな知識体系の選択と修得を容易にしたり、翻訳や要約作業を自動化することで特定の学問分野への障壁を下げる特性を持つ、デジタルツールを使って情報収集をする力。そのために、高度な検索スキルやインターネット上の論文を利用するスキル、フェイクニュースの存在の理解やファクトチェックを行うスキル、その前提となる正しくコンピューターやデータベース、情報ネットワークを活用するスキルなどを身につける。

（２）「デジタルツールを用いた表現力」

編集が容易であるというデジタルツールの特性を活かして表現する力。これは例えば、デジタルツールを利用したレポート、プレゼンテーションの作成スキルに加えて、画像加

工編集スキル、映像加工編集スキル、AIを利用した文章、画像、音声などの生成スキルのほか、表現の発信における知財関連法規などを遵守するリテラシーなども含まれる。

（３）「デジタルツールを用いたコミュニケーション力」

デジタルツールを用いることにより、地理的要因や言語的な障壁など従来あった様々な障壁を超えてコミュニケーションする力。これはビデオ会議ツールの利用スキルのほか、SNSの運用スキルや、クラウドツールやチャットツールを使ったコラボレーション、サイバーセキュリティを意識したコラボレーション、機械翻訳を通じたコミュニケーションを行うスキルが該当する。

２ DP 2に係る教育の体系性と網羅性

DP 2 に対して、教育課程が、修得すべき知識や能力等に係る教育が網羅され、体系性が担保された上で、適切に編成されていることを、本学のカリキュラムポリシーの段階に応じて説明する。まず、教育課程の各段階で上記の３つの力についての体系的な学びの段階について、概観を以下に示す。

【表】カリキュラムポリシーの各段階で身に付ける力の概要

カリキュラムポリシーの各段階で身に付ける力の概要	（参考）情報収集力	表現力	コミュニケーション力
導入科目（CP 1）：様々なデジタルツールを知り、使用法に関する基礎的な知識を学ぶ。	検索エンジンを通じた情報収集や、人工知能等の活用方法を学ぶ。	デジタルツールとAIの活用を通じて、文字や画像、音声、レポート作成などの表現力を学ぶ。	ビデオ会議やSNS、ビジネスメールなどデジタル化された情報を理解、伝達する能力を身につける。
基礎科目（CP 2）：デジタルツールを適切に利用する方法を学ぶ。	単に検索するだけでなく、情報の倫理や数理的側面を理解し、情報収集・分析する力を身につける。	倫理上問題ない表現や、データの可視化等に関する基礎スキルを学ぶ。	多言語コミュニケーションや異文化理解のためのデジタルツールの活用等を身につける。
展開科目（CP 3）：目的に応じたデジタルツールの選択と活用方法を学ぶ。	学問領域を横断的に学ぶため、目的に応じたアジャイルな情報収集スキルを身につける。	デジタルツールを介して自分の考えや疑問を表明する力を身につける。	様々な学問領域の学びに対して、デジタルツールを介して他者と共有、質問する。
卒業プロジェクト（CP 4）：社会課題の解決に向けてデジタルツールを用いる実践力を身につける。	社会課題に関して、適切なデジタルツールを選択して情報収集・分析する実践力を身につける。	社会課題に対して、自らの考えをアウトプットを通じて表現し、解決に向かう力	社会課題に対して、デジタルツールを用いた双方向のやりとりやフィードバックを通じて実践的なコミュニケーションの力を身につける。

また、修得すべき知識や能力は「主要授業科目」のうちDP 2に強く関連する以下の科目（カリキュラムマップ上でDP 2に「◎」を付した科目）によって養成することができる。
 なお、CP 1の該当科目4科目は全て必修であり、CP 2の該当科目のうち、「多言語ITコミュニケーション」は必修、その他3科目は1科目以上を選択必修としている。またCP 3の該当科目6科目のうち、3科目以上を選択必修とし、CP 4の該当科目である「プロジェクト実践」は必修科目としている。

【表】CPと科目概要

CP 1	科目名：アカデミックリテラシー 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： 本科目の目的は、学生が大学で学ぶための方法を身につけ、自立した学修者になることにあ る。具体的には、（１）ZEN大学の履修制度や ツールの使い方、（２）大学で学ぶための基礎 的な技法（情報収集、レポート作成、口頭発表 の方法とツール）、（３）他者と協働して課題 解決するための方法について学び、今後四年間 の学びの方針を確立する。	到達目標： 本授業を通して、ZEN大学で学ぶことの意義・大 学のカリキュラム制度について理解する。また、 デジタルツールを用いた情報収集能力、表現能 力、コミュニケーション能力を身につける。さら に、学生自身が課題や目標を設定し、新たな答え を探していくための方法を学修する。またこれら のスキルを用い、それぞれの学生が自立した学び を計画・実践できることを目指す。
CP 1	科目名：ITリテラシー 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： ITの必要性を理解し、基本知識を身につけ、イン ターネットやAIの活用について学ぶ。メディア の知識やデジタル市民としての教育法も学び、 コンピューターや通信の仕組みを知ること で、社会人としてシステムを適切に活用する力を身 につける。さらにシステム開発や経営、関連法 律にも触れ、ITに関する幅広い知識を得ることが できる。	到達目標： 社会人としてITを適切に活用するための知識を得 ることで、デジタルツールを用いた情報収集能 力、表現能力、コミュニケーション能力を用いて 課題を解決するための力を養うことを目標とす る。具体的に科目の中ではインターネットやAIの 活用、システム開発のプロセスの知識、経営や法 律に至るまでの幅広い視野を得て実践的なITスキ ルを磨き、最終的に情報処理推進機構のITパス ポート試験合格相当以上の知識を得る。
CP 1	科目名：デジタルツールの使い方 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： 高度に発達した昨今の情報社会では、どのよう な組織においてもデジタルツールが活用されて	到達目標： オフィスツール・業務自動化ツール・グラフィッ クツール・映像編集ツール・AIツールなどデジタ

	おり、デジタルツールを扱える人材の重要性が日に日に高まっている。デジタルツールの使い方では、様々なデジタルツールの基本的な使い方を実際に手を動かしながら学んでいく。また、情報モラル・情報セキュリティ・ネット犯罪等の対処法についても学んでいく。	ルツールの基本的な使い方を学び、効果的に活用する方法を修得することを目標とする。また、情報収集・発信方法、情報モラル・セキュリティについても学修する。本科目の学修を通じて、効率的な情報処理やコミュニケーション、プロジェクト管理、デザイン、映像制作などのスキルが身につく。
CP 1	科目名：人工知能活用実践 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：○	
	科目概要： 近年、人工知能ツールは目覚ましい発展を遂げており、日常生活や業務で人工知能ツールを活用することは、現代社会で活躍するためには必須である。本科目では、人工知能ツールを用いた演習、ツールの使い方に関する考察、アウトプットについての議論を行い、人工知能ツールを賢く使うための基本を身に付ける。思考の整理、データの収集および分析、マルチメディアの作成などに積極的に人工知能を活用する姿勢を身につける。	到達目標： （１）思考の幅を広げ、深さを増すために、アイデア出しや抜け漏れチェックの道具として人工知能を活用できる。 （２）データに基づいた意思決定を行うために、人工知能を用いてデータの収集・分析・可視化ができる。 （３）言語以外の情報でアイデアを表現するために、人工知能を用いて画像・音楽・アニメーションなどを作成できる。
CP 2	科目名：情報セキュリティ概論 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： 情報化が高度に進み、一人で複数台インターネットデバイス所持する現代社会において、情報セキュリティの重要性はますます高まっている。アカウントの乗っ取り被害やフィッシング詐欺など、情報セキュリティに関わる脅威は、身近な問題となりつつある。この授業では会社や普段の生活で必要な情報セキュリティの基礎知識と、その対応策を幅広く学ぶ。	到達目標： 情報セキュリティの基本的な概念や原則、さまざまな脅威とその対策についての理解を深める。学校や職場、日常生活でITツールを活用する際に、適切な情報セキュリティを適用できるようになる。情報セキュリティマネジメント試験の試験範囲に準じた幅広い知識を修得することを目指す。
CP 2	科目名：情報倫理と法 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： 情報技術の発展とともに、それは、私たちに多	到達目標： 本科目の学修を通じて、受講生は、現代社会にお

	くの恩恵をもたらしている一方で、トラブルや犯罪の発生など負の側面もある。この科目では、情報倫理の基礎から始め、情報通信社会の進化、メディアリテラシー、情報技術とセキュリティ、インターネットと犯罪、個人情報とプライバシー、企業と情報倫理等、様々な角度から情報倫理のあり方と関連する法について学修する。	ける情報通信技術がもたらす光と影を理解し、情報倫理の重要性を理解し、他者を尊重し、それに関連する法的知識を身につけて、適切に行動できる能力を獲得することができるようになることを目標としている。
CP 2	科目名：データサイエンス概論 情報収集力：○ 表現力：◎ コミュニケーション力：○	
	科目概要： データサイエンスの基礎知識を身につけることを目標にする。基礎的知識の中に個々の技術はもちろん含まれるが、それに加えて現代のデータサイエンスが成立した歴史的過程や統計学の考え方などのコンセプト理解も含めることにする。また、近年のホットトピックである、データ可視化の方法、統計学的因果推論的思考法についても取り扱うことで、データの表面的な理解でなく、構造を深く理解することができるよう講義を設計する。また講義の各所では適切にAIツールを用いる。AIツールは便利なものだが、その適切な使用には、統計学・機械学習の基礎知識が必要であることを学ぶ。	到達目標： 基本的な分析法に習熟し、基礎的な集計、可視化、統計モデルを作成できる。データから何らかの知見を抽出し、真実を明らかにしていく過程に面白さを見出し、自ら積極的にデータ活用を志向する態度をもつ。
CP 2	科目名：多言語ITコミュニケーション 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： この授業では、最新のITツールを使った多言語コミュニケーションに重点を置いて学ぶ。第一にここでは異なる言語間での意思疎通の要点を学び、国際コミュニケーションの手法を探る。次に実際の海外のソフトウェアツールの利用や開発の現場で使われるコミュニケーション方法、ライセンスや利用規約の理解、海外の情報収集、海外の最新のサイエンス情報の取得方法など、多岐にわたる具体的なスキルや知識を習得する。	到達目標： この授業を履修した学生が、まず異なる言語間でのコミュニケーションをスムーズに行うための基礎スキルを身につけることを目標とする。また、具体的なITツールの使用スキルを身につけ、海外のソフトウェアツールや最新の科学情報などを自由に取得できるようになる。
CP 3	科目名：機械翻訳実践（英語読解・作文）	

	情報収集力：○ 表現力：◎ コミュニケーション力：○	
	科目概要： 本科目では機械翻訳を英語学習のツールとして用いて、翻訳、逆翻訳などの方法を用いて英語そのものについての理解を深めさせ、今後ますます多様化していく英語世界の中で正しくかつ能動的に英語を運用する力を高める。また、その中で機械翻訳の現状、利点、限界を体験させ、機械翻訳を正しく用いる方法を実践的に修得させる。主にリーディングとライティングのスキルの向上を目指す。	到達目標： 本科目では英語リーディング、ライティングにおいて機械翻訳を用いることを通して、学修の場、またはビジネスなどの実践の場において機械翻訳をツールとして正しく用いる力を修得する。その中で、動詞、時制、句、節といった重要テーマについての理解を深め、これからの世界でさらに加速していく英語そのものの多様化と機械翻訳の進化に対応するための、俯瞰的な英語力を修得する。
CP 3	科目名：機械翻訳実践（情報） 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： 情報技術やプログラミングに関する情報やチュートリアルは多数存在するが、その多くは英語で書かれており、これらのリソースを活用できていない日本語話者も多い。本科目では、機械翻訳を用いてこれらの英文資料を読解し、新しい知識を身につけるとともに、文化的差異について考察する。また、二次創作活動としての翻訳に挑戦し、日本語での表現力を養うとともに、日本の文化や言語に潜むバイアスに向き合う。	到達目標： 情報技術やプログラミングに関する新しい知識を修得するために、機械翻訳を補助ツールとして用い、英語資料を正しく読解できる。機械翻訳を他言語読解のツールとして用い、英語に限らず、多様な外国語文献に触れ、文化の違いや歴史的背景などを理解しようとする姿勢が身についている。また、これらの活動を通して得られた気づきや考察を他者と共有し、共に学ぼうとする態度を身につけている。
CP 3	科目名：機械翻訳実践（異文化理解） 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： 異文化理解に関する複数の外国語（英語、フランス語など）による論文、書籍、記事等を機械翻訳を読解ツールとして用いて読み込み、日本語の情報ソースに限らない幅広い情報源からの知識吸収の方法を提示する。また、その背後にある文化的差異や文脈を意識的に発見・解釈し、身近な環境がもたらすバイアスに気づく機会を与える。外国語文献の読解、読解から得られた新たな知識、視点をさらに自らの興味・関	到達目標： 機械翻訳を多様な外国語文献の読解のツールとして用い、一次ソースからの情報収集能力を身につけ、異文化理解における知識や見識を深める方法の幅を広げることができる。また、読解した内容の背後にある文化的差異や文脈に気づくことで、現実世界を批判的に深く理解し、主体的な見解を形成する視点を養うことを目標とする。

	心に結びつけて深化させる過程を指導する。	
CP 3	科目名：機械翻訳実践（自然科学） 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： 機械翻訳を外国語の読解ツールとして用いて読み込み、国内の情報源に限られない多角的な視点から問題状況を分析する方法を提示する。広範な科学分野の論文、書籍、記事等を読み込み知見を深めるとともに、どのように科学知識にアクセスするかの手段を教示する。また科学論文や雑誌記事の背後にある歴史や文化的差異を意識的に発見・解釈し、バイアスに気づく機会を与える。	到達目標： 機械翻訳を活用することで、ネイティブのような英語読解能力がなくとも、科学誌ネイチャーの論文冒頭部の要旨や、他分野の科学者向けの解説などは読めることを体験してもらう。科学知識にどのようにアクセスするか理解し、また機械翻訳を活用することで、自らの英語力も高めて欲しい。
CP 3	科目名：機械翻訳実践（日本研究） 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： 本授業では、海外の研究機関や研究者が運営する日本研究関連の英文資料データベース・ポータルサイトの学術的な文献を読解ツールを用いて読み込み、日本の資料のみに限らない幅広い情報源からの知識吸収の方法を提示する。そうすることで、文化的差異や文脈を意識的に発見・解釈し、無意識的なバイアスに気づく機会を与える。また、外国語文献の読解から得られた知識、視点をさらに自らの興味・関心に結びつけて深化させる過程を指導する。	到達目標： 機械翻訳を外国語文献の読解のツールとして用い、一次ソースからの情報収集能力を身につけることで、日本研究における知識や見識を深める方法の幅を広げることができる。また、外国語で書かれた日本研究の文献を読解することで、文化的差異や文脈に気づき、日常の世界を批判的に捉えることができると同時に、主体的な見解を形成する視点を養うことを目標とする。
CP 3	科目名：機械翻訳実践（法学） 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： 複数の地域に共有される法的トピックに関して英語などの外国語による論文、書籍、記事等を機械翻訳を読解ツールとして用いて読み込み、日本語の情報ソースに限らない幅広い情報源からの知識吸収の方法を提示する。また、その背	到達目標： 機械翻訳を多様な外国語文献の読解のツールとして用い、一次ソースからの情報収集能力を身につけ、異なる地域の法や法実践に対する知識や見識を深める方法の幅を広げることができる。また、読解した内容の背後にある文化的差異や文脈に気

	後にある文化的・政治的差異や文脈を意識的に発見・解釈し、身近な環境がもたらすバイアスに気づく機会を与える。外国語文献の読解読解から得られた新たな知識、視点をさらに自らの興味・関心に結びつけて深化させる過程を指導する。	づくことで、現実世界を批判的に深く理解し、主体的な見解の形成する視点を養うことを目標とする。
CP 4	科目名：プロジェクト実践 情報収集力：◎ 表現力：◎ コミュニケーション力：◎	
	科目概要： 実社会で起こっている問題や課題を取り上げ、課題解決のステップを学びながら仮説と検証を繰り返し、学問分野に捉われず学修者自身が多様なデジタル・ツールを駆使し解決策を追求していく授業である。講義と演習を組み合わせ、テーマに関係のある事柄を中心とした学生同士の対話を繰り返し、様々な考えに触れながら検討・分析する。最終的には自ら考えた解決策を発表・フィードバックを行い、学生同士が学びを深めていくアクティブラーニングである。	到達目標： 実社会で活躍する人材になるために、不確実で変化の激しい社会の中で課題となっている問題背景を適切に理解し、正解のない答えを自ら発見して解決する能力を養う。個々の能力や適性にあった専門的な知識とともに、様々な文化や価値観・倫理を理解し、先端のデジタルツール活用して情報を収集・編集し、適切なデータを扱いながら自ら主体的に未来像を打ち立て表現できるようになる。

以下に、教育課程のより詳細な説明により、以上の科目で修得すべき知識や能力等に係る教育が網羅され、体系的が担保された上で、カリキュラムが適切に編成されていることを説明する。

（１）導入科目（CP１）

様々なデジタルツールを提示し、その使用法を学ぶ中で、情報収集力、表現力、コミュニケーション力について基礎的な力を身につける。

【表】カリキュラムポリシーの各段階で身に付ける力の概要と導入科目（CP１）

カリキュラムポリシーの各段階で身に付ける力の概要	導入科目（CP１）： 様々なデジタルツールを提示し、その使用法を学ぶ中で、情報収集力、表現力、コミュニケーション力について基礎的な知識を身につける。 主要な科目：アカデミックリテラシー、ITリテラシー、デジタルツールの使い方、人工知能活用実践
（参考）情報収集力	養われる力：学修システムの利用やインターネットと検索エンジンを通じた情報収集、フェイクニュースの察知、論文の検索などを行う力を身につける。また、人工知能やコンピューターネットワークの特性理解とその活用方法も修得する。

表現力	養われる力：デジタルツールとAIの活用を通じて、理論的な知識と表現のための技術的なスキルを修得する。特に文字や画像、音声などを生成するAIの活用や、レポート作成、プレゼンテーション作成、ウェブ上の情報発信、画像・動画編集といったデジタル表現力を鍛える。
コミュニケーション力	養われる力：デジタルのコミュニケーション力を身につけるため、ビデオ会議やSNS、ビジネスメールなどデジタル化された情報を正確に理解し、適切に伝達するための知識を学ぶ。また、必要となるサイバーセキュリティに対する理解と対応、デジタルツールによる協働作業の方法についても学ぶ。
評価方法	確認レポート及び単位認定試験の中でデジタルツールについてのスキルに関する内容を入れ、成績評価に反映。
授業で使用するツールの例	ZEN Study、Webブラウザ、KinoDen、ProQuest Research Library、CINII、J-STAGE、各種生成AI、各種Googleサービス、Wordpress、Adobe Illustrator、Adobe Photoshop、Adobe Premiere Pro、Zoom、各種SNS、各種Webサービス等

CP1には、本学の学びの入口となる必修科目を配置しており、中でも「アカデミックリテラシー」、「ITリテラシー」、「デジタルツールの使い方」、「人工知能活用実践」を通して、全ての学生がCP 1におけるDP 2の達成に繋がる授業を履修する。

「アカデミックリテラシー」では、学生はビデオ会議システムやZEN Studyなど授業を受けるために必要な各種デジタルツールの使い方、初歩的な論文検索や資料作成方法、生成AIの活用法などを学ぶとともに、インターネットやAIを活用する上での注意点や倫理的側面についても考える機会を得る。「ITリテラシー」では、デジタルツールを用いた情報収集力、表現力、コミュニケーション力を修得するため、「アカデミックリテラシー」と比べてより深く、インターネットやAIの活用方法、システム開発のプロセスに関する知識を修得するとともに、本学のDP 2の定義に含まれるデジタルツール活用の法的側面に関しても理解を深める。「デジタルツールの使い方」では、Google WorkspaceやWordpressなどの実践的スキルを実際に手を動かしながら修得して情報収集能力、表現力、コミュニケーション能力を涵養し、さらに実践のなかで情報モラルや情報セキュリティに関する知識を身につける。「人工知能活用実践」では、多様なデジタルツールの中でも人工知能にフォーカスし、人工知能を情報の収集や分析・アイデア出しや文書校正・画像やアニメーションの制作に活用する方法について学ぶ。これらの必修授業全体を通して、学生はデジタルツールを用いた情報収集力・表現力・コミュニケーション力全てを網羅した学修を実施する。各科目で具体的に身につけられるスキルや活用方法を修得できるツールについては、審査意見 1 への対応を参照されたい。CP 1 に位置付けられる必修授業を受けることで、学生はDP 2 の内容を網羅的に学び、DP 1、DP 3 を達成するための多様な学びをデジタルツールのサポートを受けながら進め、最終的にDP 4 を修得する基礎力を身につける。

(2) 基礎科目 (CP2)

デジタルツールの適切な利用方法を学び、使いこなす中で、情報収集や、表現、コミュニケーションする力を身につける。具体的には以下の通り。

【表】カリキュラムポリシーの各段階で身に付ける力の概要と基礎科目（CP2）

カリキュラムポリシーの各段階で身に付ける力の概要	基礎科目（CP2）： デジタルツールの適切な利用方法を学び、使いこなす中で、情報収集や、表現、コミュニケーションする力を身につける。 主要な科目：情報セキュリティ概論、情報倫理と法、データサイエンス概論、多言語ITコミュニケーション
（参考）情報収集力	養われる力：単に検索するだけでなく、より高度な情報収集のための力として、情報の倫理や数理的側面を理解し、システムの信頼性、データベースの運用、ネットワーク設定など、データを活用するための基本的な理解と、その情報を適切に収集・分析する能力を身につける。
表現力	養われる力：より安全で倫理上問題のない表現のために、知的財産権に関する法規遵守やデータサイエンスの基礎スキル等について学ぶ。また、データを使った表現として基礎的な統計量の求め方、データの可視化、確率的な事象に対する統計モデルの導入など、データを分析し表現する能力も身につける。
コミュニケーション力	養われる力：デジタルツールを利用した適切なコミュニケーションを行うために、サイバーセキュリティや情報セキュリティに関する法規の知識や理解、情報倫理やマナーの理解や、多言語コミュニケーションや異文化理解のためのデジタルツールの活用等を身につける。
評価方法	確認レポート及び単位認定試験の中でデジタルツールについてのスキルに関する内容を入れ、成績評価に反映。
授業で使用するツールの例	必要に応じたネットワーク、データベースなどを処理するソフトウェア、Googleスプレッドシート、Tableau、各種機械翻訳ツール、AIツール、ZEN Study

CP2では、DP2に含まれる3つの力を、学生はより実践に引きつけて学修する。上記の能力は、主に選択必修科目である「情報セキュリティ概論」、「情報倫理と法」、「データサイエンス概論」と、必修科目である「多言語ITコミュニケーション」を通じて涵養される。選択必修科目では、これらの科目では、学生はデータの倫理的側面や数理的側面を理解し、適切に情報を収集・分析する「情報収集力」、安全・倫理に配慮した上でデータを可視化する「表現力」、デジタルツールを用いてコミュニケーションを行う上でセキュリティや情報倫理について学ぶ「コミュニケーション力」などが身に付く。また、必修科目である「多言語ITコミュニケーション」では、デジタルツールを用いた情報収集・表現・コミュニケーションの具体的な形として、デジタルツールを用いてどのように日本語以外の言語を用いた各種活動を実践するかについて学ぶ。プログラマ向けナレッジコミュニティやSNS・VRを用いた国際コミュニケーションについて学び、実際に言語的障壁がデジタルツールによってどのように克服されているかを理解するとともに、海外の時事情報の修得方法や、デジタルツールを用いて表現する際の注意点についても修得する。本科目を通して、学生はデジタルツールを用いた国際コミュニケーションに習熟するだけでなく、CP3以降の学びに進み、多様な知見を取り入れる上でデジタルツールがどのように有効であるかを学ぶ。

（３）発展科目（CP３）

目的に応じたデジタルツールの使用により、情報収集、表現、コミュニケーションする力を身につけ、様々な学問領域に関する知識修得や理解を深める。

オンラインコミュニケーションサービスやZEN Study上の質疑応答プラットフォームであるフォーラムでの授業内容に関する質問に加え、ライブ映像科目において授業に関するリアルタイムの文章による質問が行える環境を完備し、双方向のコミュニケーションを実施するほか、レポートや成果物も成績評価に入れ、表現力やコミュニケーション力の涵養を図る。具体的には以下の通り。

【表】カリキュラムポリシーの各段階で身に付ける力の概要と導入科目（CP３）

カリキュラムポリシーの各段階で身に付ける力の概要	展開科目（CP３）： 目的に応じたデジタルツールの使用により、情報収集、表現、コミュニケーションする力を身につけ、様々な学問領域に関する知識修得や理解を深める。 主要な科目：機械翻訳実践
（参考）情報収集力	養われる力：機械翻訳等のデジタルツールの使用を通じ、ITや異文化理解、日本文学、自然科学等、様々な学問領域について、目的に応じた情報収集を適切に行えるスキルを身につける。
表現力	養われる力：機械翻訳等のデジタルツールを活用して収集した情報を適切に理解するために、デジタルツールを介して質問する等、自分の考えを表現する力を身につける。
コミュニケーション力	養われる力：機械翻訳等のデジタルツールを活用し、ITや異文化理解、日本文学、自然科学等、様々な分野に関して、情報を入手し理解を深め、そのプロセスを通して得られた気づきや考察をデジタルツールを介して他者と共有し、質問する力を身につける。
評価方法	レポート・成果物および発言・発表（授業中の質問投稿、授業中の質問の内容）を通じて、デジタルツールについてのスキルに関する内容を入れ、成績評価に反映。
授業で使用するツールの例	必要に応じた機械翻訳ツールやAIツール、ZEN study

CP３は、本学の自由で幅広い学びを象徴するものであり、学生は各々の関心や将来の目標に応じて、クラス・コーチ（CC）と相談しながら自主的に履修科目を選択する。学生はデジタルツールを活用した目的に応じた情報収集・自身の考えの表現・その他者との共有により、文理を問わない多様な学問領域の学びを進める。そうした学びのプロセスを担保するものとして、展開科目において、全６科目から３科目を選択する「機械翻訳実践」がある。

「機械翻訳実践」は、機械翻訳を多様な外国語文献の読解のツールとして用い、一次ソースからの情報収集能力を身につけるとともに、そこでの学びから学生が考えた内容を確認レポートとして表現し、またZEN Study上でリアルタイムに教員に質問することでデジタルツールを用いたコミュニケーションの機会ともなる。「機械翻訳実践」で扱う分野は法学、情報、異文化理解、自然科学、日本研究と幅広く、多くの学生が今まで専門的に触れたことのない領域の理解においてデジタルツールを活用する能力を実際の情報収集・

表現・コミュニケーションを通して修得することを目的としている。「機械翻訳実践」のうち最低でも3科目を履修することで、学生は幅広い学びにおけるデジタルツールの有効性を理解する。この点で、社会の基盤としての情報・数理を理解する能力であるDP1と、人文社会を含めた多様な学問分野の世界の見方を修得する能力であるDP3の学びを促進するものとしてのDP2を修得する上で肝要な科目である。

（４）卒業プロジェクト（CP4）

課題に対して学生が個々のアプローチに応じて適切なデジタルツールを選択し、必要な情報収集を行い、課題の分析等の目的のために表現し、コミュニケーションによって自らの考えをブラッシュアップし、課題解決に繋げる力を身につける。具体的には以下の通り。

【表】カリキュラムポリシーの各段階で身に付ける力の概要と導入科目（CP4）

カリキュラムポリシーの各段階で身に付ける力の概要	卒業プロジェクト（CP4）： 課題に対して学生が個々のアプローチに応じて適切なデジタルツールを選択し、必要な情報収集を行い、課題の分析等の目的のために表現し、コミュニケーションによって自らの考えをブラッシュアップし、課題解決に繋げる力を身につける。 主要な科目：プロジェクト実践
（参考）情報収集力	養われる力：適切なデジタルツールの使用により、個々の目的に応じた情報収集・分析を効果的に行う実践力を身につける。
表現力	養われる力：課題に対して、デジタルツールの適切な選択と利用によりその解決に向かうために、様々な形式を用いた表現力を、実践的に身につける。
コミュニケーション力	養われる力：課題の解決に向け、学生が個々の分析や課題解決に向けたアウトプットのブラッシュアップのために、デジタルツールを用いてコミュニケーションする実践力を身につける。
評価方法	レポート・成果物および相互フィードバックを通じて、デジタルツールについてスキルに関する内容を入れ、成績評価に反映。
授業で使用するツールの例	プロジェクト実践のテーマに応じて必要とされるデジタルツールを個々の学生が選択

CP4の「プロジェクト実践」は、DP1からDP3までを修得した学生がDP4を身につけるための科目である。本科目を通して、学生はDP1に示した社会の基盤としての情報・数理の理解、DP2に示したデジタルツールの活用法、DP3に示した不確実な社会を見る多様な視点を活用し、DP4に示した課題を解決する能力を涵養する。本科目を通して、学生は課題の背景を理解するためにデジタルツールを用いたデータの収集と分析を実施し、さらに最終的な成果物をデジタルツールを用いて表現し、オンライン上で教員や他の履修生からのフィードバックを得る。情報収集・表現・コミュニケーションを通して学びを促進していくというDP2の要点の総決算となり、それによってDP1からDP4までの学びが達成される。

以上、審査意見1で回答したDP2の詳細について改めて概観するとともに、DP2の構成要素である「情報収集力」「表現力」「コミュニケーション力」がそれぞれカリキュラ

ムの体系性の中にどのように位置付けられ、また学生はそれをどのように身につけるかを詳述した。本学のカリキュラムは、不確実で変化の激しい社会において環境に対応しながら活躍できる能力を学生が身につけられるように、文理横断的な学びを提供する。しかし、複数の学問領域を4年間で幅広く学ぶためには時間的なコストが高く、「どのように学ぶか」それ自体の学修が求められる。本学でのDP2に表されるデジタルツールを活用する能力は、全てが情報技術で繋がった知能情報社会を生き抜く上でそれ自体が重要であるだけでなく、環境の変化に応じて学生が卒業後も学び続けるために不可欠なものである。幅広い学問領域を効果的に学修するため、学生は「情報収集」、「表現」、「コミュニケーション」という学びの各プロセスでデジタルツールを活用する。多様な知識体系について学ぶための情報収集力に加えて、学びに基づいた自身の意見や考えの表現、教員や学生とのコミュニケーションも大切な学修のプロセスである。また、知能情報社会においてデジタルツールはただの道具ではなく、それ自体が社会の基盤となるという特性から、倫理的・法的・社会的な側面からも自由ではない。「情報収集」、「表現」、「コミュニケーション」の各プロセスにおける倫理的な争点やセキュリティの問題についても必修科目・選択必修科目を通じて全ての学生が学ぶ機会が与えられ、上記の学びを促進するためのデジタルツールの役割と合わせて、デジタルツールを活用して文理を横断しながら柔軟に学べるカリキュラムを整備する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (18ページ)

新	旧
DP2：デジタルツールを用いて情報収集、表現、コミュニケーションする力 ア DPの意義 複雑で変化の激しい社会において、一つの知識体系を身につけるだけでは社会を生き抜く上で十分でない。自身の置かれた環境や問題意識、好奇心に応じて、適切な複数の知識体系の引き出しを持ち、組み合わせて検討し活用する能力が求められる。 <u>本学における情報収集、表現、コミュニケーションする力は具体的にはそれぞれ下記の能力を表す。</u> ・「<u>デジタルツールを用いた情報収集力</u>」：<u>アジャイルな知識体系の選択と修得を容易にしたり、翻訳や要約作業を自動化することで特定の学問分野への障壁を下げる特性を持つ、デジタルツールを使って情報収集をする力。そのために、高度な検索スキルやインターネット上の論文を利用するスキル、フェイクニュースの存在の理解やファクトチェックを行うスキル、その前提となる正しくコンピューターやデータベース、情報ネットワークを活用するスキルなどを身につける。</u> ・「<u>デジタルツールを用いた表現力</u>」：<u>編集が容易であるというデジタルツールの特性を活かして表現する力。これは例えば、デジタルツールを利用したレポート、プレゼンテーションの作成スキルに加えて、画像加工編集スキル、映像加工編集スキル、AIを利用した文章、画像、音声などの生成スキルのほか、表現の発信における知財関連法規などを遵守す</u>	DP2：デジタルツールを用いて情報収集、表現、コミュニケーションする力 ア DPの意義 複雑で変化の激しい社会において、一つの知識体系を身につけるだけでは社会を生き抜く上で十分でない。自身の置かれた環境や問題意識、好奇心に応じて、適切な複数の知識体系の引き出しを持ち、組み合わせて検討し活用する能力が求められる。

るリテラシーなども含まれる。

・「デジタルツールを用いたコミュニケーション力」：デジタルツールを用いることにより、地理的要因や言語的な障壁など従来あった様々な障壁を超えてコミュニケーションする力。これはビデオ会議ツールの利用スキルのほか、SNSの運用スキルや、クラウドツールやチャットツールを使ったコラボレーション、サイバーセキュリティを意識したコラボレーション、機械翻訳を通じたコミュニケーションを行うスキルが該当する。

デジタルツールの活用によって、アジャイルな知識体系の選択と修得がより容易になる。人工知能ツールを用いた翻訳・要約作業は、特定の学問分野への参入障壁を下げる。また、そうして得た知識をデジタルツールを用いて様々な形式で表現することは、実践とフィードバックによる学修を推し進める。さらに、オンラインコミュニケーションサービスや授業内容に関して教員などに公開質問できるフォーラムなどのツールを用いれば、地理的要因など様々な理由で従来は困難であった、同じ問題意識と関心を持つ人々とのコミュニケーションが可能であり、オンラインでなければ実現できなかった議論と対話が可能になる。

デジタルツールを用いて情報を収集し、表現し、コミュニケーションする能力は、社会の複雑性と変化の激しさに対応するためのアジャイルな学修を促進し、課題解決・ゴール達成のために必要であるため、これをDP 2 に設定する。

DP 2 によって、DP 1 とDP 3 を修得するための各分野の学修がより効果的になり、さらにDP 1 とDP 3 の修得過程で再度DP 2 に立ち返るといふ、反復的な学びが可能になる。

イ 養成の流れ

DP 2 に設定するデジタルツールを活用する能力は、必修科目から始めて、初学者にも入門しやすい養成の流れを設計している。ただし、PCの立ち上げやインターネットの接続、簡単なPCの操作などの基礎的な能力はあらかじめ求められる。AP 2 に定める基礎的デジタルスキルを入学の条件とし、すべての学生が効果的にDP 2 の学びに取り組めることを保証する。

CP 1 の「導入科目」において、必修科目の「ITリテラシー」「デジタルツールの使い方」「人工知能活用実践」により、ITに関する基本的な考え方や人工知能をはじめとするデジタルツールの使用法を学ぶ。必修授業の履修を通して、学生はデジタルツールを用いた情報収集力、表現力、コミュニケーション力の全てを涵養する機会を得て、様々なデジタルツールを知り、使用法に関する基礎的な知識を学ぶ。これらの科目はデジタルツールを用いた学びを行う素地の修得を目的とする。

デジタルツールの活用によって、アジャイルな知識体系の選択と修得がより容易になる。人工知能ツールを用いた翻訳・要約作業は、特定の学問分野への参入障壁を下げる。また、そうして得た知識をデジタルツールを用いて様々な形式で表現することは、実践とフィードバックによる学修を推し進める。さらに、オンラインコミュニケーションサービスや授業内容に関して教員などに公開質問できるフォーラムなどのツールを用いれば、地理的要因など様々な理由で従来は困難であった、同じ問題意識と関心を持つ人々とのコミュニケーションが可能であり、オンラインでなければ実現できなかった議論と対話が可能になる。

デジタルツールを用いて情報を収集し、表現し、コミュニケーションする能力は、社会の複雑性と変化の激しさに対応するためのアジャイルな学修を促進し、課題解決・ゴール達成のために必要であるため、これをDP 2 に設定する。

DP 2 によって、DP 1 とDP 3 を修得するための各分野の学修がより効果的になり、さらにDP 1 とDP 3 の修得過程で再度DP 2 に立ち返るといふ、反復的な学びが可能になる。

イ 養成の流れ

DP 2 に設定するデジタルツールを活用する能力は、必修科目から始めて、初学者にも入門しやすい養成の流れを設計している。ただし、PCの立ち上げやインターネットの接続、簡単なPCの操作などの基礎的な能力はあらかじめ求められる。AP 2 に定める基礎的デジタルスキルを入学の条件とし、すべての学生が効果的にDP 2 の学びに取り組めることを保証する。

CP 1 の「導入科目」において、必修科目の「ITリテラシー」「デジタルツールの使い方」「人工知能活用実践」により、ITに関する基本的な考え方や人工知能をはじめとするデジタルツールの使用法を学ぶ。

これらの科目はデジタルツールを用いた学びを行う素地の修得を目的とする。

CP2の「多言語ITコミュニケーション」は、ITツールを用いて、様々な領域での情報理解やコミュニケーションを実行し、深めるための実践的な科目である。**必修である「多言語ITコミュニケーション」および情報領域の選択必修3科目のうちいずれかの履修を通して、学生は、デジタルツールを情報収集、表現、コミュニケーションに適切に利用する方法を学ぶ。**ここではツールは単なる道具ではなく、ツールの使用が世界を広げ、社会に対する解像度を上げるものとなることを体感する。

CP3「展開科目」におけるCP3-1の情報領域の多岐にわたる科目群はデジタルツールに関する視野を身につけ、必要に応じて専門的な知識やスキルも修得できる。

そしてCP3-2の「多言語情報理解科目」からの選択必修6単位では、「基盤リテラシー科目」や「世界理解科目」に関連する複数の領域において、機械翻訳などのデジタルツールの使用により情報を入手し、理解を深め、コミュニケーションする力を身につけられる。

これらの授業の履修を通して、学生はデジタルツールを用いた情報収集力、表現力、コミュニケーション力について、目的に応じたデジタルツールの選択と活用方法を学ぶ。

CP3-4「社会接続科目」では実務者からデジタルツールに関する実践的なスキルを学び、自身のキャリアと紐付けてこれらの能力を修得する。

CP4の「プロジェクト実践」では、CP1からCP3にかけて培ったデジタルツールを用いた情報収集力や表現能力、コミュニケーション能力を用いて課題を分析し、テーマに対するプランを最終レポートの形で提出することで、これらの力を実践により身につける。**本学の集大成となる必修授業の履修により、学生は社会課題の解決に向けてデジタルツールを用いて、情報収集、表現、コミュニケーションし、課題に対して解決策を導く実践力を身につける。**

以上のカリキュラムの各段階で、身につける情報収集力、表現力、コミュニケーション力については、下記の表の通りである。

【表3】カリキュラム・ポリシーの各段階で身につける力

カリキュラ	(参考) 情報収集	表現力	コミュニケーション力

CP2の「多言語ITコミュニケーション」は、ITツールを用いて、様々な領域での情報理解やコミュニケーションを実行し、深めるための実践的な科目である。

ここではツールは単なる道具ではなく、ツールの使用が世界を広げ、社会に対する解像度を上げるものとなることを体感する。**また、本学における学びはすべてオンライン、デジタルな学修環境の中で行われ、アドバイザーとのやりとりや授業のレポート課題提出に至るまでのプロセスが全てデジタルツールを介したものになる。この積み重ねにより、デジタルコミュニケーションにおいて、様々な概念や考え方を伝える表現力が養われる。**

CP3「展開科目」におけるCP3-1の情報領域の多岐にわたる科目群はデジタルツールに関する視野を身につけ、必要に応じて専門的な知識やスキルも修得できる。

そしてCP3-2の「多言語情報理解科目」からの選択必修6単位では、「基盤リテラシー科目」や「世界理解科目」に関連する複数の領域において、機械翻訳などのデジタルツールの使用により情報を入手し、理解を深め、コミュニケーションする力を身につけられる。

CP3-4「社会接続科目」では実務者からデジタルツールに関する実践的なスキルを学び、自身のキャリアと紐付けてこれらの能力を修得する。

CP4の「プロジェクト実践」では、CP1からCP3にかけて培ったデジタルツールを用いた情報収集力や表現能力、コミュニケーション能力を用いて課題を分析し、テーマに対するプランを最終レポートの形で提出することで、これらの力を実践により身につける。

ムポリ シーの 各段階 で身に 付ける 力の概 要	力		
導入科 目（CP 1）： 様々な デジタル ツールを知 り、使 用法に 関する 基礎的 な知識 を学 ぶ。	検索エン ジンを通 じた情報 収集や、 人工知能 等の活用 方法を学 ぶ。	デジタル ツールと AIの活用 を通じ て、文字 や画像、 音声、レ ポート作 成などの 表現力を 学ぶ。	ビデオ会議や SNS、ビジネ スメールなど デジタル化さ れた情報を理 解、伝達する 能力を身に つける。
基礎科 目（CP 2）： デジタ ルツールを適 切に利 用する 方法を 学ぶ。	単に検索 するだけ でなく、 情報の倫 理や数理 的側面を 理解し、 情報収 集・分析 する力を 身につけ る。	倫理上問 題ない表 現や、 データの 可視化等 に関する 基礎スキ ルを学 ぶ。	多言語コミュ ニケーション や異文化理解 のためのデジ タルツールの 活用等を身に つける。
展開科 目（CP 3）： 目的に 応じた デジタ ルツール の選 択と活 用方法 を学	学問領域 を横断的 に学ぶた め、目的 に応じた アジャイルな情報 収集スキ ルを身に つける。	デジタル ツールを 介して自 分の考え や疑問を 表明する 力を身に つける。	様々な学問領 域の学びに対 して、デジタ ルツールを介 して他者と共 有、質問す る。

<u>ふ。</u>			
<u>卒業プロジェクト（CP4）</u> ： <u>社会課題の解決に向けてデジタルツールを用いる実践力を身につける。</u>	<u>社会課題に関して、適切なデジタルツールを選択して情報収集・分析する実践力を身につける。</u>	<u>社会課題に対し、自らの考えをアウトプットを通じて表現し、解決に向かう力</u>	<u>社会課題に対して、デジタルツールを用いた双方向のやりとりやフィードバックを通じて実践的なコミュニケーションの力を身につける。</u>

上記のCP1からCP4までの流れの中で、学生はDP2の構成要素である情報収集力、表現力、コミュニケーション力を身につける。

(是正事項) 知能情報社会学部 知能情報社会学科

4. 多様な学びを提供するカリキュラムであることから、設置の趣旨等を記載した書類(本文) P57～59において、クラス・コーチ(CC)が履修指導、学修指導、通信技術指導、クラス運営を行うとされているが、以下の点が明確になるように説明するとともに、必要に応じて改めること。

(1) 入学時には必須面談が行われるものの、それ以降の面談は希望者のみが対象であると見受けられる。学生の関心が多岐にわたることやカリキュラム選択の自由度が高いこと、授業の多くがオンラインで行われることに鑑みれば、このような履修指導で全ての学生が本学の定めるディプロマ・ポリシーを達成できるか疑義があることから、入学時及び在学期間を通して、学位の授与に向けた組織的な履修指導が十分に行われることを明確にするか、必要に応じて適切に改めること。

(2) 学生2万人に対してCCは100名であることから、一人当たり多数の学生を受け持つことと思われる。CCの業務である履修指導、学修指導、通信技術指導、クラス運営を行うためには、一定の知識や研修が必要と考えられるが、これらに関する説明がされていないため、履修指導等が適切に実施できるか判断できない。このため、CCの具体的な業務内容、業務量、頻度、CC採用時に求められる資質、採用前後の研修内容、処遇及び教員との連携体制を明確に説明すること。

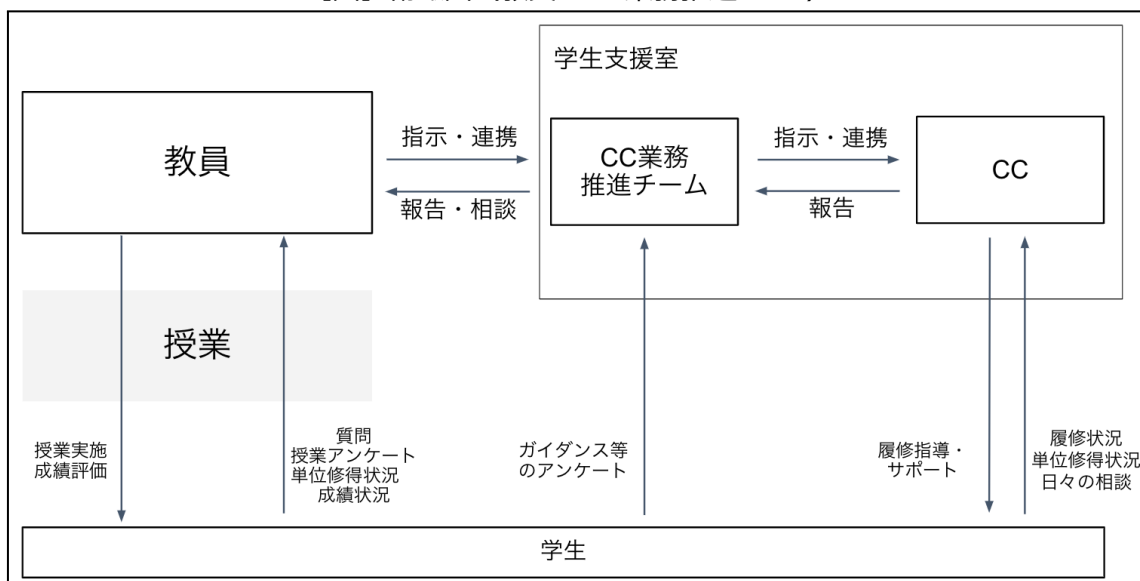
(対応)

(1) の回答案(1) 学位の授与に向けた組織的な履修指導に関する説明については以下1・2、(2) 業務内容、業務量、頻度、CC採用時に求められる資質、採用前後の研修内容、処遇及び教員との連携体制に関する説明については以下3に記載する。

1 学位の授与に向けた組織的な履修指導に関する説明

本学の履修指導は、教員の指示のもと、教員と職員が連携し、図の通り大学として履修に関する組織的なサポート体制を構築していく。今回の指摘に基づき、教員と円滑に情報共有しながら日々の業務を進めることを勘案し、クラス・コーチ(CC)業務推進チーム(以下、CC業務推進チーム)を設置する。

【図】俯瞰図(教員・CC業務推進・CC)



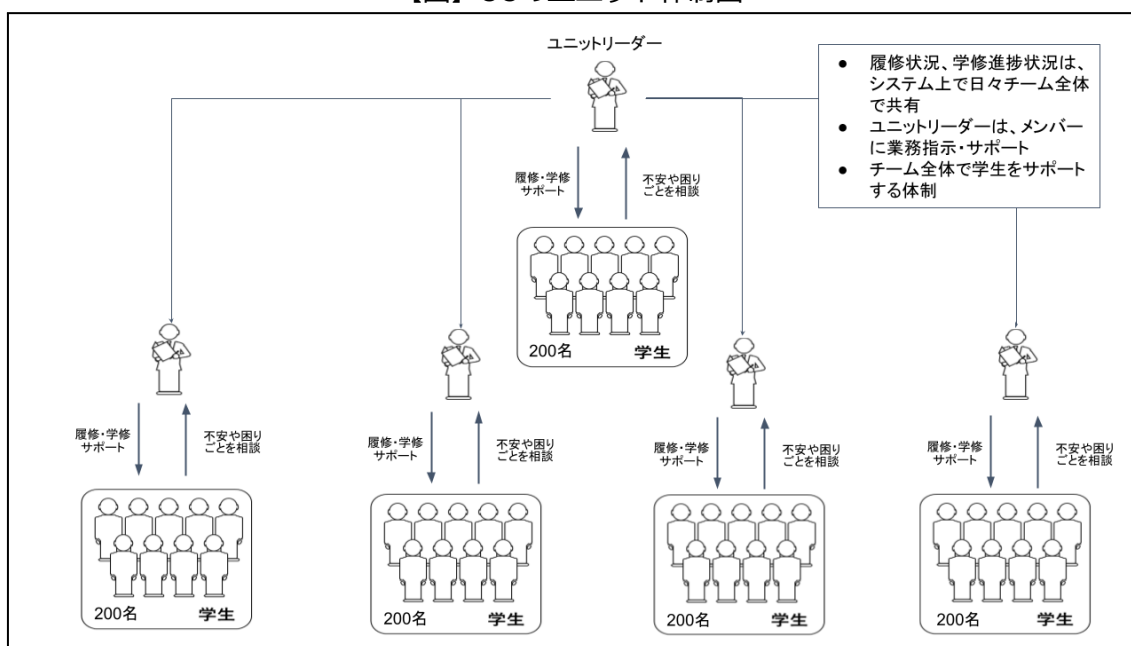
ガイダンスなどのアンケート結果をもとに業務を改善・推進するCC業務推進チームは、業務設計資料などに関する教員の指示を受けながら、クラス・コーチ（CC）のガイダンスや日々の業務の設計を進める。具体的には、新入生オリエンテーションやガイダンス設計をする際は、まずCC業務推進チームが新入生オリエンテーションやガイダンスの資料を作成する。次に、作成した資料を教員に共有し、内容に齟齬などがないかの確認をする。教員の確認完了後に、資料をクラス・コーチ（CC）が担当の学生に対して説明を行っていく。履修モデルを作成したり、履修モデルの使用方法についても同様に連携したりしながら業務設計を行う。

このCC業務推進チームがいることは、クラス・コーチ（CC）が学生サポートに集中し、丁寧なサポートをすることに繋がっていく。日々の業務を運営するクラス・コーチ（CC）、日々の業務を改善・推進するCC業務推進チームと教員とそれぞれが分業体制を整えることで、クラス・コーチ（CC）個々の資質によらない学生に対する指導が実現する。

また、クラス・コーチ（CC）は1学年あたり25名、完成年度以降は100名の組織で学生をサポートしていく。1学年あたり25名のクラス・コーチ（CC）については、図のとおり5人1組からなるユニットを構成し、各ユニットにリーダーを配置する。このユニット体制は、担当クラス・コーチ（CC）と学生との1対1のやり取りだけで学生のサポートを完結させない、組織的なサポート体制を構築することに繋がる。

さらに、ユニットリーダーは、属人的な学生サポートを防ぐために、自身のユニットメンバーに対して業務指示を行い、業務中の課題を解決する際に、個人ではなくユニットで解決する方法について検討を行う。

【図】 CCのユニット体制図



上記に述べた組織体制に基づいた入学時および在学時を通した履修指導について、下記に詳細に説明していく。

2 入学時および在学時を通した指導

（1）履修に関する情報が記載された「学生便覧」の作成

本学では、学生が円滑な学生生活を送るために必要な情報をまとめたWebサイトである「学生便覧」を作成する。この「学生便覧」には、本学の教育課程の全体像、ディプロマポリシー、カリキュラムの制度、授業の概要、科目一覧、履修登録方法、単位認定試験の概要、成績評価、学籍、課外活動、ICTツールの設定方法や利用方法、図書館の利用方

法、キャリアサポート、カウンセリングサポートなどを掲載する。「学生便覧」は常にポータルサイト上に公開しており、学生が不明点や困りごとがあった際にすぐに確認することができ、重要な項目については、説明動画を作成することで、履修や学修に関する情報を丁寧に伝えることができる。

また、クラス・コーチ（CC）は「学生便覧」の内容を把握し、学生からの学生生活に関する問い合わせに対しては「学生便覧」を用いて対応していく。その他、新入生オリエンテーションやガイダンスでは「学生便覧」を用いて学生生活の説明や、ディプロマ・ポリシー達成を意識した学修計画の意識づけなど、学生に対し履修指導を行っていく。

（２）新入生オリエンテーション、各クォーターごとのガイダンス

ビデオ会議システムを使って行う新入生を対象とした新入生オリエンテーションは、履修登録方法を学生に理解させることを目的とし、クラス・コーチ（CC）が「学生便覧」をベースとした資料を使って説明する。この新入生オリエンテーションに加え、新入生が履修登録方法を完了させられるよう、新入生全員と個別の履修登録面談を行う。履修登録面談については後述の（３）において説明する。

また、本学ではクラス・コーチ（CC）１名に対して、学生200名程度からなるクラスを構成し、クラス・コーチ（CC）は担当学生に対して履修・学修をはじめとした学生生活に関する情報提供・指導を行う。

クラス運営の一環として、各クォーターの初めには学生が滞りなく学生生活を送るために必要な情報を提供する、クラス別のガイダンスをビデオ会議システムを使って行う。このガイダンスは、学年別・クォーター別に設計を進め、新入生に対しては学修や学生生活に必要な学修システムの使い方の説明、「学生便覧」やポータルサイトで掲出しているレポートの締切日や各科目の実施形態・演習科目やゼミの選抜基準など、学生生活を送るために必要な情報を伝えることに重点を置く。学年が上がるにつれて、ディプロマ・ポリシー達成のための学修の意識を高め、将来のキャリアから逆算した履修計画の立て方や学びと将来のキャリアをどのように繋げるのかを考えさせる内容とする。

（３）面談（入学時必須の履修登録面談、希望者向けの履修面談）

クラス・コーチ（CC）は、面談を１回あたり30分、平均１日10件、１日最大12件で実施する。この面談時間は、面談記録と面談準備の時間10分を含めている。面談では、履修計画や履修モデルを活用した科目選択方法の説明、履修登録が完了できるようにサポートを行う。面談後にも、各学生の履修登録状況を確認し、サポートが必要な学生がいた場合には、履修登録完了まで電話やメール、オンラインコミュニケーションサービスなどでサポートを行う。

また、新入生以外の在学生に対しても、学修不振者と希望者を対象に履修登録期間中に個別相談期間を設ける。具体的には、システム上で学修が滞っていることが判明した場合などは、クラス・コーチ（CC）から面談対象として連絡を取るとともに、あらかじめ履修に不安のある学生がクラス・コーチ（CC）に連絡し、面談の機会を設けることとする。

面談に加え、学生からの質問に対しては、面談だけでなく、オンラインコミュニケーションサービスやメール、電話、ビデオ会議システム等を用いて対応するなど、幅広く相談に対応する体制を整える。

なお、学生とアドバイザーや職員とのやり取りは、オンライン上で記録を残す仕組みとなっており、学生の関わり・学修状況などその他の学生情報と合わせてデータで管理され、業務に必要な範囲で他の職員もアクセスすることができる。記録が残っていることで、問い合わせ対応や面談前準備において、他のアドバイザーや職員らと学生が以前どのようなやり取りを行ったのかなどを把握することができ、担当のクラス・コーチ（CC）のみの属人的な指導に陥らないようになっている。その他にも、リアルタイムの双方向コミュニケーションを必要としない複数のオンラインコミュニケーションサービスを活用することで、効率的に数多くの学生と関わるができる。

（４）「導入科目」における「アカデミックリテラシー」での指導

本学のディプロマ・ポリシー達成に向けた学びの出発点となる「アカデミックリテラシー」では、本学のカリキュラムについての理解を深め、学生を主体的な学修に向かわせるために、カリキュラムツリー、履修計画や学修計画の立て方などの内容を扱う。カリ

キュラムにおいては、ディプロマ・ポリシーを達成するために、導入科目や基礎科目があること、展開科目においても基盤リテラシー科目や世界理解科目の横断的な学びを促す。

具体的には第2回「ZEN大の学びの全体像（1）」および、第3回「ZEN大の学びの全体像（2）」において、本学での入学から卒業に至るまでの学修の流れや学修計画の立て方を説明し、本学でのカリキュラムについてカリキュラムツリーを使ってその目的と内容を概観する。また、第4回「学修計画と学修習慣の確立」においては、学生は個々のキャリアのイメージに応じた履修モデルを利用した学修計画の立て方について学ぶ。

（５）履修モデルを使った指導

多様な学生が本学のディプロマ・ポリシーを達成し、在学時から卒業後のキャリア形成に繋がる学修が行えるよう、履修モデルを参考とした指導を行う。

クラスコーチ（CC）は、学生が将来希望するキャリアから逆算した適切な履修モデルを選択できるよう、ガイダンスの実施、履修・学修指導を行っていく。ガイダンスにおいては、履修モデルの説明や選択方法、将来のキャリアと科目選択の紐付けに関する説明をしたり、担当する学生の履修・学修状況を定期的に確認することで、特定の領域で単位不認定となる科目が多い学生に対しては、（３）で述べた履修登録期間外においても、面談などで履修計画や選択している履修モデルの見直しを提案する。

あわせて、カリキュラムの自由度の高さに関しては、学生が主体的に履修計画を立てる補助ツールとして、履修モデルに登録された科目のシラバスがWeb上で検索し、すぐに内容が確認できるようにするなど、システム面での履修選択のサポートも実施する。

これらを通して、本学の多様な学生がディプロマ・ポリシーを達成し、学生の志向性、キャリア意識に応じた指導体制を実現する。

３ 業務内容、業務量、頻度、CC採用時に求められる資質、採用前後の研修内容、処遇及び教員との連携体制に関する説明

２で述べたクラス・コーチ（CC）が行う新入生オリエンテーション、ガイダンス、面談に加え、下記の業務を実施する。

（１）業務内容・業務量・頻度

① 学修指導

クラス・コーチ（CC）が行う学修指導では、学生が授業動画をレポート提出期日にむけて、計画通り学修を進めているかを把握し、必要に応じたサポートを行う。

具体的には、成績や学修状況がデータとして格納されるZEN Studyを使い、担当する学生の学修進捗状況を把握し、学修進捗管理を行なっていく。このZEN Studyをもとに、学修進捗管理を行い、進捗が捗らなかった学生に対しては電話やメール、オンラインコミュニケーションサービスなどで連絡を行い学修完了までのサポートを行う。締め切りから逆算した指導を繰り返し行い、計画的に学修する習慣を身につけさせ、自立的な学修ができるようにする。

② 通信技術指導

入学した学生がZEN Studyやデジタルツールを使いこなし、学生生活を円滑に送ることができるよう、インストール方法、アカウント設定、実際の操作に関する説明を新入生オリエンテーションやガイダンスで行う。全体での説明後、学生から使用方法に関する問い合わせがあった際には電話やメール、ビデオ会議システムなどを用いて使用方法の説明を行う。

③ クラス運営

本学のクラス運営では、各クォーターごとのガイダンスの他、オンラインコミュニケーションサービスにおけるチャンネル内でのチャット交流を行う。オンラインコミュニケーションサービスでは、クラスごとにチャンネルを設定し、クラス・コーチ（CC）が担当する学生全員が参加し、クラスでの情報共有や交流の場とする。クラス・コーチ（CC）はチャンネル内で日々の情報提供を行う。

このチャンネルには、クラス・コーチ（CC）が各クオーターの期間中に都度履修登録やレポート締切日に関する案内、単位認定試験に関する案内など、学生生活において重要とされる情報を投稿していく。この投稿に対しては、学生が自由に質問や不安なことを投稿することができ、学生同士で解決しあうこともできる。

上記の業務に関する、頻度、業務量について、スケジュールとともに以下の図にまとめた。

【図】CCの年間業務スケジュール

Q	1Q			2Q			3Q			4Q		
期間	履修期間 (入学・進級)	授業期間	テスト 期間	履修期間	授業期間	テスト 期間	履修期間 (入学・進級)	授業期間	テスト 期間	履修期間	授業期間	テスト 期間
CCの 業務	履修登録 サポート			履修登録 サポート			履修登録 サポート			履修登録 サポート		
	学修サポート			学修サポート								
	履修登録面談 (新入生必須)		面談 対応			面談 対応	履修登録面談 (新入生必須)		面談 対応			面談 対応
	オリエン/ガイダ ンス対応			ガイダンス対 応			オリエン/ガイダ ンス対応			ガイダンス対 応		
		単位認定 処理			単位認定 処理			単位認定 処理			単位認定 処理	
	クラス運営サポート											
	ポートフォリオ作成サポート											
業務量	高	低	中	中	低	中	高	低	中	中	中	高

業務量と頻度に関しては、年間のスケジュールの中で変動する。繁忙期としては、新入生全員を対象とした1クオーター（4月入学生対象）と3クオーター（10月入学生対象）の初めに実施する個別の履修登録面談があり、担当する学生全員と30分の面談を実施するため、集中的に時間を要する。

新入生以外の学生に関しても、各クオーターの期間中に学修不振者と希望者を対象に履修登録期間中に個別相談を設定し、履修に関するサポートを実施する。この間も面談を希望しない学生については、学修システムから履修状況や学修状況を確認し、授業期間中の学修サポートやクラス運営などの対応を行う。きめ細やかな対応が必要となるものも多いため、時間をかけて学生の状況やクラスの状況を把握し業務にあたるものとする。

学修や履修に直結する対応（面談や学修進捗管理、ガイダンス）と、学生交流や課外プログラムの案内等によって、本学への帰属意識を高める対応（日々のクラス運営など）があるが、それぞれの業務の繁忙期や注力期が重ならないように業務が構成されていることから、年間を通じて概ね一定の業務量になると想定している。

（２）採用条件・処遇

クラス・コーチ（CC）は週5日、実働8時間のフルタイム勤務の職員で、この職務に専念することができる賃金（350万円～500万円を想定）や社会保険を用意する。採用においては、学士もしくはそれ以上の学位を有しており、学生の将来の自立に向けて、一人一人に応じた履修・学修進捗管理を行い、「社会的に自立」させるための支援ができる人物を条件とする。また、知識や経験だけではなく、向上心や自己研鑽欲が高い者を採用する。

（３）採用前後の研修内容

採用したアドバイザーを対象に、全アドバイザーに対する研修と、クラス・コーチ（CC）に対する研修の2種類を実施する。採用時は、全アドバイザーに対する研修を行う。以

下の研修を通し、大学運営、授業運営、学生支援に関わる基本的な知識やスキルの理解を促す。

① 全アドバイザーに対する研修

全アドバイザーに対する研修では、以下の研修を通し、大学運営、授業運営、学生支援に関わる基本的な知識やスキルの理解を促す。

【表】全アドバイザーに対する研修

研修名	研修で取り扱う内容
大学組織を理解するための研修	法人体系、用語、組織、法令・規程・ルール、コンプライアンス、ハラスメント
学修について理解するための研修	・ 授業内容、カリキュラム、学生便覧、履修モデル、各領域の導入的内容 ・ ZEN Studyなどの学修システム

② クラス・コーチ（CC）に対する研修

クラス・コーチ（CC）を対象にする研修では、履修指導方法や学修進捗管理方法を理解させるとともに、学生支援に必要な知識や実践的スキルを身につけさせることを目的とする。

【表】クラス・コーチ（CC）に対する研修

研修名	研修で取り扱う内容
履修指導方法に関する研修	・ 履修指導の目的、ゴール、指導のポイント ・ 4年間の学修目標と学修計画の立て方、必修・選択必修・選択科目と卒業要件 ・ 教員、他アドバイザー、クラス・コーチ（CC）ユニット内での連携 ・ 事例検討（履修科目が選択できない場合、学修状況がよくない場合、学生生活に課題がある場合）
学修進捗管理方法に関する研修	・ 学修進捗を管理する目的、ゴール、指導のポイント ・ システムを利用した学修進捗の管理方法（学生の視点、クラス・コーチ（CC）の視点） ・ 計画的な学修の考え方と学生指導の方法、アドバイスのポイント ・ 事例検討（全体的に学修状況が不良の場合、特定科目の学修状況が不良の場合、ツールの活用）
単位認定試験受験サポートに関する研修	・ 単位認定試験の目的、ゴール、指導のポイント ・ 時期、受験方法、受験前の準備について解説 ・ 単位認定試験前後の業務スケジュールとポイント

学生のコミュニティ運営に関する研修	・コミュニティの運営、企画・実践、つながりや帰属意識の作り方 ・オンラインを活用したコミュニティの特徴とコミュニケーション形成 ・事例検討（新学期のコミュニティ作り、日常的なコミュニケーション、イベントの企画）
ファシリテーション研修	・ファシリテーションの目的、場面、基本的なスキル ・事例検討（グループ面談内の学生同士のディスカッション）
面談ロールプレイング研修	・面談実施のポイント、必要なスキル、面談記録の取り方 ・事例検討（全体的に学修状況が不良の場合、特定科目の学修状況が不良の場合）

（４）教員との連携体制

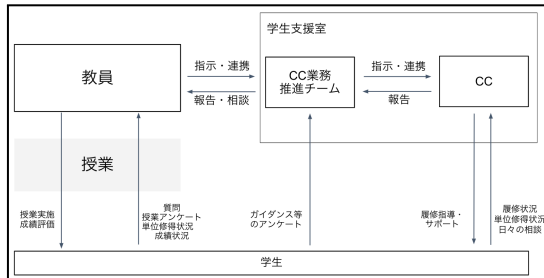
学長の適切なリーダーシップのもと教員・職員で構成される委員会では、定例会議の場を設定し定期的に意見共有を行っていく。そこでは、教員がカリキュラム概要の説明や履修モデル作成の他に、単位修得にむけた履修・学修指導方法について、CC業務推進チームおよびクラス・コーチ（CC）と協働し、履修指導、学修指導等について、継続的な改善に取り組む。

上記の通り、本学において、体制面・運用面において、ディプロマ・ポリシーの達成に向けた組織的な履修指導を含め、クラス・コーチ（CC）による学修指導、通信技術指導、クラス運営を行う。また、開学後も継続的に学生指導に関する指導の改善を行い、より充実した学生指導を目指す。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類（本文）（62～68ページ）

新	旧
①履修をサポートするクラス・コーチ（CC） クラス・コーチ（CC）は、カリキュラム・ポリシーに基づき、卒業に必要な所定の単位を修得し、学生が卒業するための学修支援を行う。入学から卒業までの継続的な学修支援のなかで、学生が自立的な学修習慣を身につけることを支援の目的とし、担当学生が履修モデルを用いた履修計画に基づく学修ができているかなど、ZEN Studyと連携して個々の学生の学修ポートフォリオを電子化したeポートフォリオで進捗を確認し、<u>組織的な履修支援を行う。</u> <u>下記の通り、本学の履修指導は、教員の指示のもと教員と職員が連携し、大学として履修に関する組織的なサポート体制を構築していく【図4】。</u>	①履修をサポートするクラス・コーチ（CC） クラス・コーチ（CC）は、カリキュラム・ポリシーに基づき、卒業に必要な所定の単位を修得し、学生が卒業するための学修支援を行う。入学から卒業までの継続的な学修支援のなかで、学生が自立的な学修習慣を身につけることを支援の目的とし、担当学生が履修モデルを用いた履修計画に基づく学修ができているかなど、ZEN Studyと連携して個々の学生の学修ポートフォリオを電子化したeポートフォリオで進捗を確認し、履修支援を行う。

【図4】 俯瞰図（教員・CC業務推進・CC）



教員と円滑に情報共有をしながら日々の業務を進めるために、クラス・コーチ（CC）業務推進チームを設置する（以下、CC業務推進チーム）。

ガイダンスなどのアンケート結果をもとに、業務を改善・推進するCC業務推進チームは、業務設計資料などに関する教員の指示を受けながら、クラス・コーチ（CC）のガイダンスや日々の業務設計を進める。

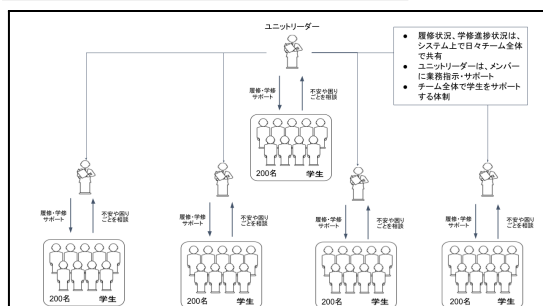
このCC業務推進チームを設置することは、クラス・コーチ（CC）が学生サポートに集中し、丁寧なサポートをすることに繋がっていく。日々の業務を運営するクラス・コーチ（CC）と、日々の業務を改善・推進するCC業務推進チーム・教員が、それぞれ協働体制を整えることで、クラス・コーチ（CC）個々の資質によらない学生に対する指導が実現する。

また、クラス・コーチ（CC）は1学年あたり25名、完成年度以降は100名の組織体制で学生をサポートしていく。1学年あたり25名のクラス・コーチ（CC）については、下記の図の通り5人1組からなるユニットを構成し、各ユニットにリーダーを配置する。このユニット体制は、担当クラス・コーチ（CC）と学生との1対1のやり取りだけで学生のサポートを完結させない、組織的なサポート体制を構築することに繋がる。

さらにユニットリーダーは、属人的な学生サポートを防ぐために、自身のユニットメンバーに対して業務指示を行い、業務中の課題を解決する際に、個人ではなくユ

ニットで解決する方法について検討を行う。

【図5】 CCのユニット体制図



ア 履修指導

本学の履修指導は、履修に関する情報が記載された「学生便覧」の作成、新入生オリエンテーションや各クォーターごとのガイダンス、面談、「導入科目」の「アカデミックリテラシー」における指導、履修モデルを使った指導、である。

学生が円滑な学生生活を送るために必要な情報をまとめたWebサイトである「学生便覧」は、常にポータルサイト上に公開しており、学生が不明点や困りごとがあった際にすぐに確認することができる。重要な項目については説明動画の作成も行う。

またクラス・コーチ（CC）は、「学生便覧」を用いて、新入生オリエンテーションやガイダンスを実施し、ディプロマポリシー達成を意識した学修計画についての意識づけや、学生からの質問対応を行うことで、学生の履修指導を進める。

新入生オリエンテーションでは、履修登録の方法を学生に理解させることを目的とし、履修やカリキュラムの概要を説明する。

新入生以外の在学生に対しては、クラス・コーチ（CC）が担当学生に向けて各クォーターの初めにクラス別にガイダンスを行い、学生生活に必要な情報を提供する。ガイダンスは、在学時から卒業後のキャリア形成に繋がる学修が行えるよう、履修モデルを用いた指導を行っていく。学年が上がるにつれて、ディプロマ・ポリシー達成のための学修の意識を高め、将来のキャリアから逆算した履修計画の立て方や学びと将来のキャリアをどのように繋げるのかを考えさせる内容とする。

履修登録期間中は、新入生参加必須の履修登録面談と、希望者向けの任意面談を実施する。新入生に対しては、必ず個別の履

ア 履修指導

クラス・コーチ（CC）は、卒業を見据え、担当する学生の履修登録状況を管理する。そのために、履修モデルを提示したり、本学の定める進級要件を踏まえ、各クォーターの始めに履修登録に関するオンライン面談の場を設定したりする。

履修登録期間中は、担当学生の登録状況を確認した上で、未登録の学生がいる場合は電話やメールなどで連絡を行い、登録完了までをサポートする。また、学生からの履修に関する質問や相談に対応できるよう、履修登録期間中は入学した学生向けの入学オリエンテーションやガイダンスを行い、相談しやすい環境を整えていく。

履修登録に関する面談は、履修登録期間中に希望者向けの任意面談を実施する。また、入学した学生を対象に、履修計画や履修モデルを活用した科目選択の方法などを助言する必須面談も行う。

また、学生自身で卒業後のキャリアを見据えた履修計画を立てられるようにするために、クォーターごとに目標設定をさせ、これまでの振り返りを踏まえた行動計画を立てられるように指導する。

修登録面談を実施し、履修計画や履修モデルを活用した科目選択の方法、履修登録の概要を理解させるための説明や登録完了までのサポートを行う。面談実施後も、担当学生の登録状況をシステムで確認し、未登録であったり、登録に誤りのある学生がいる場合は電話やメールなどで連絡を行い、登録完了までをサポートする。

また、本学の「導入科目」である「アカデミックリテラシー」では、学生を主体的な学修に向かわせるために、カリキュラム・ツリー、履修計画や学修計画の立て方などの内容を扱う。

なおクラス・コーチ（CC）は、定期的に履修・学修状況を確認し、進捗が捗らなかったり単位不認定科目が多い学生に対して履修計画や選択している履修モデルの見直しを促す指導を行う。その他、学生自身で卒業後のキャリアを見据えた履修計画を立てられるようにするために、クォーターごとに目標設定をさせ、これまでの振り返りを踏まえた行動計画を立てられるように指導する。

イ 学修指導

クラス・コーチ（CC）が行う学修指導では、学生が授業動画をレポート提出期日にむけて、計画通り学修を進めているかを把握し、必要に応じたサポートを行っている。

具体的には、学修期間中に成績や学修状況がデータとして格納されるZEN Studyをもとに、担当する学生の学修進捗状況を把握し、進捗が滞っていない学生に対しては電話やメール、オンラインコミュニケーションサービスなどで連絡し、学修完了までのサポートを行う。締め切りから逆算した指導を繰り返し行い、計画的に学修する習慣を身につけさせ、自立的な学修ができるようにする。

また学生の学修状況に応じて、アカデミック・アドバイザー（AA）と連携し、一人一人の学生に応じた丁寧な学修サポートを行う。これによって、自立的な学修習慣を身につけられるようになり、学修完了率の向上につながる。

最後に、クォーターの終わりに行われる単位認定試験期間中も、学生が単位認定試験の受験を終えることができるよう、シス

イ 学修指導

学修期間中は、eポートフォリオを参考に学生の学修の進捗状況を確認し、単位認定にむけたサポートを行っていく。オンライン環境のなかでも学生が自立的に時間を確保し、計画的に学修を継続するために、クラス・コーチ（CC）が定期的に電話やメールなどで学修の働きかけを行う。また学生の学修状況に応じて、アカデミック・アドバイザー（AA）と連携し、一人一人の学生に応じた丁寧な学修サポートを行う。これによって、自立的な学修習慣を身につけられ

るようになり、学修完了率の向上につながる。最後に、クォーターの終わりに行われる単位認定試験期間中も、学生が単位認定試験の受験を終えることができるよう、システム通知のみに頼らず、クラス・コーチ（CC）が毎日受験状況を確認する。

テム通知のみに頼らず、クラス・コーチ（CC）が毎日受験状況を確認する。

ウ 通信技術指導

入学年度の初めには、入学した学生を対象に、新入生オリエンテーションをオンラインで実施する。そこでは、**学生生活を円滑に送ることができるよう、**クラス・コーチ（CC）が履修や学修に必要となるシステムやコミュニケーションツールの使用方法を丁寧に伝える。**併せて、学修に関する質問や相談の問い合わせ方法についても説明を行う。全体での説明後に担当学生から問い合わせがあった場合には、電話やメール、ビデオ会議システムなどを用いて説明を行う。**

エ クラス運営

クラス・コーチ（CC）は、オンラインコミュニケーションサービスにおけるチャット交流や各クォーターの初めに行うガイダンスで、学生同士が交流をするための場を提供し、オンライン上で活発に交流ができるような支援を行う。

オンラインコミュニケーションサービスでは、クラスごとにチャンネルを設定し、クラス・コーチ（CC）が担当する学生全員が参加し、クラスでの情報共有や交流の場とする。このチャンネルには、クラス・コーチ（CC）がクォーター中は都度、履修登録やレポート締切日に関する案内、単位認定試験に関する案内など、学生生活において重要な情報を投稿していく。この投稿に対しては、学生が自由に質問や不安なことを投稿することができ、学生同士で解決しあうこともできる。

各クォーターの初めには、担当学生を対象に、ガイダンスをオンラインで実施する。このガイダンスは、アカデミック・アドバイザー（AA）やキャリア・アドバイザー（CA）と連携し、それぞれのアドバイザーから情報提供を行い、卒業を見据えた計画的な履修プランを立てられるように指導する。大学で実施する課外活動や各種ガイダンスの参加促しを繰り返し行い、参加率向上につなげていく。

上記の業務に関する、頻度、業務量について、スケジュールとともに以下の【図6】にまとめた。

ウ 通信技術指導

入学年度の初めには、入学した学生を対象に、入学オリエンテーションをオンラインで実施する。そこでは、クラス・コーチ（CC）が履修や学修に必要となるシステムやコミュニケーションツールの使用方法を丁寧に伝える。**また、学修に関する質問や相談の問い合わせ方法についても説明を行う。その都度、担当学生から通信技術について質問や相談があった場合には、電話やメールなどで対応する。**

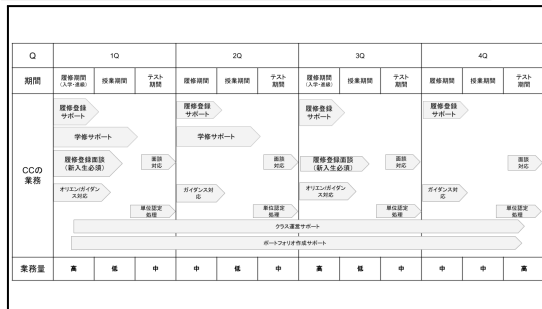
エ クラス運営

クラス・コーチ（CC）は、オンラインコミュニケーションサービスやビデオ会議システムを用いて、担当する学生に対して学生生活に関する情報提供や学生同士が交流をするための場を提供する。

各クォーターの初めには、担当学生を対象に、ガイダンスをオンラインで実施する。このガイダンスは、アカデミック・アドバイザー（AA）やキャリア・アドバイザー（CA）と連携し、それぞれのアドバイザーから情報提供を行い、卒業を見据えた計画的な履修プランを立てられるように指導する。大学で実施する課外活動や各種ガイダンスの参加促しを繰り返し行い、参加率向上につなげていく。

またガイダンス以外にも、クラス・コーチ（CC）が交流の場を設けたり、コミュニケーションの補助に入ったりして、学生

【図 6】 CCの年間業務スケジュール



同士がオンライン上で活発に交流ができるような支援を行う。

オ 採用条件・処遇

採用においては、学士もしくはそれ以上の学位を有しており、本学の教育課程を理解した上で、学生の将来の自立に向けた支援を行うことができる人物を条件とする。なお勤務形態は、週5日、実働8時間のフルタイム勤務であり、この職務に専念することができる賃金を支払う。

カ 採用前後の研修内容

採用したアドバイザーを対象に、全アドバイザーに対する研修と、クラス・コーチ（CC）に対する研修の2種類を実施する。採用時は、全アドバイザーに対する研修を行う。以下の研修を通し、大学運営、授業運営、学生支援に関わる基本的な知識やスキルの理解を促す。

a 全アドバイザーに対する研修

全アドバイザーに対する研修では、以下の研修を通し、大学運営、授業運営、学生支援に関わる基本的な知識やスキルの理解を促す。

【表 6】 全アドバイザーに対する研修

研修名	研修で取り扱う内容
大学組織を理解するための研修	法人体系、用語、組織、法令・規程・ルール、コンプライアンス、ハラスメント

<u>学修について理解するための研修</u>	・授業内容、カリキュラム、学生便覧、履修モデル、各領域の導入的内容 ・ZEN Studyなどの学修システム	
<u>b クラス・コーチ（CC）に対する研修</u> <u>クラス・コーチ（CC）を対象にする研修では、履修指導方法や学修進捗管理方法を理解させるとともに、学生支援に必要な知識や実践的スキルの修得を目的とする。</u>		
<u>【表7】 クラス・コーチ（CC）に対する研修</u>		
<u>研修名</u>	<u>研修で取り扱う内容</u>	
<u>履修指導方法に関する研修</u>	・履修指導の目的、ゴール、指導のポイント ・4年間の学修目標と学修計画の立て方、必修・選択必修・選択科目と卒業要件 ・教員、他アドバイザー、クラス・コーチ（CC）ユニット内での連携 ・事例検討（履修科目が選択できない場合、学修状況がよくない場合、学生生活に課題がある場合）	
<u>学修進捗管理方法に関する研修</u>	・学修進捗を管理する目的、ゴール、指導のポイント ・システムを利用した学修進捗の管理方法（学生の視	

	<u>点、クラス・コーチ（CC）の視点）</u> ・ <u>計画的な学修の考え方と学生指導の方法、アドバイスのポイント</u> ・ <u>事例検討（全体的に学修状況が不良の場合、特定科目の学修状況が不良の場合、ツールの活用）</u>
<u>単位認定試験受験サポートに関する研修</u>	・ <u>単位認定試験の目的、ゴール、指導のポイント</u> ・ <u>時期、受験方法、受験前の準備について解説</u> ・ <u>単位認定試験前後の業務スケジュールとポイント</u>
<u>学生のコミュニティ運営に関する研修</u>	・ <u>コミュニティの運営、企画・実践、つながりや帰属意識の作り方</u> ・ <u>オンラインを活用したコミュニティの特徴とコミュニケーション形成</u> ・ <u>事例検討（新学期のコミュニティ作り、日常的なコミュニケーション、イベントの企画）</u>
<u>ファシリテーション研修</u>	・ <u>ファシリテーションの目的、場面、基本的なスキル</u> ・ <u>事例検討（グループ面談内の学生同士のディスカッション）</u>

面談ロールプレイング研修	・面談実施のポイント、必要なスキル、面談記録の取り方 ・事例検討（全体的に学修状況が不良の場合、特定科目の学修状況が不良の場合）	
---------------------	--	--

(是正事項) 知能情報社会学部 知能情報社会学科

5. 「卒業プロジェクト科目」について、設置の趣旨等を記載した書類(本文) P42等において、学生を40人程度のグループに分け、リアルタイム授業を実施するとあるが、最大125グループの多様な指向をもつ学生の指導をリアルタイムで実施可能かどうか、実効性に疑義がある。

また、指導補助者がファシリテーション等を行う計画であるが、授業担当教員は授業動画の構成や成績評価に関与するという記載があるものの、どのように指導に係る責任を果たすのか明確ではない。このため、同科目について、具体的なスケジュール、学生グループの編成方法、グループごとの課題の設定方法、教員と指導補助者の枠割り分担等を説明し、実施可能であることと授業担当教員が指導に係る責任を果たすことについて明確にすること。その際、授業科目における大半の授業を指導補助者が担当することは原則として想定されず、望ましくないことに留意すること。

(対応)

卒業プロジェクト科目の実施について以下の通り記載する。

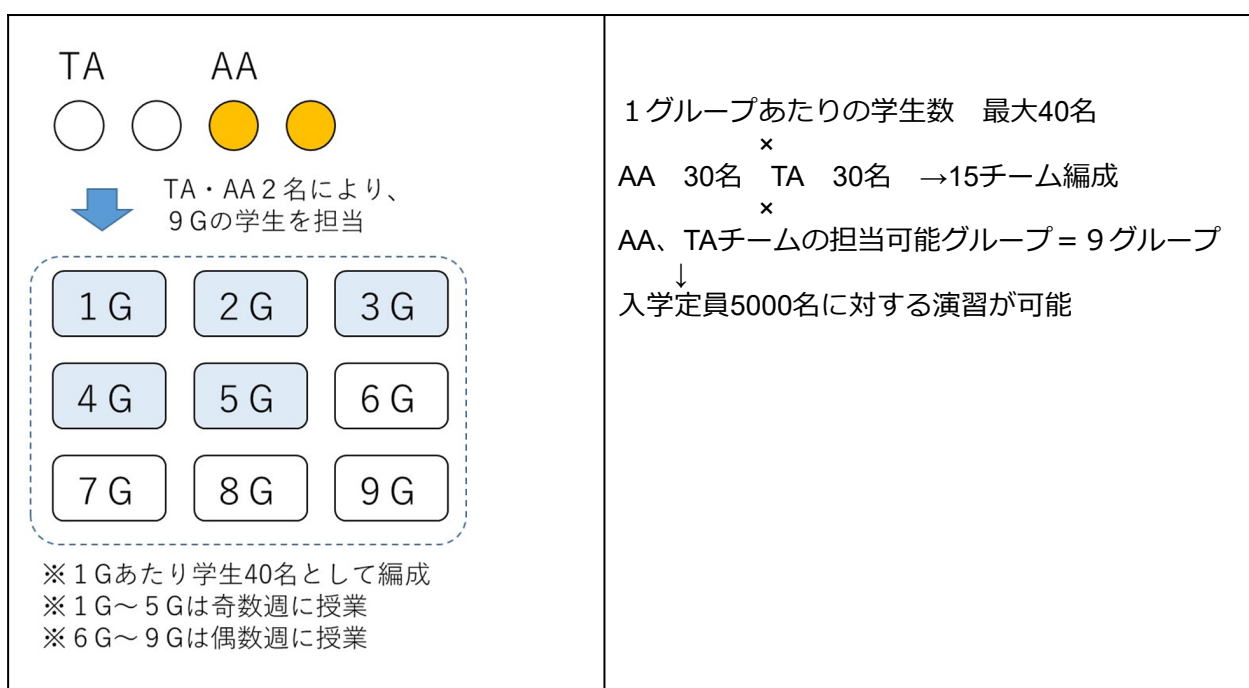
本科目は通信制大学である本学における学修の集大成となる科目であり、4年次に実施するオンライン上でのプロジェクト型科目であり、全15回で実施する。担当する教員は4名を予定しており、指導補助者としてアカデミック・アドバイザー(AA)およびティーチング・アシスタント(TA)を配置し、授業を行う。

なお、当初は科目開講時期を半期で予定していたが、今回の指摘に基づき、学びの集大成となる科目であることを勘案し、授業の運営を見直し、学生がより余裕をもって各回の課題や最終成果物に取り組むことができるようにするとともに、教員や指導補助者は指導がより行き届くよう科目開講時期を通期に改めた。

また、担当教員と指導補助者の役割分担を明確化したうえで、教員・指導補助者による指導をより行き届いたものにするため、当初想定していた授業の目的は変更せずに講義と演習を交互に行う運営形式に改め、それによってDPの定める実践力をより確認しやすくする。講義では教員がプロジェクトを進める上で必要となる内容を提供し、演習では指導補助者が授業運営を行い、講義で学んだ内容を活用する機会を提供する。なお、演習は教員の指示の下、指導補助者としてアカデミック・アドバイザー(AA)とティーチング・アシスタント(TA)が授業運営を行うが、指導補助者はあくまで学生が学んだ内容を活用できるよう支援する。

(1) 学生グループの編成について

本科目では40名を1グループとして定め、入学定員5,000名を125グループに分け、グループ単位で授業を進めていく。また、1グループに対してアカデミック・アドバイザー(AA)2名とティーチング・アシスタント(TA)2名を配置し、AA2名、TA2名が1つのチームとなり1つのチームで9グループを担当する。アカデミック・アドバイザー(AA)、ティーチング・アシスタント(TA)はそれぞれ30名採用予定である点からアカデミック・アドバイザー(AA)、ティーチング・アシスタント(TA)は15チーム編成され、1チーム9グループを担当する点から、最大135グループを指導することができる。



1 グループ40名程度の学生に対しアカデミック・アドバイザー（AA）2名とティーチング・アシスタント（TA）2名を配置する。1日1グループを担当、2週で9グループを担当する。教員と指導補助者の役割は後述する。

また、グループ編成は学生の進路希望や重点的に学んだ領域や得意な分野などによらず編成する。本科目は個人で課題に取り組むだけでなく、学生同士での相互フィードバックを通じて、様々な考えやアプローチに触れることで、批判的に検討し分析することを目的とする。このため学生グループは、多様なスキルを個々が発揮し、多様な解決策を導くよう編成するとともに、グループごとに指導補助者が付き、学生の学びを支援する。

（2）授業スケジュールについて

全15回のなかで、担当教員によるライブ映像の講義形式で知識やスキルなどを修得し演習を通じて理解を図る講義・演習回と、アカデミック・アドバイザー（AA）とティーチング・アシスタント（TA）計4名の授業運営のもと最大40名の中規模のグループ形式で演習を行い、修得した知識・スキルを実践したり、個人発表とそのピアレビュー等を行う演習回を設ける。

なお、ライブ映像形式の講義・演習回の場合は、教員が授業を行うと同時に指導補助者がオンラインコミュニケーションサービス内に授業に関するやりとりを行う専用チャンネルを作成し、授業内容に関する質問や理解度を図るようなやり取りを促し、映像を見ながらオンラインを通じた双方向性のある授業の特徴を生かした理解促進を図る。演習回では、指導補助者が講義・演習回での学びをより深めるよう話題提供やファシリテーションを行い、実践力を養う。

具体的には下表の通り実施する。

【表】各回の授業概要

	授業概要	授業方法	受講可能人数	最大開講枠
第1回	オリエンテーション（課題解決の目的とプロセスの理解）	ライブ映像	5000人	1 枠

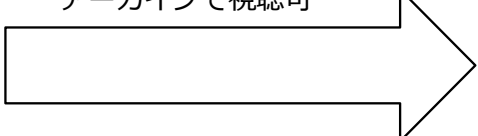
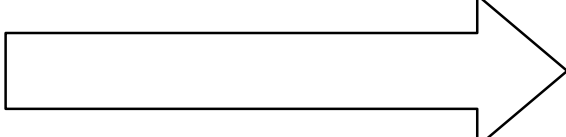
第2回	【講義・演習】課題の背景理解1 (定量) (数理・情報技術の理解を踏まえた課題の定量分析の解説)	ライブ映像	5000人	1 枠
第3回	【演習】課題の背景理解2 (定量) (デジタルツールを活用した数理・情報技術の理解を踏まえた課題の定量分析の実践)	動画による講義、 ビデオ会議システムによる演習	40人	9 枠
第4回	【講義・演習】課題の背景理解3 (定性) (情報収集力を用いた課題分析、多様な考え方・手法の解説)	ライブ映像	5000人	1 枠
第5回	【演習】課題の背景理解4 (定性) (デジタルツールと多様な考え方・手法を活用した定性分析の実践)	動画による講義、 ビデオ会議システムによる演習	40人	9 枠
第6回	【講義・演習】課題解決スキル演習1 (課題抽出の実践例を解説)	ライブ映像	5000人	1 枠
第7回	【演習】課題解決スキル演習2 (全体課題に対し定量・定性分析に基づく適切な課題を抽出)	動画による講義、 ビデオ会議システムによる演習	40人	9 枠
第8回	【演習】中間レポート・相互フィードバック1 (フィードバックの目的方法の解説と、発表、相互フィードバック)	動画による講義、 ビデオ会議システムによる演習	40人	9 枠
第9回	【講義・演習】課題解決アウトプット演習1 (帰納的・演繹的な考え方と活用の解説)	ライブ映像	5000人	1 枠
第10回	【演習】課題解決アウトプット演習2 (帰納的・演繹的な考え方と活用の実践)	動画による講義、 ビデオ会議システムによる演習	40人	9 枠
第11回	【講義・演習】課題解決アウトプット演習3 (ステークホルダーの理解と解決策に向けた手法の解説)	ライブ映像	5000人	1 枠
第12回	【演習】課題解決アウトプット演習4 (ステークホルダーなどの考え方も踏まえた解決策の検討と最終成果物の準備)	講義動画の視聴、 ビデオ会議システムによる演習	40人	9 枠
第13回	【講義・演習】課題解決アウトプット演習5 (最終成果物の発表に向けた伝え方、表現手法の解説)	ライブ映像	5000人	1 枠
第14回	【演習】最終成果物の発表・相互フィードバック2 (発表、相互フィードバックの実践)	動画による講義、 ビデオ会議システムによる演習	40人	9 枠

第15回	【講義・演習】最終講評	ライブ映像	5000人	1 枠
------	-------------	-------	-------	-----

上記の通り、授業スケジュールはライブ映像形式の講義・演習回と、最大40名の中規模のグループ形式で演習を行う演習回を交互に設ける方法に改めた。演習回は2週間の期間で9枠設定し、各枠に対して15組の演習を実施することで、最大9枠×15組×最大40名で定員5000名の学生に授業を実施できる。

なお、ライブ映像形式の講義・演習回については、あらかじめ決められた授業時間での受講だけでなく、やむを得ず授業への参加が難しかった学生や復習をしたい学生のためにアーカイブ視聴も可能とする。本学はデジタルツールを活用したオンライン教育の特性を活かし、時間的な制約があっても大学教育を受けることができることを特徴としている。卒業に向けた集大成である本科目についてはライブ映像形式での受講を出席扱いとするが、仕事や家庭の事情で受講ができない回が発生した場合も授業内容を確認する事ができるようアーカイブ視聴の仕組みを整えている。

【表】ある月の授業スケジュール例

	午前/午後	月	火	水	木	金	土
1 週目	午前	アーカイブで視聴可 ライブ映像授業 					
	午後						
2 週目	午前		演習 授業枠 2		演習 授業枠 4		
	午後	演習 授業枠 1		演習 授業枠 3		演習 授業枠 5	
3 週目	午前		演習 授業枠 6		演習 授業枠 8		演習 授業枠 9
	午後			演習 授業枠 7			
4 週目	午前	アーカイブで視聴可 ライブ映像授業 					
	午後						

※各授業枠は、15グループ（各40名）の最大600名からなる。

（３）教員と指導補助者の役割分担について

担当教員と指導補助者の役割分担を以下のとおり示す。なお、指導補助者は予め担当教員が定めた指示の範囲を超えて指導することはない。

【表】担当教員と指導補助者の役割分担

	担当教員	アカデミック・アドバイザー（AA）	ティーチング・アシスタント（TA）
責務	・授業全体の設計 ・講義回での授業運営 ・演習回の授業運営の指示・監督	・演習回の授業運営 ・講義回の授業運営補助	・演習回の授業運営の補助 ・講義回の授業運営補助
開講前	・教材の作成 ・講義動画の作成	・担当教員の指示を受けた授業教材を作成補助	
授業前	・フィードバック・質問対応に関する資料の作成	・フィードバック・質問対応に関する資料の確認	
授業中	・講義回の授業運営 ・全体課題提示 ・提出された各回課題の確認	・演習回の授業運営 ・教員の指示に基づくフィードバック	・出欠確認 ・質問対応の一次対応
授業後	・各回課題および最終成果物の最終評価	・質問対応 ・提出された各回課題の採点補助、フィードバック ・各回課題の提出状況共有	・出欠入力 ・質問対応の一次対応 ・提出された各回課題の一次処理
評価	・成績評価		

授業スケジュールのうち、講義を実施する回は教員が授業運営を、グループごとに演習を実施する回で教員の指示のもとアカデミック・アドバイザー（AA）が授業運営をそれぞれ実施する。

教員は主な役割として、授業時間ごとの指導計画とそれに基づく講義や教材等を作成するとともに、授業全体の統括、成績評価の基準を作成するとともにその責任を負う。具体的には、事前に担当教員間で授業内容について打合せを行い、講義内容や到達目標などを決定する。あわせて各回の指導計画を作成し、アカデミック・アドバイザー（AA）に指示する。各回の課題および評価基準を作成し、評価基準に基づく採点を指導補助者に指示するとともに最終確認を行う。ライブ映像形式で講義を実施する回においては担当教員が分担し授業を実施する。また第15回で最終成果物を確認し、講評を行う。

アカデミック・アドバイザー（AA）は主な役割として、教員の指導計画に基づき各回の授業運営および補助、各回の課題管理、質問対応、各回の課題提出に向けた学生のフォローなどを行う。また、グループごとに演習を実施する回では教員の指示のもと授業を担当する。各回ごとの課題については教員の指示に基づき内容の確認を行うとともに、未提出の学生への連絡を行う。また学生からの質問があった場合はその内容を確認し、ティー

チング・アシスタント（TA）と連携し軽微な内容や一般的な内容については回答を検討し、その他の内容については教員に確認を取り回答を行う。また必要に応じ、最終成果物の提出に向けた学生からの相談への対応を行う。

ティーチング・アシスタント（TA）は主に教員の指導計画に基づき、教員やアカデミック・アドバイザー（AA）の指示のもと、各回の授業運営の補助、各回の出欠や課題管理、質問対応の補助を行う。具体的には、各回の出欠確認はティーチング・アシスタント（TA）が行う。また教員やアカデミック・アドバイザー（AA）の指示に基づき質問対応を行う。各回の課題提出状況を確認し、教員やアカデミック・アドバイザー（AA）に報告を行う。

本科目は講義と演習を交互に行い、講義では教員がプロジェクトを進める上で必要となる内容を提供し、演習では講義で学んだ内容を活用する機会を提供するものである。このことから、指導補助者は、学生が教員による講義での学びを活用しながら演習できるような授業手法、ファシリテーションスキルなどを身につけた上で授業に臨むため、これに応じたFD/SD研修を受講し、授業を担当する。

また、教員と指導補助者が連携し授業を運営していくことから、開講期間中は毎週定期的に会議を行う。会議のなかでは、科目全体および授業の到達目標を共有しながら、進捗に合わせて連携しながら、学生を最終成果物の提出まで導く。

（４）課題の設定方法について

「卒業プロジェクト科目」は本学の学びの集大成と位置付け、特定の分野や指向によらず、課題解決のステップを学びながら仮説と検証を行い、学問分野に捉われず学修者自身が多様なデジタルツールを駆使し解決策を追求する。

まず、授業内容として、授業全体を通じて取り組むテーマとして全体課題が設定されている。

本学は、変化の激しい複雑な知能情報社会を生き抜く能力を持った学生の育成を目的として、DP 1 からDP 4 までを設定している。変化の激しい社会においては、卒業後も、学生を取り囲む環境は激しく変化し、学生は予測の難しい環境の変化に対応しなければならない。そのために、流動性の激しい社会の基盤を理解するDP 1、変化する世界を認識する複数の視点を身につけるためのDP 3、さらにどのような課題・環境に直面してもアジャイルに学び続けるためのDP 2 を設定した。環境の変化は多くの場合外部要因によってもたらされるものであり、学生からは事前の予見可能性・制御可能性が低い可能性が高い。学生はそうして外部からもたらされた課題へのアジャイルな対応を繰り返すことによって、主体的に人生を切り拓くことができる。よって、学生が元々持っている関心を本科目で取り組むテーマとするのではなく、予見・制御できない外部の環境に対応する能力を涵養する訓練として、全体課題は担当教員から与えられる。それによって、多くの学生にとっては初めて体系的に考えることになったテーマを、本学のカリキュラムを通じて養われたDP 1 からDP 4 までの力を活用することによって、直面した課題にアジャイルに対応する機会となり、これが本学の目指す人材像を念頭においた上での学びの集大成であると考えられる。

学生はこの全体課題に対して、具体的にどのようなアプローチを行うかを考え、個人課題を設定する。上述の通り、知能情報社会において直面する課題は多くの場合外部から与えられるものであるが、その全体課題をどのように切り取り、どのような問題として定義し、対応するかは個人に委ねられる。よって、全体課題から個人課題を抽出するプロセスを授業の一環として置き、その課題に対する解決策を最終成果物にアウトプットする。

例えば、授業全体で取り組む全体課題として「環境問題と緑化」を設定した場合、学生が「自分の街の緑化」「緑化の経済的効果」など様々な切り口で個人課題を設定することを想定している。具体的な個人課題設定のプロセスは「各回の授業内容について」にて後述する。

（５）成績評価について

本科目は、課題を設定する力やデジタルツールを活用する力を発揮し、課題解決策を導くプロセスを評価する科目となっていることから、これに沿った形で、各回ごとの成果物および最終成果物は、あらかじめ文字数、記載方式など、フォーマットを統一し、学生に提示される。成績評価では、各回ごとに教員が統一的な評価ができる評価基準を作成し、これに基づき指導補助者（アカデミック・アドバイザー（AA））が採点補助を行う。最終的な評価は教員が決定し、成績評価に反映する。授業内容が各回の課題を提出するプロセスを重ねることで、必要な知識・スキルを修得していることを確認する内容となっており、評価は「可・不可」のいずれかとする。

各回の課題や最終成果物の評価基準は教員が各回の課題を設定する際にあわせて用意する。評価基準には各回で修得・確認する知識やスキルに加え、内容の論理性や満たすべきポイントなどを示す。これを起点に、ティーチング・アシスタント（TA）は提出の有無、回答のもらえないかを確認するとともに、アカデミック・アドバイザー（AA）が内容を確認し評価基準に合致しているかを確認し採点補助を行う。アカデミック・アドバイザー（AA）2名、ティーチング・アシスタント（TA）2名は、1日程あたり最大40名、2週間で最大9つの学生グループ分の課題の確認・採点を行う。

採点の情報はシステム上にて管理され、一元化された情報を教員が確認する。あわせて、課題の提出状況や内容、評価のポイントなどは、定期的に行われる会議、教員と指導補助者で構成されるオンラインコミュニケーションサービスなどを活用し共有し、グループ毎に偏りがないように配慮する。

（６）各回の授業内容について

授業内容については、DPに沿った学びとなるよう内容を変更する。

全15回のなかで、講義形式で知識やスキルなどを修得・確認する授業回と、グループでの演習形式で修得した知識・スキルを実践しピアレビューを行う授業回を設定し、DPにそった学びや実践力が養われていることを確認する。

具体的には下表の通り実施するよう改める。

【表】各回の授業概要とDP、教員と指導補助者の役割

	授業概要	対応する DP	授業方法	教員	指導補 助者	受講可 能人数	最大 開講数
第1回	オリエンテーション （課題解決の目的とプロセスの理解）		ライブ映像	講義120分 演習60分	進行補 助	5000人	1 枠
第2回	【講義・演習】課題の 背景理解1（定量） （数理・情報技術の理 解を踏まえた課題の定 量分析の解説）	DP 1・ DP 3	ライブ映像	講義120分 演習60分	進行補 助	5000人	1 枠
第3回	【演習】課題の背景理 解2（定量） （デジタルツールを活 用した数理・情報技術	DP 1・ DP 3	動画による講 義、ビデオ会 議システムに よる演習	講義30分× 2回	演習120 分	40人	9 枠

	の理解を踏まえた課題 の定量分析の実践)						
第4回	【講義・演習】課題の 背景理解3（定性） （情報収集力を用いた 課題分析、多様な考え 方・手法の解説）	DP 2・ DP 3	ライブ映像	講義120分 演習60分	進行補 助	5000人	1 枠
第5回	【演習】課題の背景理 解4（定性） （デジタルツールと多 様な考え方・手法を活 用した定性分析の実 践）	DP 2・ DP 3	動画による講 義、ビデオ会 議システムに よる演習	講義30分× 2回	演習120 分	40人	9 枠
第6回	【講義・演習】課題解 決スキル演習1 （課題抽出の実践例を 解説）	DP 1～ DP 4	ライブ映像	講義120分 演習60分	進行補 助	5000人	1 枠
第7回	【演習】課題解決スキ ル演習2 （全体課題に対し定 量・定性分析に基づく 適切な課題を抽出）	DP 1～ DP 4	動画による講 義、ビデオ会 議システムに よる演習	講義30分× 2回	演習120 分	40人	9 枠
第8回	【演習】中間レポー ト・相互フィードバッ ク1（フィードバック の目的方法の解説と、 発表、相互フィード バック）	DP 1～ DP 4	講義動画の視 聴、ビデオ会 議システムに よる演習	講義20分	演習160 分	40人	9 枠
第9回	【講義・演習】課題解 決アウトプット演習1 （帰納的・演繹的な考 え方と活用の解説）	DP 3・ DP 4	ライブ映像	講義120分 演習60分	進行補 助	5000人	1 枠
第10回	【演習】課題解決アウ トプット演習2 （帰納的・演繹的な考 え方と活用の実践）	DP 3・ DP 4	動画による講 義、ビデオ会 議システムに よる演習	講義30分× 2回	演習120 分	40人	9 枠
第11回	【講義・演習】課題解 決アウトプット演習3 （ステークホルダーの 理解と解決策に向けた 手法の解説）	DP 2～ DP 4	ライブ映像	講義120分 演習60分	進行補 助	5000人	1 枠
第12回	【演習】課題解決アウ トプット演習4	DP 2～ DP 4	動画による講 義、ビデオ会	講義30分× 2回	演習120 分	40人	9 枠

	(ステークホルダーなどの考え方も踏まえた解決策の検討と最終成果物の準備)		議システムによる演習				
第13回	【講義・演習】課題解決アウトプット演習5 (最終成果物の発表に向けた伝え方、表現手法の解説)	DP 2 ～ DP 4	ライブ映像	講義120分 演習60分	進行補助	5000人	1 枠
第14回	【演習】最終成果物の発表・相互フィードバック2 (発表、相互フィードバックの実践)	DP 1 ～ DP 4	動画による講義、ビデオ会議システムによる演習	講義20分	演習160分	40人	9 枠
第15回	【講義・演習】最終講評	DP 1 ～ DP 4	ライブ映像	講義30分× 2 回	演習120分	40人	9 枠

第1回で授業全体の概要を伝え、15回を通じて修得・確認する知識やスキル、各回で求められる内容、最終成果物について説明する。

第2回から第12回は講義と演習を繰り返し実施し、DPに沿った知識・スキルを確認し、実践に繋げる。

第2回～第3回では主にDP1とDP3を確認するものとして、数理・情報技術の理解や分析能力に関する内容、課題に対する調査・分析とその検討に関する内容を取り上げる。例えば、授業全体で課題として「環境問題と緑化」を取り上げる場合、地域の緑化率や緑の分布などのデータをもとにAIを活用して分析する。

第4回～第5回では主にDP2とDP3を確認するものとして、情報収集力を用いた課題分析や問題点に対しより適切な立場から分析検討するための考え方や手法を取り上げる。例えば、授業全体で課題として「環境問題と緑化」を取り上げる場合、緑化への取り組みが地域や企業にもたらす好事例とその背景を取り上げることを想定している。

第6回～第7回ではDP1～DP4に定める実践力を広く確認するため、第2回～第5回までの学びを元に、学生個人が全体課題に対しどのようにアプローチするかを検討するための手法やスキルを取り上げる。学生は個々の関心や身の回りの事例から、様々な切り口で個別課題としてアプローチする中で、なぜそれを取り上げるのか、取り上げる意味などを教員が提示する事例に沿ってやってみることを想定している。例えば、授業全体で課題として「環境問題と緑化」を取り上げる場合、緑化×地域文化、緑化×経済成長率、緑化×IT技術など多様な切り口に対し、取り組むことにしたきっかけを明確にしたり、先行する事例や類似する事例などを調べることを想定している。

第8回では第1回～第7回までの内容をもとにレポート形式にまとめ、小グループ内で発表する。他の学生から発表へのフィードバックをもらうとともに、学生自身も他の発表に対しフィードバックをおこなうことで、最終成果物の完成にむけたブラッシュアップに役立てるものとする。なお、学生同士のピアレビューの観点や相互フィードバックの方法やルールなどは教員が予め授業内で解説し、これに沿って進める。

第9回～第10回では、主にDP3とDP4を確認するものとして、第8回での中間発表での気づきを活かし、最終成果物にむけた課題と解決策をより具体化するために、帰納的・演繹的な考え方と活用を取り上げる。例えば、ピアレビューで自分が気づかなかった指摘

や事例、反訴があった場合、これまでの取り組みを否定するわけではなく、新たな切り口としてどのようにアプローチするか試行錯誤するプロセスを想定している。

第11回～第12回は自分を取り上げる個別課題に関わるステークホルダーを理解し、それぞれにあった解決策を検討する手法を学び、その提案に取り組む。

第13回は最終成果物の発表に向けて、効果的な伝え方と表現手法について学ぶ。学生がこれまで修得した様々なものの見方や分析手法をもとに課題解決に繋げる方法を最終成果物として提出する準備だけでなく、発表の内容に適した伝え方の事例や、デジタルツールを用いた表現手法などを想定している。

第14回はグループ内での発表の機会とする。デジタルにおけるコミュニケーションの手法として短時間で端的に要点を伝えられる説明をするため、最終成果物として取り組んだ内容と合わせて相手に伝わる発表も意識し臨むことを目的とする。あわせて、他の学生の成果物に対し客観的にアドバイスできる能力も必要と考えることから、授業内でフィードバックのポイントを講義し用意した指標に基づきピアレビューも授業の一環として行う。

第15回では教員による全体講評と合わせて、第14回で発表された内容の中から、授業の評価ポイントにそって優秀と評価した最終成果物の発表を聞き、今後に役立てる。

本科目は通信制大学である本学が学修の集大成であることから、全15回を通期で実施し、プロジェクトを進める力、実践力を修得する。講義で学ぶだけでなくその内容を活用するよう演習を行い、実践力を身に付ける。また各回の課題を提出するプロセスを重ね、最終成果物に繋げることでプロジェクトを進める上で必要となる知識・スキルを修得する。

本科目を担当する教員は4名に加えて、指導補助者としてアカデミック・アドバイザー（AA）およびティーチング・アシスタント（TA）を配置し、講義、演習を繰り返すことで、学生の学修の集大成となる最終成果物の完成に導く。

（新旧対照表）基本計画書（教育課程等の概要）、p.11（一部抜粋）

（新）

卒業プロジェクト科目	プロジェクト実践	4通	○	4				○		1		2	1			共同・メディア
	小計（1科目）	—	—	4	0	0		—		1	0	2	1	0	0	—

（旧）

卒業プロジェクト科目	プロジェクト実践	4①～②・③～④	○	4				○		1		3				共同・メディア
	小計（1科目）	—	—	4	0	0		—		1	0	3	0	0	0	—

(新旧対照表) 基本計画書(授業科目の概要)、p52. (一部抜粋)
(新)

科目区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
卒業プロジェクト科目	プロジェクト実践	○	実社会で起こっている問題や課題を取り上げ、課題解決のステップを学びながら仮説と検証を繰り返し、学問分野に捉われず学修者自身が多様なデジタル・ツールを駆使し解決策を追求していく授業である。講義と演習を組み合わせ、テーマに関係のある事柄を中心とした学生同士の対話を繰り返し、様々な考えに触れながら検討・分析する。最終的には自ら考えた解決策を発表・フィードバックを行い、学生同士が学びを深めていくアクティブラーニングである。 実社会で活躍する人材になるために、不確実で変化の激しい社会の中で課題となっている問題背景を適切に理解し、正解のない答えを自ら発見して解決する能力を養う。個々の能力や適性にあった専門的な知識とともに、様々な文化や価値観・倫理を理解し、先端のデジタルツール活用して情報を収集・編集し、適切なデータを扱いながら自ら主体的に未来像を打ち立て表現できるようになる。	共同 主要 授業 科目

(旧)

科目区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
卒業プロジェクト科目	プロジェクト実践	○	実社会で起こっている問題や課題を取り上げ、課題解決のステップを学びながら仮説と検証を繰り返し、学問分野に捉われず学修者自身が多様なデジタル・ツールを駆使し解決策を追求していく授業である。後半ではテーマに関係のある事柄を中心に他の学生と対話や討論を繰り返し、様々な考えに触れながら批判的に検討し分析をする。最終的には自ら考えた解決策を発表・フィードバックを行い、学生同士が学びを深めていくアクティブラーニングである。 実社会で活躍する人材になるために、不確実で変化の激しい社会の	共同 主要 授業 科目

		中で課題となっている問題背景を適切に理解し、正解のない答えを自ら発見して解決する能力を養う。個々の能力や適性にあった専門的な知識とともに、様々な文化や価値観・倫理を理解し、先端のデジタルツール活用して情報を収集・編集し、適切なデータを扱いながら自ら主体的に未来像を打ち立て表現できるようになる。	
--	--	--	--

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (24ページ)

新	旧
CP 4「卒業プロジェクト科目」の「プロジェクト実践」では、CP 1からCP 3までを通じて修得した文理を跨いだ多様なものの見方を、実際の課題解決につなげるための探求的な学びを実施する。本科目では、具体的な社会課題をケーススタディとして取り上げ、デジタルツールを活用しながら分析する。課題の分析においては、教員の指示を受けた指導補助者の支援のもと学生生活を通じて培ったものの見方を活用し、主体的な意見の形成とそれに基づく解決策の考案につなげる経験を積む。また、本科目では他の履修者との対話や討論を行い、異なるものの見方を持つもの同士で意見を突き合わせる能力を涵養する。こうしたプロセスを通じて練り上げた解決策を発表し、フィードバックを得ることで、文理を横断したものの見方を課題の解決につなげるDP 4を達成する。	CP 4「卒業プロジェクト科目」の「プロジェクト実践」では、CP 1からCP 3までを通じて修得した文理を跨いだ多様なものの見方を、実際の課題解決につなげるための探求的な学びを実施する。本科目では、具体的な社会課題をケーススタディとして取り上げ、デジタルツールを活用しながら分析する。課題の分析においては、アカデミック・アドバイザー (AA)の支援のもと学生生活を通じて培ったものの見方を活用し、主体的な意見の形成とそれに基づく解決策の考案につなげる経験を積む。また、本科目では他の履修者との対話や討論を行い、異なるものの見方を持つもの同士で意見を突き合わせる能力を涵養する。こうしたプロセスを通じて練り上げた解決策を発表し、フィードバックを得ることで、文理を横断したものの見方を課題の解決につなげるDP 4を達成する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (31ページ)

新	旧
社会課題に対して、「基盤リテラシー科目」や「世界理解科目」の学修で培った数理・情報技術への理解や、社会に対する複眼的なものの見方に基づき、デジタルツールを活用しながら課題を分析し、教員の指示を受けた指導補助者の支援のもと、主体的な意見の形成とそれに基づく解決策の考案につなげる経験を積む。	社会課題に対して、「基盤リテラシー科目」や「世界理解科目」の学修で培った数理・情報技術への理解や、社会に対する複眼的なものの見方に基づき、デジタルツールを活用しながら課題を分析し、アカデミック・アドバイザー (AA)の支援のもと、主体的な意見の形成とそれに基づく解決策の考案につなげる経験を積む。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (38ページ)

新	旧
授業は、4年次に履修、<u>通期</u>で4単位修得とする。<u>授業内容として、授業全体を通じて取り組むテーマとして全体課題を設定する。学生が元々持っている関心を本科目で取り組むテーマとするのではなく、予見・制御できない外部の環境に対応する能力を涵養する訓練として、全体課題は担当教員から与えられる。それによって、多くの学生にとっては初めて体系的に考えることになったテーマを、本学のカリキュラムを通じて養われたDP1からDP4までの力を活用することによって、直面した課題にアジャイルに対応する機会となり、これが本学の目指す人材像を念頭においた上での学びの集大成である</u>と考える。学生はこの<u>全体課題に対して、具体的な社会課題を扱うケーススタディを通し、課題について調査し、検証しながら、個人課題を設定し、その解決に向けた提案を行う。各回の課題や最終成果物を作成・提出し、そのプロセスと教員・指導補助者からのフィードバックを通して理解度を確認するとともに、全体課題から個人課題を抽出するプロセスを授業の一環として置き、その課題に対する解決策を最終成果物にアウトプットする。</u> 授業の進行にあたっては担当教員が<u>授業全体の統括、成績評価の基準を作成するとともにその責任を負う。</u>アカデミック・アドバイザー (AA) が指導補助者として<u>教員の指示のもと授業運営や補助、</u>学生の進捗管理を行う。本科目の授業の方法の詳細については、「5 (2) 授業の方法の詳細」を参照されたい。	授業は、4年次に履修、半期で4単位修得とする。具体的な社会課題を扱うケーススタディを通して、課題について調査し、検証しながら、その解決に向けた提案を行う。最終的に成果物を提出し、フィードバックを通して理解度を確認する。 授業の進行にあたっては担当教員が<u>プロジェクトの進行と課題の背景にある知見の提供を行い、</u>アカデミック・アドバイザー (AA) が指導補助者として<u>ファシリテーションと学生の進捗管理を行う。</u>

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (45 ページ)

新	旧
③ 「演習科目/ゼミ」 大学設置基準上の演習科目に相当し、本学におけるディプロマ・ポリシー修得の集大成として実施される必修授業「プロジェクト実践」に対してこの方法を適用している。本学の定める進級要件を前提に、すべての学生が4年次に履修する。授業では実社会で起こっている問題や課題を<u>データ分</u>	③ 「演習科目/ゼミ」 大学設置基準上の演習科目に相当し、本学におけるディプロマ・ポリシー修得の集大成として実施される必修授業「プロジェクト実践」に対してこの方法を適用している。本学の定める進級要件を前提に、すべての学生が4年次に履修する。授業では実社会で起こっている問題や課題をケースス

析やケーススタディとして取り上げ、課題解決のステップを学びながら仮説検証を繰り返し、学問分野に捉われず学修者自身が多様なデジタルツールを駆使し解決策を追求していく。後半ではテーマに関係のある事柄を中心に他の学生と対話や討論を繰り返し、様々な考えに触れながら批判的に検討し分析する。最終**成果物として**自ら考えた解決策を**提出に至る過程で**、学生同士が学びを深めていくアクティブラーニングである。

授業はビデオ会議システムを活用し、リアルタイムに実施する。複数の担当教員が協力して、**ライブ映像の講義形式で知識やスキルなどを修得し演習を通じて理解を図る講義・演習回と、最大40名の中規模のグループ形式で演習を行い修得した知識・スキルを実践したり、個人発表とそのピアレビュー等を行ったりといった演習回を設ける。なお、演習は教員の指示のもと、指導補助者（アカデミック・アドバイザー（AA）およびティーチング・アシスタント（TA））が学びをより深めるよう話題提供やファシリテーションを行い、実践力を養う。**

本科目は講義・演習回ではライブ映像形式で、演習回では中規模のグループ形式での実施を予定しているが、ライブ映像形式の場合やむをえない欠席や復習のためのアーカイブ視聴を可能とするとともに、演習形式の場合も複数の時間帯で同一の内容を実施し、修学に時間的制約のある学生も履修可能な科目とする。学生が個々の予定に応じて受講可能な時間帯を複数提出し、40人程度のグループに割り振る。一つのグループに対してアカデミック・アドバイザー（AA）2名が主担当と副担当となり、さらにディスカッションなどの補佐をティーチング・アシスタント（TA）2名が担当し、指導補助者4名で40人程度の学生のアクティブ・ラーニングを進める。一回あたりの授業時間は3時間とし、**通期**で15回の授業を行う。また、毎回の課題と中間発表、最終**成果物**の準備が授業外の学修として課され、全体として180時間4単位の学修時間を要する設計とする。授業の成績評価は、**担当教員が予め評価基準を用意**

タディとして取り上げ、課題解決のステップを学びながら仮説検証を繰り返し、学問分野に捉われず学修者自身が多様なデジタルツールを駆使し解決策を追求していく。後半ではテーマに関係のある事柄を中心に他の学生と対話や討論を繰り返し、様々な考えに触れながら批判的に検討し分析する。**最終的には自ら考えた解決策を発表し、フィードバックを得ることで、**学生同士が学びを深めていくアクティブラーニングである。

授業はビデオ会議システムを活用し、リアルタイムに実施する。複数の担当教員が協力して**構成したオンデマンドの授業動画により、プロジェクトの進行や分析・調査、解決策の検討に関する知見が提供され、学生に対するファシリテーションは教員の監修のもと、指導補助者（アカデミック・アドバイザー（AA）およびティーチング・アシスタント（TA））が動画教材を用いて行う。**

本科目は複数の時間帯で同一の内容を実施し、修学に時間的制約のある学生も履修可能な科目とする。学生が個々の予定に応じて受講可能な時間帯を複数提出し、40人程度のグループに割り振る。一つのグループに対してアカデミック・アドバイザー（AA）2名が主担当と副担当となり、さらにディスカッションなどの補佐をティーチング・アシスタント（TA）2名が担当し、指導補助者4名で40人程度の学生のアクティブ・ラーニングを進める。一回あたりの授業時間は3時間とし、半期で15回の授業を行う。また、毎回のレポート課題と中間発表、最終発表の準備が授業外の学修として課され、全体として180時間4単位の学修時間を要する設計とする。授業の成績評価は、指導補助者の採点補助のもと、担当教員が行う。

し、これに基づく指導補助者の採点補助のもと、担当教員が最終的な評価を行う。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) p.45 (一部抜粋)
(新)

展開科目 (考査)	社会接続科目	社会接続	アニメ産業に関わる仕事	3~4年次	演習科目	3~4	CAR-3-C3-0034-003				○			○		○		○
展開科目 (考査)	卒業プロジェクト科目	卒業プロジェクト	プロジェクト実践	4年次	演習科目	1~4	PRJ-4-A3-1234-001	○	○					◎	◎	◎	◎	◎
自由科目	自由科目	自由科目	イラストとエンタテインメントA	1~4年次	オンデマンド科目	1,3	OPT-1-D1-1030-001					○			○			

(旧)

展開科目 (考査)	社会接続科目	社会接続	アニメ産業に関わる仕事	3~4年次	演習科目	3~4	CAR-3-C3-0034-003				○					○		○
展開科目 (考査)	卒業プロジェクト科目	卒業プロジェクト	プロジェクト実践	4年次	演習科目	1~2,3~4	PRJ-4-A3-1234-001	○	○					◎	◎	◎	◎	◎
自由科目	自由科目	自由科目	イラストとエンタテインメントA	1~4年次	オンデマンド科目	1,3	OPT-1-D1-1030-001					○				○		

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類(資料)(51ページ)
 ※以下の「設置の趣旨等を記載した書類(資料)」において、一部科目については審査意見16の対応においても新旧対照表に記載する内容が含まれているため、審査意見5の新旧対照表においてもその内容を記載するものとする。

(新)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	
導入科目 (14単位)																		導入科目：14単位 基礎科目：18単位 基礎リテラシー科目：26単位 多言語情報理解科目：8単位 世界理解科目：62単位 社会接続科目：10単位 卒業プロジェクト科目：4単位 合計履修単位数：124単位
基礎科目 (12単位以上)																		
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	Webアプリケーション開発3	2	Webアプリケーション開発4 メディアアート史	2	インターネット概論	2	コンピュータ概論	2			逆さ科学史	2					
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)					機械翻訳実践(異文化理解)		2										
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	ゲーム制作論基礎 異文化理解	2 2	芸術と文化資本 I	2	コンテンツ産業論 科学哲学	2 2	アニメ産業史 日本のゲーム産業史	2 2	二次創作の歴史から見るネット文化 メディア論	2 2	2	ジェンダー論 日本大衆文化史	2 2	2	共創地球論	2	
	社会接続科目 (上履10単位)	キャリアデザイン II (仕事理解)	2	キャリアデザイン III (就活実践)	2					ゲーム制作論応用	2							
	卒業プロジェクト科目 (4単位)																	
履修単位数			8		8		9		7		6		4		5		4	
					32												18	

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	
導入科目 (14単位)																		導入科目：14単位 基礎科目：18単位 基礎リテラシー科目：26単位 多言語情報理解科目：8単位 世界理解科目：62単位 社会接続科目：10単位 卒業プロジェクト科目：4単位 合計履修単位数：124単位
基礎科目 (12単位以上)																		
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	Webアプリケーション開発3	2	Webアプリケーション開発4 メディアアート史	2	インターネット概論	2	コンピュータ概論	2			逆さ科学史	2					
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)					機械翻訳実践(異文化理解)		2										
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	ゲーム制作論基礎 異文化理解	2 2	芸術と文化資本 I	2	コンテンツ産業論 科学哲学	2 2	アニメ産業史 日本のゲーム産業史	2 2	二次創作の歴史から見るネット文化 メディア論	2 2	2	ジェンダー論 日本大衆文化史	2 2	2	共創地球論	2	
	社会接続科目 (上履10単位)	キャリアデザイン II (仕事理解)	2	キャリアデザイン III (就活実践)	2					ゲーム制作論応用	2							
	卒業プロジェクト科目 (4単位)																	
履修単位数			8		8		9		7		7		5		4		2	
					32												18	

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (52ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)						伝わる論理とコミュニケーション	2	地域課題の解決とイノベーション	2	文化人類学Ⅰ 日本文学Ⅰ	2 2	法学Ⅰ	2					
展開科目 (7・4単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	ビジュアルプログラミング	2	数学の方法 メディアアート史	2 2			Webユーザーエクスペリエンス	2								導入科目：14単位 基礎科目：26単位 基礎リテラシー科目：18単位 多言語情報理解科目：8単位 世界理解科目：70単位 社会接続科目：10単位 卒業科目：64単位 卒業プロジェクト科目：4単位 合計履修単位数：124単位	
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)					機械翻訳実践 (異文化理解)		2										
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	コンテンツ産業論 マクロ経済学	2 2	ミクロ経済学	2	IT産業史 科学哲学	2 2	マルクス経済学	2	情報社会論	2	交渉・合意形成概論 哲学概論	2 2	認知神経科学 メディア論 ジェンダー論	2 2 2	アニメ産業史 文化人類学Ⅱ 共創地球論		2 2 2
	社会接続科目 (上級10単位)	キャリアデザインⅡ (仕事理解)	2	キャリアデザインⅢ (就業実践)	2													
	卒業プロジェクト科目 (4単位)										プロジェクト実践							4
	履修単位数		8		8		7		7		7		7		7			7
		30								28								

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)						伝わる論理とコミュニケーション	2	地域課題の解決とイノベーション	2	文化人類学Ⅰ 日本文学Ⅰ	2 2	法学Ⅰ	2					
展開科目 (7・4単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	ビジュアルプログラミング	2	数学の方法	2			Webユーザーエクスペリエンス	2								導入科目：14単位 基礎科目：24単位 基礎リテラシー科目：18単位 多言語情報理解科目：8単位 世界理解科目：70単位 社会接続科目：10単位 履修プロジェクト科目：4単位 合計履修単位数：124単位	
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)					機械翻訳実践（異文化理解）		2										
	世界理解科目 (基礎含め20単位以上)	コンテンツ産業論 マクロ経済学	2 2	ミクロ経済学	2	IT産業史 科学哲学	2 2	マルクス経済学	2	情報社会論	2	交渉・合意形成概論 哲学概論	2 2	認知神経科学 メディア論 ジェンダー論	2 2 2	アニメ産業史 文化人類学Ⅱ 共創地球論		2 2 2
	社会接続科目 (上級10単位)	キャリアデザインⅡ (仕事理解)	2	キャリアデザインⅢ (就業実践)	2													
	卒業プロジェクト科目 (4単位)										プロジェクト実践			4				
履修単位数			8		8		7		7		8		8		6		6	
		30								28								

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類(資料) (53ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数	
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q			
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数		
導入科目 (14単位)																			
基礎科目 (12単位以上)												地域アントレプレ ナリーシップ	2						
展開科目 (7・4単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	ゲームプログラミング演習		2	Webアプリケーション開発演習		2	ゼミ(インターネットのしくみ(応用))								4	導入科目: 14単位 基礎科目: 18単位 基礎リテラシー科目: 56単位 多言語情報理解科目: 8 単位 世界理解科目: 38単位 社会理解科目: 4単位 展開科目: 92単位 卒業プロジェクト科目: 4単位 合計履修単位数: 124単 位		
		チームプログラミング演習		2	インターネットのしくみ		2												
		プロジェクトマネジメント応用		2	Webセキュリティ演習		2												
		クラウドコン ピューティング技 術	2	暗号技術とその応 用		2													
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)		機械翻訳実践(異文化理解)		2														
	世界理解科目 (基礎含め26単位以 上)	コンテンツ産業論	2	公共哲学	2	スタートアップ		2	企業経営と会計	2			マンガ産業史 異文化理解	2	デジタル・マーケ ティング	2		芸術と文化資本Ⅰ	2
	社会理解科目 (上限10単位)			対人コミュニケー ション論	2														
	卒業プロジェクト科目 (4単位)	プロジェクト実践																4	
履修単位数		7		7		6		6		4			4		6		6		
		26																20	

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)										地域アントレプレ ナリーシップ	2							
展開科目 (7・4単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	ゲームプログラミング演習		2	Webアプリケーション開発演習		2	ゼミ(インターネットのしくみ(応用))								導入科目: 14単位 基礎科目: 18単位 基礎リテラシー科目: 56単位 多言語情報理解科目: 8単位 世界理解科目: 38単位 社会理解科目: 4単位 展開科目: 92単位 卒業プロジェクト科目: 4単位 合計履修単位数: 124単位		
		チームプログラミング演習		2	インターネットのしくみ		2											
		プロジェクトマネジメント応用		2	Webセキュリティ演習		2											
		クラウドコン ピューティング技 術	2	暗号技術とその応 用		2												
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)		機械翻訳実践(異文化理解)		2													
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	コンテンツ産業論	2	公共哲学	2	スタートアップ		2	企業経営と会計	2			マンガ産業史 異文化理解	2	デジタル・マーケ ティング	2	芸術と文化資本Ⅰ	2
	社会理解科目 (上限10単位)			対人コミュニケーション論	2													
	卒業プロジェクト科目 (4単位)																	
	プロジェクト実践												4					
	履修単位数		7		7		6		6		5		5		5		5	
		26								20								

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類(資料) (54ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)				数学的思考とは何 か	2													
履 修 科 目 (74 単 位 以 上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	機械学習概論	2	逆さ科学史	2	ディープラーニング 1 データサイエンス 実践1 (アンケート ト)	2	2	2	ディープラーニング 2	2	2		ディープラーニング 3 データサイエンス 実践II (モデリン グ)	2	2	2	
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践 (法学)			2	機械翻訳実践 (自然科学)			2									
	世界理解科目 (基礎含め26単位以 上)	メディアで検証する未来の作り 方			2	現代社会理論			2	ゼミ (情報社会の政治学)						4		
	社会接納科目 (上級10単位)	ジェンダー論	2	産業とデジタルテ クノロジー	2	日本科学史			2	意思決定の能力開 発			2	交渉・合意形成概 論			2	
	卒業プロジェクト科目 (4単位)	メディア論			2													
					2													
					2													
					2													
卒業プロジェクト科目 (4単位)					プロジェクト実践												4	
履修単位数		8		8		6		6		4		4		6		6		
		28																20

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)				数学的思考とは何か	2													
履修科目 74単位以上	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	機械学習概論	2	逆さ科学史	2	ディープラーニング1 データサイエンス実践1 (アンケート)	2	2	2	ディープラーニング2	2	2		ディープラーニング3 データサイエンス実践II (モデリング)	2	2	データサイエンス実践Ⅲ (時系列)	2
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践 (世界情勢)			2	機械翻訳実践 (自然科学)			2									
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	メディアで検証する未来の作り方			2	科学技術と社会Ⅱ			2	ゼミ (サイエンス・コミュニケーション)								
	社会接納科目 (上級10単位)	ジェンダー論	2	産業とデジタルテクノロジー	2	2	2	2	2	意思決定の能力開発		2	2	交渉・合意形成論			2	
	社会接納科目 (上級10単位)	メディア論	2															
	卒業プロジェクト科目 (4単位)																	
	卒業プロジェクト科目 (4単位)																	
履修単位数			8		8		6		6		5		5		5		5	
		28								20								

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類(資料) (55ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)		伝わる論理とコミュニケーション	2					地域課題の解決とイノベーション	2			法学Ⅰ	2					
展開科目 (7・4単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	ビジュアルプログラミング	2	メディアアート史	2			Webユーザーエクスペリエンス	2							Pythonプログラミング	2	
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践 (英語読解・作文)			2	機械翻訳実践 (日本研究)			2	機械翻訳実践 (情報)			2					
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	日本大衆文化史	2	日本文学Ⅱ	2	戦後日本史Ⅰ	2	日本科学史	2	メディア論	2	交渉・合意形成理論	2	認知神経科学	2	アニメ産業史	2	
				農業とデジタルテクノロジー ミクロ経済学	2	マクロ経済学	2			ジェンダー論	2			情報社会論 経済言語史 マンガ産業史	2 2 2	公共哲学	2	
	社会接続科目 (上限10単位)					キャリアデザインⅡ (仕事理解)	2											
	卒業プロジェクト科目 (4単位)											プロジェクト実践					4	
履修単位数		7		9		7		7		6		6		9		7		
		30								28								

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
		導入科目 (14単位)																
		基礎科目 (12単位以上)	伝わる論理とコミュニケーション	2				地域課題の解決とイノベーション	2			法学Ⅰ	2					
展開科目 (7・4単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	ビジュアルプログラミング	2	メディアアート史	2			Webユーザーエクスペリエンス	2							Pythonプログラミング	2	
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践(英語読解・作文)			2	機械翻訳実践(日本研究)			2	機械翻訳実践(情報)			2					
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	日本大衆文化史	2	日本文学Ⅱ	2	戦後日本史Ⅰ	2	日本科学史	2	メディア論	2	交渉・合意形成理論	2	認知神経科学	2	アニメ産業史	2	
				農業とデジタルテクノロジー ミクロ経済学	2 2	マクロ経済学	2			ジェンダー論	2			情報社会論	2	公共哲学	2	
														経済言語史	2			
		社会接続科目 (上限10単位)					キャリアデザインⅡ (仕事理解)	2							マンガ産業史	2		
		卒業プロジェクト科目 (4単位)								プロジェクト実践			4					
		履修単位数	7		9		7		7		7		7		8		6	
					30									28				

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (56ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)		数学史	2								地域アントレプレ ナーシップ	2						
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)			JavaScriptによる 自動化、効率化	2	クラウドコン ピューティング技 術	2	画像処理論	2								導入科目：14単位 基礎科目：18単位 基礎リテラシー科目： 30単位 多言語情報理解科目：8 単位 世界理解科目：52単位 社会接続科目：10単位 卒業プロジェクト科目 ：4単位 合計履修単位数：124単 位	
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)			機械翻訳実践（異文化理解）				2										
	コンテンツ産業論	2	スタートアップ	2	マンガ産業史	2	デジタル・マーケ ティング 日本のゲーム産業 史	2	企業経営と会計	2	マルクス経済学	2	二次創作の歴史から見るネット文化		2			
	世界理解科目 (基礎含め26単位以 上)	IT産業史	2	公共哲学	2			2	科学技術と社会	2	2		異文化理解	2	文化人類学Ⅱ	2		
		情報社会論	2										リテラシーと応用 のための物語理論	2	芸術と文化資本Ⅰ	2		
	社会接続科目 (上限10単位)		デジタル画像創作 論Ⅲ	1	デジタル画像活用 Ⅰ	1	デジタル画像活用 Ⅱ	1										
	卒業プロジェクト科目 (4単位)									プロジェクト実践								4
履修単位数			8		7		6		8		5		5		6		6	
		29																
		22																

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)		数学史	2							地域アントレプレナーシップ	2							
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)			JavaScriptによる自動化、効率化	2	クラウドコンピューティング技術	2	画像処理論	2									
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)					機械翻訳実践（異文化理解）		2										
	コンテンツ産業論	2	スタートアップ	2	マンガ産業史	2	デジタル・マーケティング 日本のゲーム産業史	2	企業経営と会計	2	マルクス経済学	2	二次創作の歴史から見るネット文化			2		
	IT産業史	2	公共哲学	2				2	科学技術と社会Ⅰ	2			異文化理解	2	文化人類学Ⅱ	2		
	情報社会論	2											リテラシーと応用のための物語理論	2	芸術と文化資本Ⅰ	2		
	社会接続科目 (上限10単位)		デジタル画像創作論Ⅲ	1	デジタル画像活用Ⅰ	1	デジタル画像活用Ⅱ	1										
	卒業プロジェクト科目 (4単位)								プロジェクト実践				4					
履修単位数		8		7		6		8		6		6		5		5		
		29																22

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (57ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)																		
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	電磁気学	2	位相空間	2	圏論	2	多様体	2					ビッグデータ分析 概論	2	データサイエンス 実践Ⅲ (時系列)	2	
			数理統計	2	信号技術とその応 用	2	熱統計力学	2					オートマトンと形 式言語理論	2	論理回路概論	2		
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)				ディープラーニン グⅠ	2	ディープラーニン グⅡ	2										
					機械翻訳実践 (異文化理解)		2	機械翻訳実践 (情報)		2								
	世界理解科目 (基礎含め26単位以 上)	IT産業史	2						統計学を哲学する	2	ミクロ経済学	2			交渉・合意形成概 論	2		
	社会接納科目 (上級10単位)																	
	卒業プロジェクト科目 (4単位)												プロジェクト実践		4			
履修単位数			6		6		7		7		4		4		5		7	
					26								20					

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)																		
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	群論	2	位相空間	2	圏論	2	多様体	2					ビッグデータ分析 概論	2	データサイエンス 実践Ⅲ (時系列)	2	
		電磁気学	2	数理統計	2	信号技術とその応 用	2	熱統計力学	2					オートマトンと形 式言語理論	2	論理回路概論	2	
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)					ディープラーニン gⅠ	2	ディープラーニン gⅡ	2									
						機械翻訳実践 (異文化理解)		2	機械翻訳実践 (情報)		2							
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	IT産業史	2							統計学を哲学する	2	ミクロ経済学	2			交渉・合意形成概 論	2	
	社会接納科目 (上級10単位)																	
	卒業プロジェクト科目 (4単位)											プロジェクト実践	4					
履修単位数			6		6		7		7		5		5		4		6	
					26								20					

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (58ページ)

(新)

		3年次						4年次								合計単位数						
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q			4Q					
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数					
導入科目 (14単位)																						
基礎科目 (12単位以上)																						
展開科目 (7・4単位以上)	基盤リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	自然言語処理の方法			2	統計数理の方法			2	ゼミ (AIデータサイエンス価値創造ゼミⅠ)							4					
		Wolfram言語で学ぶ科学計算			2	ビッグデータ分析実践		2	データサイエンス実践Ⅱ (時系列)		2	データサイエンス実践Ⅱ (モデリング)		2	日常に現れる物理学		2	クラウドコンピュティング技術		2		
	データサイエンス実践Ⅰ (アンケート)	2	数理統計	2	ディープラーニング3	2																
	ディープラーニング2	2																				
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践 (異文化理解)																2	機械翻訳実践 (情報)	2		
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	IT産業史	2	ミクロ経済学	2	農業とデジタルテクノロジー		2	スタートアップ実践									2				
	社会情報科目 (上級10単位)	統計学を哲学する																2				
卒業プロジェクト科目 (4単位)		プロジェクト実践																4				
履修単位数		8		6		6		6		5		5		7		3						
		26								20												

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数			
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q					
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数				
導入科目 (14単位)																					
基礎科目 (12単位以上)																					
展開科目 (7・4単位以上)	自然言語処理の方法			2	統計数理の方法			2	ゼミ（AIデータサイエンス価値創造ゼミⅠ）									4			
	Wolfram言語で学ぶ科学計算			2	ビッグデータ分析実践			2	データサイエンス実践Ⅱ（時系列）		2	データサイエンス実践Ⅱ（モデリング）		2	日常に現れる物理学		2	クラウドコンピュティング技術		2	導入科目：14単位 基礎科目：14単位 基盤リテラシー科目：70単位 多言語情報理解科目：8単位 世界理解科目：28単位 社会情報科目：0単位 展開科目：96単位 卒業プロジェクト科目：4単位 合計履修単位数：124単位
	データサイエンス実践Ⅰ（アンケート）		2	数理統計		2	ディープラーニング		2												
	ディープラーニング		2																		
											機械翻訳実践（異文化理解）		2	機械翻訳実践（慣習）		2					
	IT産業史		2	ミクロ経済学		2	農業とデジタルテクノロジー		2												
															スタートアップ実践		2				
														統計学を哲学する		2					
卒業プロジェクト科目 (4単位)		プロジェクト実践																4			
履修単位数		8		6		6		6		6		6		6		6		2			
		26																	20		

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (59ページ)

(新)

			3年次								4年次								合計単位数		
			3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q				
			授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数			
導入科目 (14単位)																					
基礎科目 (12単位以上)																					
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	Webアプリケーション開発3	2	Webアプリケーション開発4	2	インターネット概論	2	コンピュータ概論	2					逆さ科学史	2						
		機械翻訳実践 (異文化理解)				2															
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)																				
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	異文化理解	2	アニメ産業史	2	コンテンツ産業論	2	日本のゲーム産業史	2	二次創作の歴史から見るネット文化				2	ジェンダー論	2	共創地球論	2			
						人新世の人類学	2	日本文学Ⅱ	2	メディア論	2	文化人類学Ⅱ	2	ゲーム制作論応用	2	日本大衆文化史	2				
	社会接続科目 (10単位を上限)	キャリアデザインⅡ (仕事理解)	2	キャリアデザインⅢ (就活実践)	2																
	卒業プロジェクト科目 (4単位)													プロジェクト実践					4		
履修単位数			7		7		6		6		6		6		6		7		3		
			26								22										

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数	
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q			
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数		
導入科目 (14単位)																			
展開科目 (74単位以上)	基礎科目 (12単位以上)																		
	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	Webアプリケーション開発3	2	Webアプリケーション開発4	2	インターネット概論	2	コンピュータ概論	2			逆さ科学史	2						
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践 (異文化理解)		2															
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	異文化理解	2	アニメ産業史	2	コンテンツ産業論	2	日本のゲーム産業史	2	二次創作の歴史から見るネット文化		2	ジェンダー論	2	共創地球論	2			
	社会接続科目 (10単位を上限)					人新世の人類学	2	日本文学Ⅱ	2	メディア論	2	文化人類学Ⅱ	2	ゲーム制作論応用	2				
									ゲーム制作論基礎	2				日本大衆文化史	2				
	卒業プロジェクト科目 (4単位)	キャリアデザインⅡ (仕事理解)	2	キャリアデザインⅢ (就活実践)	2														
	履修単位数		7		7		6		6		7		7		6		2		
		26												22					

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類(資料) (60ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)		社会学Ⅰ	2	地域課題の解決と イノベーション	2			法学Ⅰ	2	文化人類学Ⅰ	2	地域アントレプレ ナーシップ	2					
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め6単位以上)							逆さ科学史	2							Webユーザーエク スペリエンス	2	
	多言語情報理解科目 (基礎含め6単位以上)	機械翻訳実践 (異文化理解)			2													
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	IT産業史	2	ミクロ経済学	2	コンテンツ産業論	2	交渉・合意形成概 論	2	認知神経科学	2	アニメ産業史	2	科学哲学	2	哲学概論	2	
						マクロ経済学	2	マルクス経済学	2			文化人類学Ⅱ	2	メディア論	2	共創地球論	2	
						人新世の人類学	2							ジェンダー論	2			
						リテラシーと応用 のための物語理論	2											
	社会接続科目 (10単位を上限)	キャリアデザイン Ⅱ (仕事理解)	2	キャリアデザイン Ⅲ (就活実践)	2													
卒業プロジェクト科目 (4単位)										プロジェクト実践								4
履修単位数			7		7		8		8		5		7		7		7	
						30								26				

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
展開科目 (74単位以上)	導入科目 (14単位)																	
	基礎科目 (12単位以上)	社会学Ⅰ	2	地域課題の解決とイノベーション	2			法学Ⅰ	2	文化人類学Ⅰ	2	地域アントレプレナーシップ	2					
	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)							逆さ科学史	2							Webユーザーエクスペリエンス	2	
	多言語情報理解科目 (基礎含め6単位以上)	機械創成実践(異文化理解)			2													
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	IT産業史	2	ミクロ経済学	2	コンテンツ産業論	2	交渉・合意形成概論	2	認知神経科学	2	アニメ産業史	2	科学哲学	2	哲学概論	2	
					マクロ経済学 人新世の人類学 リテラシーと応用のための物語理論	2 2 2	マルクス経済学	2	文化人類学Ⅱ	2	アニメ産業史Ⅱ	2	メディア論 ジェンダー論	2 2		2 2	共創地球論	2
	社会接続科目 (10単位を上限)	キャリアデザインⅡ (仕事理解)	2	キャリアデザインⅢ (就活実践)	2													
卒業プロジェクト科目 (4単位)									プロジェクト実践				4					
履修単位数		7		7		8		8		6		8		6		6		
		30																26

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (61ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数		
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q				
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数			
導入科目 (14単位)																				
基礎科目 (12単位以上)																地域アントレプレナーシップ	2			
履修科目 74単位以上	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	Webアプリケーション開発演習			2	ゼミ (インターネットのしくみ (応用))						4	ゲームプログラミング演習			2	導入科目: 14単位 基礎科目: 18単位 基礎リテラシー科目: 56単位 多言語情報理解科目: 8単位 世界理解科目: 38単位 社会理解科目: 4単位 履修科目: 52単位 卒業プロジェクト科目: 4単位 合計履修単位数: 124単位			
		クラウドコンピューティング技術	2	チームプログラミング演習		2							暗号技術とその応用	2						
				プロジェクトマネジメント応用		2														
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践 (異文化理解)			2															
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	世界が変わる編集力	2	公共哲学	2	コンテンツ産業論	2	スタートアップ	2	企業経営と会計	2	タル・マーケティング	2	マンガ産業史	2	芸術と文化資本Ⅰ		2		
				日本のゲーム産業史	2	科学技術と社会	2			異文化理解	2									
	社会理解科目 (10単位を上限)							対人コミュニケーション論		2										
										プロジェクト実践								4		
卒業プロジェクト科目 (4単位)												プロジェクト実践						4		
履修単位数			6		6		7		7		6		4		6		6			
						26										22				

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数	
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q			
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数		
導入科目 (14単位)																			
基礎科目 (12単位以上)																地域アントレプレナーシップ	2		
履修科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含む8単位以上)	Webアプリケーション開発演習			2	ゼミ (インターネットのしくみ (応用))					4	ゲームプログラミング演習			2	導入科目: 14単位 基礎科目: 18単位 基礎リテラシー科目: 56単位 多言語情報理解科目: 8単位 世界理解科目: 38単位 社会理解科目: 4単位 履修科目: 52単位 卒業プロジェクト科目: 4単位 合計履修単位数: 124単位			
	多言語情報理解科目 (基礎含む8単位以上)	クラウドコンピューティング技術	2	チームプログラミング演習		2			暗号技術とその応用	2									
				プロジェクトマネジメント応用		2													
	多言語情報理解科目 (基礎含む8単位以上)	機械翻訳実践 (異文化理解)			2														
	世界理解科目 (基礎含む26単位以上)	世界が変わる編集力	2	公共哲学	2	コンテンツ産業論	2	スタートアップ	2	企業経営と会計	2	タル・マーケティング	2	マンガ産業史	2			芸術と文化資本Ⅰ	2
					日本のゲーム産業史	2	科学技術と社会Ⅰ	2		異文化理解	2								
	社会理解科目 (10単位を上限)						対人コミュニケーション論		2										
	卒業プロジェクト科目 (4単位)									プロジェクト実践			4						
履修単位数		6	6	7	7	7	7	7	5	5	5	5	5	5	5				
		26																22	

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類(資料) (62ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数	
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q			
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数		
導入科目 (14単位)																			
基礎科目 (12単位以上)		情報セキュリティディ 概論	2	数学的思考とは何 か	2														
展 開 課 目 (74 単 位 以 上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	機械学習概論	2	逆さ科学史	2	データサイエンス 実践Ⅰ (アンケート)	2			ディープラーニン グ2	2	日常に現れる物理 学	2	ディープラーニン グ3	2	データサイエンス 実践Ⅲ (時系列)	2		
						ディープラーニン グ1	2							データサイエンス 実践Ⅱ (モデリン グ)	2				
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践 (自然科学)				2	機械翻訳実践 (法学)				2								
		現代社会理解				2	ゼミ (情報社会の政治学)												
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	メディア論	2	日本科学史	2			意思決定の能力開 発	2	情報社会論	2	交渉・合意形成概 論	2		メディアで検証する未来の作り方				2
	社会接続科目 (10単位を上限)								農業とデジタルテ クノロジー	2									
卒業プロジェクト科目 (4単位)														プロジェクト実践				4	
履修単位数			8		8		6		6		6		6		6		4		
		28																	
		22																	
		26																	
		22																	

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)		情報セキュリティ概論	2	数学的思考とは何か	2													
展開科目 (74単位以上)	機械学習概論	2	逆さ科学史	2	データサイエンス実践Ⅰ (アンケート)	2		ディープラーニング2	2	日常に現れる物理学	2	ディープラーニング3	2	データサイエンス実践Ⅲ (時系列)	2			
	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)				ディープラーニング1	2						データサイエンス実践Ⅱ (モデリング)	2					
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践 (自然科学)			2	機械翻訳実践 (世界情勢)			2									
		科学技術と社会Ⅱ			2	ゼミ (サイエンス・コミュニケーション)						4	メディアで検証する未来の作り方			2		
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	メディア論	2	日本科学史	2			意思決定の能力開発 農業とデジタルテクノロジー	2	情報社会論	2	交渉・合意形成概論	2					
	社会接続科目 (10単位を上限)																	
	卒業プロジェクト科目 (4単位)														プロジェクト実践	4		
履修単位数			8		8		6		6		5		5		7		5	
		26																
		22																
		26																

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (63ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)		社会学Ⅰ	2	地域課題の解決と イノベーション	2			法学Ⅰ	2			地域アントレプレ ナーシップ	2					
展開科目 (7・4 単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)			Pythonプログラ ミング	2			逆さ科学史	2							Webユーザーエク スペリエンス	2	
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践 (日本研究)			2	機械翻訳実践 (情報)			2									
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	戦後日本史Ⅰ	2	ミクロ経済学	2	IT産業史	2	日本文学Ⅱ	2	認知神経科学	2	アニメ産業史	2	メディア論	2	交渉・合意形成概 論	2	
				日本科学史	2	日本大衆文化史	2			情報社会論	2	公共哲学	2	ジェンダー論	2	農業とデジタルテ クノロジー	2	
					経済言語史	2												
	社会接続科目 (10単位を上限)	キャリアデザイン Ⅱ (仕事理解)	2													ネットワーク産業論	2	
卒業プロジェクト科目 (4単位)										プロジェクト実践								4
履修単位数			7		9		7		7		5		7		8		8	
		30								28								

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
展開科目 (7・4 単位以上)	基礎科目 (12単位以上)	社会学Ⅰ	2	地域課題の解決と イノベーション	2			法学Ⅰ	2			地域アントレプレ ナーシップ	2					
	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)			Pythonプログラ ミング	2			逆さ科学史	2							Webユーザーエク スペリエンス	2	
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)			機械翻訳実践 (日本研究)	2			機械翻訳実践 (情報)	2									
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	戦後日本史Ⅰ	2	ミクロ経済学	2	IT産業史	2	日本文学Ⅱ	2	認知神経科学	2	アニメ産業史	2	メディア論	2	交渉・合意形成概 論	2	
				日本科学史	2	日本大衆文化史	2			情報社会論	2	公共哲学	2	ジェンダー論	2	農業とデジタルテ クノロジー	2	
	社会接続科目 (10単位を上限)	キャリアデザイン Ⅱ (仕事理解)	2															
	卒業プロジェクト科目 (4単位)										プロジェクト実践		4					
履修単位数		7		9		7		7		6		8		7		7		
		30								28								

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (64ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)												地域アントレプレ ナーシップ	2					
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	クラウドコン ピューティング技 術	2	JavaScriptによる 自動化、効率化	2			画像処理論	2									
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践（異文化理解）			2													
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	二次創作の歴史から見るネット文化			2	マンガ産業史	2	デジタル・マーケ ティング	2	企業経営と会計	2	マルクス経済学	2	異文化理解	2	文化人類学Ⅱ	2	
		コンテンツ産業論	2	スタートアップ	2	リテラシーと応用 のための物語理論	2	近・現代アート概 論	2					情報社会論	2	芸術と文化資本Ⅰ	2	
		公共哲学	2															
	社会接続科目 (10単位を上限)									デジタル画像活用 Ⅰ	1	デジタル画像活用 Ⅱ	1					
	卒業プロジェクト科目 (4単位)									プロジェクト実践							4	
履修単位数			8		6		6		6		4		6		5		5	
		26								20								

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)												地域アントレプレナーシップ	2					
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	クラウドコンピューティング技術	2	JavaScriptによる自動化、効率化	2			画像処理論	2								導入科目：14単位 基礎科目：18単位 基礎リテラシー科目：36単位 多言語情報理解科目：8単位 世界理解科目：52単位 社会接続科目：10単位 展開科目：92単位 卒業プロジェクト科目：4単位 合計履修単位数：124単位	
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践（異文化理解）			2													
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	二次創作の歴史から見るネット文化		2	マンガ産業史	2	デジタル・マーケティング	2	企業経営と会計	2	マルクス経済学	2	異文化理解	2	文化人類学Ⅱ	2		
		コンテンツ産業論	2	スタートアップ	2	リテラシーと応用のための物語理論	2	近・現代アート概論	2					情報社会論	2	芸術と文化資本Ⅰ		2
		公共哲学	2															
	社会接続科目 (10単位を上限)									デジタル画像活用Ⅰ	1	デジタル画像活用Ⅱ	1					
	卒業プロジェクト科目 (4単位)									プロジェクト実践				4				
履修単位数			8		6		6		6		5		7		4	4		
		26								20								

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (65ページ)

(新)

		3年次								4年次								合計単位数
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 (14単位)																		
基礎科目 (12単位以上)																		
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	群論	2	位相空間	2	圏論	2	多様体	2	ビッグデータ分析 概論	2			データサイエンス 実践Ⅲ (熱系列)	2			
		電磁気学	2	数理統計	2	暗号技術とその応 用	2	熱統計力学	2									
		ディープラーニン グ2	2	量子力学	2	オートマトンと形 式言語理論	2	論理回路概論	2									
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践 (異文化理解)				2								機械翻訳実践 (情報)		2		
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)					IT産業史	2	ミクロ経済学	2	科学哲学	2	交渉・合意形成概 論 日本科学史	2	統計学を哲学する	2			
	社会接続科目 (10単位を上履)																	
卒業プロジェクト科目 (4単位)										プロジェクト実践							4	
履修単位数			7		7		8		8		5		5		6		2	
						30								18				

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		
導入科目 (14単位)		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
基礎科目 (12単位以上)																		
展開科目 (74単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	群論	2	位相空間	2	圏論	2	多様体	2	ビッグデータ分析概論	2			データサイエンス実践Ⅲ（時系列）	2			
		電磁気学	2	数理統計	2	暗号技術とその応用	2	熱統計力学	2									
		ディープラーニング2	2		2	オートマトンと形式言語理論	2	論理回路概論	2									
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)	機械翻訳実践（異文化理解）			2								機械翻訳実践（情報）			2		
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)					IT産業史	2	ミクロ経済学	2	科学哲学	2	交渉・合意形成概論 日本科学史	2	統計学を哲学する	2			
	社会接続科目 (10単位を上履)																	
卒業プロジェクト科目 (4単位)										プロジェクト実践			4					
履修単位数			7		7		8		8		6		6		5		1	
						30								18				

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類(資料) (66ページ)

(新)

			3年次								4年次								合計単位数		
			3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q				
			授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数			
導入科目 (14単位)																					
基礎科目 (12単位以上)																					
展開科目 (7・4単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	マーケティング×データサイエンス			2	ゼミ (AIデータサイエンス価値創造ゼミⅠ)								4	データサイエンス 実践Ⅱ (モデリン グ)	2	データサイエンス 実践Ⅲ (時系列)	2	導入科目：14単位 基礎科目：14単位 基礎リテラシー科目：70単位 多言語情報理解科目：8単位 世界理解科目：28単位 社会接続科目：0単位 展開科目：96単位 卒業プロジェクト科目：4単位 合計履修単位数：124単位		
		データサイエンス 実践Ⅰ (アンケート)	2	数理統計	2	Wolfram言語で学ぶ科学計算			2	統計数理の方法			2								
		ビッグデータ分析 実践	2	日常に現れる物理 学	2	自然言語処理の方法			2	ディープラーニン グ3		2									
		ディープラーニン グ1	2			ディープラーニン グ2	2														
						クラウドコン ピューティング技術	2														
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)													2	機械翻訳実践 (異文化理解)		2	機械翻訳実践 (情報)		2	
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)	IT産業史	2	ミクロ経済学	2	AI社会の歩き方			2	スタートアップ実践			2	統計学を哲学する			2				
					デジタル・マーケ ティング			2													
	社会接続科目 (10単位を上限)																				
	卒業プロジェクト科目 (4単位)													プロジェクト実践				4			
履修単位数			9		7		8		6		7		5		6		4				
			30																22		

(旧)

		3年次								4年次								合計単位数																
		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q																		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数																	
導入科目 (14単位)																																		
基礎科目 (12単位以上)																																		
展開科目 (7・4単位以上)	基礎リテラシー科目 (基礎含め8単位以上)	マーケティング×データサイエンス			2	ゼミ (AIデータサイエンス価値創造ゼミⅠ)								4	データサイエンス 実践Ⅱ (モデリン グ)	2	データサイエンス 実践Ⅲ (時系列)	2	導入科目：14単位 基礎科目：14単位 基礎リテラシー科目：70単位 多言語情報理解科目：8単位 世界理解科目：29単位 社会接続科目：0単位 展開科目：96単位 卒業プロジェクト科目：4単位 合計履修単位数：124単位															
		データサイエンス 実践Ⅰ (アンケート)	2	数理統計	2	Wolfram言語で学ぶ科学計算			2	統計数理の方法			2																					
		ビッグデータ分析 実践	2	日常に現れる物理学	2	自然言語処理の方法			2	ディープラーニング3			2																					
		ディープラーニング Ⅰ	2			ディープラーニング Ⅱ	2																											
						クラウドコン ピューティング技術	2																											
	多言語情報理解科目 (基礎含め8単位以上)												2	機械翻訳実践 (異文化理解)			機械翻訳実践 (情報)			2														
	IT産業史	2	ミクロ経済学	2	AI社会の歩き方			2	スタートアップ実践			2	統計学を哲学する			2																		
	世界理解科目 (基礎含め26単位以上)				デジタル・マーケ ティング			2																										
	社会接続科目 (10単位を上限)																																	
	卒業プロジェクト科目 (4単位)												プロジェクト実践								4													
履修単位数		9		7		8		6		8		6		5		3																		
		30																22																

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (67ページ)

(新)

		3年次								4年次								履修単位数	
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q			
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数		
導入科目 ・アカデミックリテラシー ・人工知能活用実践	アカデミックリテラシー	2	デジタルツールの使い方	2	ITリテラシー	2											8		
	多言語ITコミュニケーション			2	伝わる論理とコミュニケーション		2	企業経営	2	文化人類学Ⅰ	2								
基礎科目 ・多言語ITコミュニケーション	現代社会とサイエンス心理学			2													12		
				2															
展開科目	基礎リテラシー科目													統計学入門	2	逆さ科学史	2	4	
	多言語情報理解科目									機械翻訳実践（法学）		2	機械翻訳実践（異文化）			2	4		
	世界理解科目	AI社会の歩き方			2	コンテンツ産業論	2	意思決定の能力開発	2	IT産業史	2	アニメ産業史	2	科学哲学	2	交渉・合意形成概論	2	38	
		世界が変わる編集力	2			異文化理解	2	デジタル・マーケティング	2	ジェンダー論	2	文化人類学Ⅱ	2	メディア論	2	公共哲学	2		
						マクロ経済	2	ミクロ経済学	2			近・現代アート概論	2	認知神経科学	2	共創地球論	2		
	社会接続科目	キャリアデザインⅡ（仕事理解）	2	キャリアデザインⅢ（就活実践）	2			対人コミュニケーション論	2									6	
卒業プロジェクト科目										プロジェクト実践								4	4
履修単位数		9		11		10		10		8		8		10		10		76	
		40								36									

(旧)

		3年次								4年次								履修単位	
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q			
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数		
導入科目 ・アカデミックリテラシー ・人工知能活用実践		アカデミックリテラシー	2	デジタルツールの使い方	2	ITリテラシー	2										8		
基礎科目 ・多言語ITコミュニケーション		多言語ITコミュニケーション			2	伝わる論理とコミュニケーション		2	企業経営	2	文化人類学Ⅰ	2					12		
				現代社会とサイエンス心理学		2													
展開科目	基礎リテラシー科目													統計学入門		2	逆さ科学史	2	4
	多言語情報理解科目									機械翻訳実践（世界情勢）			2	機械翻訳実践（異文化）				2	4
	世界理解科目	AI社会の歩き方			2	コンテンツ産業論	2	意思決定の能力開発	2	IT産業史	2	アニメ産業史	2	科学哲学	2	交渉・合意形成概論		2	38
		世界が変わる編集力	2			異文化理解	2	デジタル・マーケティング	2	ジェンダー論	2	文化人類学Ⅱ	2	メディア論	2	公共哲学	2		
						マクロ経済	2	ミクロ経済学	2			近・現代アート概論	2	認知神経科学	2	共創地球論	2		
	社会接続科目	キャリアデザインⅡ（仕事理解）	2	キャリアデザインⅢ（就活実践）	2			対人コミュニケーション論	2									6	
卒業プロジェクト科目										プロジェクト実践				4			4		
履修単位数		9		11		10		10		9		9		9		9		76	
		40								36									

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (68ページ)

(新)

		3年次								4年次								履修単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 ・アカデミックリテラシー ・人工知能活用実践		アカデミックリテラシー	2	経済入門	2												14	
		ITリテラシー	2	デジタルツールの使い方	2													
		人文社会入門	2															
		現代社会と数学	2															
基礎科目 ・多言語ITコミュニケーション				心理学	2	多言語ITコミュニケーション			2			情報倫理と法	2	伝わる論理とコミュニケーション			2	12
						情報セキュリティ概論	2	データサイエンス概論	2									
展開科目	基礎リテラシー科目	ビジュアルプログラミング	2	メディアアート史 Pythonプログラミング	2 2	Webアプリケーション開発1	2	Webアプリケーション開発2 Webユーザーエクスペリエンス	2 2	Webアプリケーション開発3 インターネット概論 Linux概論	2 2 2	Webアプリケーション開発4	2	機械学習概論 コンピュータサイエンス概論	2 2	JavaScriptによる自動化、効率化 コンピュータ概論	2 2	28
	多言語情報理解科目					機械翻訳実践（英語読解・作文）			2	機械翻訳実践（情報）			2				4	
	世界理解科目					世界が変わる編集力 IT産業史	2 2					交渉・合意形成概論	2	科学技術と社会	2	スタートアップ	2	10
	社会接続科目					ネット情報発信概論			2									2
	卒業プロジェクト科目												プロジェクト実践					4
履修単位数			11		11		11		9		8		8		9		7	74
		42								32								

(旧)

		3年次								4年次								履修単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 ・アカデミックリテラシー ・人工知能活用実践		アカデミックリテラシー	2	経済入門	2													
		ITリテラシー	2	デジタルツールの使い方	2													
		人文社会入門	2															
		現代社会と数学	2															
基礎科目 ・多言語ITコミュニケーション				心理学	2	多言語ITコミュニケーション			2			情報倫理と法	2	伝わる論理とコミュニケーション		2		
						情報セキュリティ概論	2	データサイエンス概論	2									
基礎リテラシー科目		ビジュアルプログラミングミニング	2	メディアアート史 Pythonプログラミングミニング	2	Webアプリケーション開発1	2	Webアプリケーション開発2 Webユーザーエクスペリエンス	2	Webアプリケーション開発3 インターネット概論 Linux概論	2 2 2	Webアプリケーション開発4	2	機械学習概論 コンピュータサイエンス概論	2 2	JavaScriptによる自動化、効率化 コンピュータ概論	2 2	
展開科目	多言語情報理解科目					機械翻訳実践（英語読解・作文）			2	機械翻訳実践（情報）			2				4	
	世界理解科目					世界が変わる編集力 IT産業史	2 2					交渉・合意形成概論	2	科学技術と社会Ⅰ	2	スタートアップ	2	
	社会接続科目					ネット情報発信概論			2								2	
卒業プロジェクト科目										プロジェクト実践			4				4	
履修単位数			11		11		11		9		9		9		8		6	
		42								32								

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類(資料) (69ページ)

(新)

		3年次								4年次								履修単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
・アカデミックリテラシー ・人工知能活用実践	導入科目	人工知能活用実践	2	デジタルツールの 使い方	2													
		アカデミックリテラシー	2															
		人文社会入門	2															
		現代社会と数学	2															
・多言語ITコミュニケーション	基礎科目	多言語ITコミュニケーション	2			文化人類学Ⅰ	2	心理学	2									
		日本文学Ⅰ	2	データサイエンス概論	2													
展開科目	基礎リテラシー科目					ビジュアルプログラミング Webアプリケーション開発1	2 2	Webアプリケーション開発2	2	Webアプリケーション開発3	2	Webアプリケーション開発4	2			Webユーザーエクスペリエンス メディアアート史	2 2	
	多言語情報理解科目					機械翻訳実践（日本研究）		2										
	世界理解科目	世界が変わる編集力	2	近・現代アート概論 日本文学Ⅱ	2	リテラシーと応用のための物語理論	2	マンガ絵コンテから学ぶ視覚表現 哲学概論	2	AI社会の歩き方		2	民俗学	2	文化人類学Ⅱ	2		
	社会接続科目					デジタル画像技法論Ⅰ	1			マンガ産業史	2	芸術と文化資本Ⅰ	2	日本大衆文化史 メディア論 ジェンダー論	2 2 2	日本のゲーム産業史	2	
卒業プロジェクト科目										クリエイティブ現場論 デジタル画像創作論Ⅰ		2						
履修単位数			12		10		10		9		8		7		9		74	
						41								33				

(旧)

		3年次								4年次								履修単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
・アカデミックリテラシー ・人工知能活用実践	導入科目	アカデミックリテラシー	2	デジタルツールの使い方	2													
		人工知能活用実践																
		人文社会入門	2															
		現代社会と数学	2															
・多言語ITコミュニケーション	基礎科目	多言語ITコミュニケーション			2	文化人類学Ⅰ	2	心理学	2									
		日本文学Ⅰ	2	データサイエンス概論	2													
展 開 科 目	基礎リテラシー科目					ビジュアルプログラミングミ ニク Webアプリケーション開発1	2 2	Webアプリケーション開発2	2	Webアプリケーション開発3	2	Webアプリケーション開発4	2			Webユーザーエクスペリエンス メディアアート史	2 2	
	多言語情報理解科目					機械翻訳実践（日本研究）			2									
	世界理解科目	世界が変わる編集力	2	近・現代アート概論	2	リテラシーと応用のための物語理論	2	マンガ絵コンテから学ぶ視覚表現	2	AI社会の歩き方		2	民俗学	2	文化人類学Ⅱ	2		
				日本文学Ⅱ	2			哲学概論	2	マンガ産業史	2	芸術と文化資本Ⅰ	2	日本大衆文化史 メディア論 ジェンダー論	2 2 2	日本のゲーム産業史	2	
	社会接続科目					デジタル画像技法論Ⅰ	1			クリエイティブ現場論		2						
										デジタル画像創作論Ⅰ	1							
	卒業プロジェクト科目									プロジェクト実践								4
	履修単位数		12		10		41		10		9		9		8		8	74
						41								33				

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (70ページ)

(新)

		3年次								4年次								履修単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 ・アカデミックリテラシー ・人工知能活用実践	アカデミックリテラシー	2	人工知能活用実践	2													4	
基礎科目 ・多言語ITコミュニケーション			企業経営	2	多言語ITコミュニケーション			2									4	
展開科目	基礎リテラシー科目	集合と論理	2	アプリケーション	2	距離空間	2	論理回路概論	2	で学ぶ確率とモン	2	数理統計	2	ディープラーニング3	2		40	
		機械学習概論	2			データサイエンス実践Ⅰ（アンケート）	2	Webアプリケーション開発4	2	データサイエンス実践Ⅱ（モデリング）	2	データサイエンス実践Ⅲ（時系列）	2	オートマトンと形式言語理論	2			
		コンピューターサイエンス概論	2			ディープラーニング1	2			ディープラーニング2	2			クラウドコンピューティング技術	2			
		Webアプリケーション開発1	2			暗号技術とその応用	2											
						Webアプリケーション開発3	2											
	多言語情報理解科目									機械翻訳実践（情報）		2	機械翻訳実践（自然科学）		2	4		
	世界理解科目			ミクロ経済学	2			交渉・合意形成概論	2			アニメ産業史	2	統計学を哲学する	2	農業とデジタルテクノロジー	2	
				デジタル・マーケティング	2			日本科学史	2						日本のゲーム産業史	2		
															スタートアップ	2		
	社会接続科目																0	
卒業プロジェクト科目									プロジェクト実践								4	4
履修単位数		11	9		11		9	8		8		10		8		74		
		34																

(旧)

		3年次								4年次								履修単位数
		1Q		2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q		
		授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	授業科目名	単位数	
導入科目 ・アカデミックリテラシー ・人工知能活用実践	アカデミックリテラシー	2	人工知能活用実践	2													4	
	基礎科目 ・多言語ITコミュニケーション			企業経営	2	多言語ITコミュニケーション			2								4	
展開科目	基礎リテラシー科目	集合と論理	2	アプリケーション	2	距離空間	2	論理回路概論	2	で学ぶ確率とモン	2	数理統計	2	ディープラーニング3	2		40	
		機械学習概論	2			データサイエンス実践Ⅰ（アンケート）	2	Webアプリケーション開発4	2	データサイエンス実践Ⅱ（モデリング）	2	データサイエンス実践Ⅲ（時系列）	2	オートマトンと形式言語理論	2			
		コンピューターサイエンス概論	2			ディープラーニング1	2		ディープラーニング2	2			クラウドコンピューティング技術	2				
		Webアプリケーション開発1	2			暗号技術とその応用	2		Webアプリケーション開発3	2								
	多言語情報理解科目								機械翻訳実践（情報）		2	機械翻訳実践（自然科学）		2		4		
	世界理解科目			ミクロ経済学	2			交渉・合意形成概論	2			アニメ産業史	2	統計学を哲学する	2	農業とデジタルテクノロジー	2	18
				デジタル・マーケティング	2			日本科学史	2							日本のゲーム産業史 スタートアップ	2	
	社会接続科目																	0
卒業プロジェクト科目										プロジェクト実践			4		9		4	
履修単位数		11		9	40		11		9		9		9	34		9	74	

(新旧対照表) シラバス (198ページ) (一部抜粋)

(新)

科目名	プロジェクト実践	
単位数	4単位	
科目区分	必修(主要)	
担当教員	田岡恵,大野元己,吉村総一郎,瀬下大輔	
履修想定年次	4年次	
前提推奨科目	—	
前提必須科目	—	
後継推奨科目	—	
授業の概要	実社会で起こっている問題や課題を取り上げ、課題解決のステップを学びながら仮説と検証を繰り返し、学問分野に捉われず学修者自身が多様なデジタル・ツールを駆使し解決策を追求していく授業である。講義と演習を組み合わせ、テーマに関係のある事柄を中心とした学生同士の対話を繰り返し、様々な考えに触れながら検討・分析する。最終的には自ら考えた解決策を発表・フィードバックを行い、学生同士が学びを深めていくアクティブラーニングである。	
到達目標	実社会で活躍する人材になるために、不確実で変化の激しい社会の中で課題となっている問題背景を適切に理解し、正解のない答えを自ら発見して解決する能力を養う。個々の能力や適性にあった専門的な知識とともに、様々な文化や価値観・倫理を理解し、先端のデジタルツール活用して情報を収集・編集し、適切なデータを扱いながら自ら主体的に未来像を打ち立て表現できるようになる。	
授業の方法	演習科目	
教科書・参考書	オリジナルの資料を授業時に提示する	
授業時間外の学修	各回履修前に課題の資料を読み、指定された提出物を期限までに提出する。必要に応じて前提科目の復習を行うこと。	
評価方法	レポート・成果物90%,相互フィードバック10%	
回・講	タイトル	授業内容
1	オリエンテーション	課題解決の目的とプロセスを理解する。
2	課題の背景理解1(定量)	数理・情報技術の理解を踏まえた課題の定量分析として、取り上げる課題に関する多面的な情報・データを把握するための事例や手法やデジタルツールの活用についてケーススタディを用いて解説する。
3	課題の背景理解2(定量)	第2回で取り上げた多面的な情報・データを把握するための事例や手法をもとに、学生それぞれが分析したい情報をもちより、デジタルツールを活用しながら実践する。
4	課題の背景理解3(定性)	デジタルツールを用いた情報収集力を用いた課題分析として、課題の背景や原因を仮説を立てるために必要となる多様な考え方や手法についてケーススタディを用いて解説する。
5	課題の背景理解4(定性)	第4回でとりあげた考え方や手法をもとに、デジタルツールを活用しながら、分析してみる。
6	課題解決スキル演習1	全体課題に対しここまで学んだ定量分析、定性分析の事例や手法をもとに、個別課題の抽出の実践例を解説する。
7	課題解決スキル演習2	全体課題に対しここまで学んだ分析の考え方や手法、デジタルツールを活用しながら、学生が最終成果物で取り上げる個人課題に絞り込む。
8	中間レポート・相互フィードバック1	個人でこれまでの検討内容をレポートにまとめ発表する。あわせて、フィードバックの目的・方法などを解説し、教員があらかじめ用意したフィードバックシートをもとに、相互フィードバックを行う。
9	課題解決アウトプット演習1	中間発表のフィードバックをもとに、最終成果物で取り上げる個人課題をより明確化するために、演繹的・帰納的な考え方やその活用について解説する。
10	課題解決アウトプット演習2	これまでの分析結果や演繹的・帰納的な考え方や手法をもとに、これまでの分析結果や中間発表をもとにした個人課題の内容について再度振り返り、最終成果物に向けた課題の明確化に取り組む。
11	課題解決アウトプット演習3	とりあげる個人課題のステークホルダーや、それぞれの価値観やニーズを把握し、解決策を提案するために必要な考え方や手法を解説する。
12	課題解決アウトプット演習4	第11回で取り上げた考え方や手法をもとに、それぞれの個人課題の解決策を検討し、最終成果物に向けて発表内容にまとめる。
13	課題解決アウトプット演習5	最終成果物とその発表の準備として、伝え方や内容に適した表現手法について解説する。
14	最終成果物の発表・相互フィードバック2	それぞれの最終成果物を発表するとともに、教員があらかじめ用意したフィードバックシートをもとに、相互フィードバックを行う。
15	まとめ	教員による全体講評と合わせて、第14回で発表された内容の中から、授業の評価ポイントにそって優秀と評価した最終成果物の発表を開き、今後に役立てる。
特記事項	特記事項なし	

(旧)

科目名	プロジェクト実践	
単位数	4単位	
科目区分	必修(主要)	
担当教員	田岡恵,大野元己,吉村総一郎,瀬下大輔	
履修想定年次	4年次	
前提推奨科目	—	
前提必須科目	—	
後継推奨科目	—	
授業の概要	実社会で起こっている問題や課題を取り上げ、課題解決のステップを学びながら仮説と検証を繰り返し、学問分野に捉われず学修者自身が多様なデジタル・ツールを駆使し解決策を追求していく授業である。後半ではテーマに関係のある事柄を中心に他の学生と対話や討論を繰り返し、様々な考えに触れながら批判的に検討し分析をする。最終的には自ら考えた解決策を発表・フィードバックを行い、学生同士が学びを深めていくアクティブラーニングである。	
到達目標	実社会で活躍する人材になるために、不確実で変化の激しい社会の中で課題となっている問題背景を適切に理解し、正解のない答えを自ら発見して解決する能力を養う。個々の能力や適性にあった専門的な知識とともに、様々な文化や価値観・倫理を理解し、先端のデジタルツール活用して情報を収集・編集し、適切なデータを扱いながら自ら主体的に未来像を打ち立て表現できるようになる。	
授業の方法	演習科目	
教科書・参考書	オリジナルの資料を授業時に提示する	
授業時間外の学修	毎回履修前に課題の資料を読み、指定された提出物を期限までに提出する。必要に応じて前提科目の復習を行うこと。	
評価方法	レポート・成果物90%,相互フィードバック10%	
回・講	タイトル	授業内容
1	オリエンテーション／課題解決とは何か	課題解決の目的とプロセスを理解する。
2	課題の背景理解1	取り上げる課題に関する多面的な情報・データを把握する。
3	課題の背景理解2	取り上げる課題に関する多面的な情報・データを把握する。
4	課題解決スキル演習1:データ処理・デジタルツールの使い方	課題解決に必要なデータ処理のプロセス、デジタルツールの使い方を学ぶ。
5	課題解決スキル演習2:分析手法演習	課題解決に有効な分析手法を学ぶ。
6	課題解決スキル演習3:分析解釈演習	分析の解釈の視点を学ぶ。
7	中間レポートの共有・相互フィードバック	ここまでの学びを確認するために各自が作成したレポートを学生同士で共有し、成果に対して相互フィードバックを行う。
8	課題解決アウトプット演習1:課題の本質の理解(何を解決したいのか)	課題解決スキルを生かして、最も解決したい課題を明確にする。
9	課題解決アウトプット演習2:ステークホルダーの理解(誰がどう関わっているのか)	課題に関わるステークホルダー(関係者)の存在と、それぞれの価値観やニーズを把握する。
10	課題解決アウトプット演習3:根本原因の仮説(そもそもなぜそれが起きたのか)	なぜそのような課題が生まれたのか、根本原因を追求し仮説を立てる。
11	課題解決アウトプット演習4:仮説の検証(本当にそうなのか)	仮説を裏付ける事実があるのか調査・検証し、不要な思い込みは打破する。
12	課題解決アウトプット演習5:解決案のストーリー作成(どのように解決したいのか)	具体的な解決案を、ステークホルダーに伝わるストーリーに落とし込む。
13	課題解決アウトプット演習6:反論への対応(多様な視点に応える)	建設的な反論の仕方を学び、その対応を通じて解決案をブラッシュアップする。
14	課題解決アウトプット演習7:最終成果物作成演習	多様なツールを使った最終成果物の表現の仕方を学ぶ。
15	最終成果物の発表・まとめの講評	最終成果を確認し、個人ごとの学びを振り返り、将来への生かし方を表明する。
特記事項	特記事項なし	

(是正事項) 知能情報社会学部 知能情報社会学科

6. 基本計画書の学位又は学科の分野欄に「社会学・社会福祉学関係」といった記載があり、教育課程の概要にも「社会・ネットワーク」という科目区分が記載されている。しかしながら、社会調査や社会ネットワークに関する科目が開設されていないため、社会学を学ぶための十分な授業科目が配置されているとは見受けられず、社会学・社会福祉学関係の学位を付与するに足るカリキュラムとなっているか疑義がある。このことから、学位又は学科の分野欄から社会学・社会福祉学関係の記載を削除するか、社会学・社会福祉学関係が学位に含まれることをディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、カリキュラムや講義内容との関連を示しつつ説明するとともに、必要に応じて改めること。

(対応)

本学の主な学問領域は、文学関係（文学、哲学・倫理学、文化人類学）、経済学関係（経済学、経営学）、社会学・社会福祉学関係のうち社会学、理学関係（数学）、工学関係（情報学）と「設置の趣旨」（本文）に記載した。また、審査意見の指摘にある通り、教育課程の概要でも「社会・ネットワーク」という科目区分を設けている。

「社会・ネットワーク」科目は、主にDP3「社会や世界を形作ってきた学問分野の蓄積を適切に咀嚼し、世界を深く理解し、主体的な見解を紡ぎ出す力」と関連する「世界理解科目」に含まれる科目区分であり、複雑で変化の激しい社会を生き抜くためのものの考え方の引き出しを増やすため、多様な学問領域を配置する。その中で、「社会・ネットワーク」は、社会を分析し、理解する上での各学問分野の方法論を身につけるための科目区分であり、狭義の「社会学・社会福祉学」を指すわけではない。カリキュラムの体系的性の確保、およびDP3の達成の観点から、「社会・ネットワーク科目」は本学の学びにとって必要な科目区分であるが、学問分野としての「社会学・社会福祉学関係」を体系的に学ぶ科目区分ではないため、主な学問領域から「社会学・社会福祉学関係」を削除する。

(新旧対照表) 基本計画書（1ページ）

新	旧
学位の分野 文学関係、経済学関係、理学関係、工学関係	学位の分野 文学関係、経済学関係、 社会学・社会福祉学関係 、理学関係、工学関係

(新旧対照表) 基本計画書（教育課程等の概要）（11ページ）

新	旧
学位又は学科の分野 文学関係、経済学関係、理学関係、工学関係	学位又は学科の分野 文学関係、経済学関係、 社会学・社会福祉学関係 、理学関係、工学関係

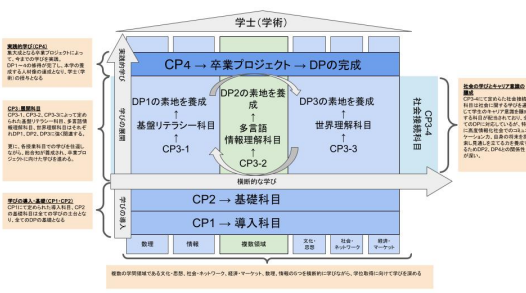
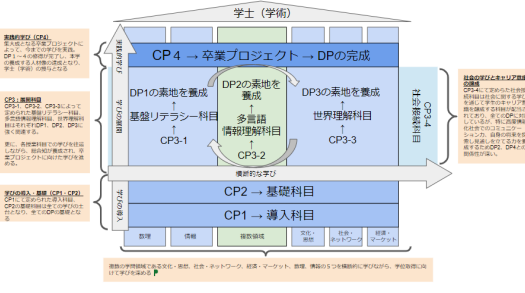
(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (12ページ)

新	旧
(3) 主な学問分野 ① 主な学問領域 本学は1学部・1学科の単科大学である。社会の基盤となる情報・数理科学の知識と、多様な世界理解の方法を修得できる人文社会を主とする諸学問を、デジタルツールを活用しながら自身の関心・課題に合わせて横断的・反復的に学修し、高度情報社会における不確実で変化の激しい課題に対して、アジャイルに対応できる能力を身につける。中心となる主な学問領域は、<u>文学関係(芸術・文学、哲学・倫理学、心理学、文化人類学)、経済学関係(経済学、経営学)、理学関係(数学)、工学関係(情報学)</u>である。	(3) 主な学問分野 ① 主な学問領域 本学は1学部・1学科の単科大学である。社会の基盤となる情報・数理科学の知識と、多様な世界理解の方法を修得できる人文社会を主とする諸学問を、デジタルツールを活用しながら自身の関心・課題に合わせて横断的・反復的に学修し、高度情報社会における不確実で変化の激しい課題に対して、アジャイルに対応できる能力を身につける。中心となる主な学問領域は、文学関係(文学、哲学・倫理学、文化人類学)、経済学関係(経済学、経営学)、<u>社会学・社会福祉学関係のうち社会学</u>、理学関係(数学)、工学関係(情報学)である。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (90ページ)

新	旧
(3) 研究分野の中心 研究分野の中心は、「1 (3) ① 主な学問領域」に記載した<u>文学関係(芸術・文学、哲学・倫理学、心理学、文化人類学)、経済学関係(経済学、経営学)、理学関係(数学)、工学関係(情報学)</u>である。	(3) 研究分野の中心 研究分野の中心は、「1 (3) ① 主な学問領域」に記載した文学関係(芸術・文学、哲学・倫理学、心理学、文化人類学)、経済学関係(経済学、経営学)、<u>社会学・社会福祉学関係のうち社会学</u>、理学関係(数学)、工学関係(情報学)である。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (資料) (48ページ)

新	旧
資料34 ZEN大学の学びの全体像の簡易図 複数の学問領域である文化・思想、社会・ネットワーク、経済・マーケット、数理、情報の5つを横断的に学びながら、学位取得に向けて学びを深める 	資料34 ZEN大学の学びの全体像の簡易図 複数の学問分野である文学関係（文化・思想）、社会学関係（社会・ネットワーク）、経済学関係（経済・マーケット）、理学関係（数理）、工学関係（情報）の5つを横断的に学びながら、学士（学術）の学位取得に向けて学びを深める 

(是正事項) 知能情報社会学部 知能情報社会学科

7. 設置の趣旨等を記載した書類(本文) P40では、「ライブ映像科目もZEN Studyで配信され、1,000人以上の同時視聴にも対応する。」とあるものの、例えば導入科目である「人工知能活用実践」は必修科目であり、多くの学生が視聴することが考えられることから、1,000人以上の同時視聴に対応することをもって、十分な環境が整備されているとは判断できない。このため、想定される最大の同時接続者数とその根拠を明確にした上で、それに耐えられる十分なシステム環境が整備されていることを説明すること。

(対応)

「1,000人以上の同時視聴」の想定としては、ライブ映像科目は年4クォーターのうち2クォーターで開講予定であり、かつ生放送視聴は必須でなく放送後の録画済み動画視聴でもよいことから、1学年あたり5,000人を最大母数としたときに生放送視聴する学生は1,000名強と想定した。

学生が生放送視聴に利用するZEN Studyは、同時利用が見込まれる学生数に応じて授業体験を損なわないよう制御プログラムが設計されており、利用するサーバも必要に応じ拡張追加できる技術(クラウド技術、Amazon Web Services等)を用いている。実際に系属校であるN/S高等学校でもZEN Studyは生徒の学修に利用されており、高校生徒数の増加ひいては同時利用者数の増加に合わせて適宜サーバ拡張を図り、同時1,000名強での利用実績がある。

一方で本学のライブ映像科目の同時接続者数は、収容定員を満たした在学者数で履修条件のない新規開講初年度において収容定員相当20,000人が最大として想定される。こちらに向けては、N/S高等学校で生徒数増にあわせてZEN Studyのサーバ拡張をした実績同様に、学生数に応じたサーバ拡張によって同時視聴者数の増加への対応を行える。

なお個別クォーター・ライブ映像科目ごとの生放送視聴者の最大見込み数は当該クォーターの当該科目履修登録者数となり、履修登録期間から初回生放送までの間にサーバ性能の調整を行える運用体制を取る。

またクラウド技術を用いる利点として、主たるサーバに加えて日本国内の異なる地域に待機サーバも用意し、主たるサーバが地震等災害に遭っても待機サーバを利用して授業配信を行うことができる。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類(43～44ページ)

新	旧
本学では、学びの内容に応じて「オンデマンド科目」「ライブ映像科目」「演習科目」「ゼミ」「卒業プロジェクト」の5種類の授業の方法を導入しており、これらの授業はクォーター制のもとで実施される。特筆すべきは、オンライン上で本学の学修を進め、科目に関する質問などをいつでも投稿できる機能を備えたオンライン受講システムZEN Studyを採用し、学生がオンライン上での学修活動を円滑に進められる点にある【資料35】。このシステムを通じて、学生は自らの学修の進捗を随時確認できるとともに、学修が遅れている学生に対してはクラス・コーチ(CC)による学修指導を行う体制も整える。またZEN Studyは多様なコンテンツと最先端の教育環境をリーズナブルな学費で提供することを目的の1つに設計がなされている。教育機会の地域格差を解消するためのシステムを実現し、高性能なPCや高速通信環境がなくても快適に学修できる仕組みを提供する。ま	本学では、学びの内容に応じて「オンデマンド科目」「ライブ映像科目」「演習科目」「ゼミ」「卒業プロジェクト」の5種類の授業の方法を導入しており、これらの授業はクォーター制のもとで実施される。特筆すべきは、オンライン上で本学の学修を進め、科目に関する質問などをいつでも投稿できる機能を備えたオンライン受講システムZEN Studyを採用し、学生がオンライン上での学修活動を円滑に進められる点にある【資料35】。このシステムを通じて、学生は自らの学修の進捗を随時確認できるとともに、学修が遅れている学生に対してはクラス・コーチ(CC)による学修指導を行う体制も整える。またZEN Studyは多様なコンテンツと最先端の教育環境をリーズナブルな学費で提供することを目的の1つに設計がなされている。教育機会の地域格差を解消するためのシステムを実現し、高性能なPCや高速通信環境がなくても快適に学修できる仕組みを提供する。ま

た、動画にコメントを投稿できる機能の実装がされており、学生間のコミュニケーションの促進が期待できる。 ライブ映像科目もZEN Studyで配信され、<u>これらの多くは年複数クォーターの開講であり、さらにアーカイブ動画の視聴も可能であるが、生放送の同時視聴者数が1,000名以上となる科目が生じる可能性があり、それを見越したシステム環境を構築する。同時に多数の受講者が生放送を視聴していても授業体験を損なわないようZEN Studyには制御プログラムが設計されており、利用するサーバも必要に応じ拡張追加できる技術（クラウド技術、Amazon Web Services等）を用いている。既に系属校のN/S高等学校での利用実績として高校生生徒数増ひいては同時利用者数増に合わせ適宜サーバ拡張を行い、1,000名強による同時視聴ができています。一方で本学のライブ映像科目の同時接続者数は、収容定員相当の20,000人も最大数として想定する必要があるので、こちらに向けてはN/S高等学校での対応と同様に学生数に応じたサーバ拡張によって同時視聴者数の増加に対応する。なお個別クォーター・科目ごとの履修者数は履修登録をもって把握できるため、履修登録期間から初回生放送までの間にサーバ性能の調整を行える運用体制も取る。</u>ZEN Studyでは、学生の動画視聴時間をはじめとする学修に関する様々なデータが蓄積される。これらのデータは定期的に分析され、その結果はより質の高い授業動画の作成やFD/SD研修などに利用される。さらに、学生の履修状況や学修データを基に、アドバイザーから学生へのアドバイスが行われる。このアドバイスは、学修の進め方から、キャリア形成に関する内容まで多岐にわたる。科目履修において前提知識が不足している学生は、リメディアル教育として必要な高校科目などの知識を基礎レベルから学ぶことも可能である。	た、動画にコメントを投稿できる機能の実装がされており、学生間のコミュニケーションの促進が期待できる。 ライブ映像科目もZEN Studyで配信され、<u>1,000人以上の同時視聴にも対応する。ZEN Studyでは、学生の動画視聴時間をはじめとする学修に関する様々なデータが蓄積される。</u>これらのデータは定期的に分析され、その結果はより質の高い授業動画の作成やFD/SD研修などに利用される。さらに、学生の履修状況や学修データを基に、アドバイザーから学生へのアドバイスが行われる。このアドバイスは、学修の進め方から、キャリア形成に関する内容まで多岐にわたる。科目履修において前提知識が不足している学生は、リメディアル教育として必要な高校科目などの知識を基礎レベルから学ぶことも可能である。
---	--

(是正事項) 知能情報社会学部 知能情報社会学科

8. 基本計画書の「教育課程等の概要」欄では「ゼミ（経済発展を考える）」が設けられるとされているが、「授業科目の概要」欄では同科目は記載されておらず、「基本計画書」に記載のない「ゼミ（社会学）」を設けることとされているなど、記載に齟齬が見受けられることから、授業科目に関する記載について、各資料における説明を整合させること。

(対応)

指摘により基本計画書「教育課程等の概要」の「社会・ネットワーク」に属する「ゼミ（経済発展を考える）」の重複と、「ゼミ（社会学）」の漏れを確認し、以下の通り対応した。

基本計画書「教育課程等の概要」の「社会・ネットワーク」に属する「ゼミ（経済発展を考える）」を削除し、さらに「ゼミ（社会学）」を同行に挿入、同科目の配当年次・基幹教員の配置列を見直した。

なお、基本計画書「授業科目の概要」に上記2科目の授業科目の名称・講義等の内容を記載しているが、ここに誤りはないため修正はない。

(新旧対照表) 基本計画書（教育課程等の概要）（10ページ）

(新)

科目区分				授業科目の名称		配当年次	
中略							
展 開 科 目	考 究 科 目	世 界 理 解 科 目	社 会 ・ ネ ッ ト ワ ー ク	ゼミ（多様化する家族）		3・4通	
				ゼミ（情報社会の政治学）		3・4通	
				<u>ゼミ（社会学）</u>		4通	
中略							

(旧)

科目区分		授業科目の名称		配当年次	
中略					
展 開 科 目	考 究 科 目	世界理解 科目	社会・ ネット ワーク	ゼミ（多様化する家族）	3・4通
				ゼミ（情報社会の政治学）	3・4通
				<u>ゼミ（経済発展を考える）</u>	4通
中略					

(改善事項) 知能情報社会学部 知能情報社会学科

9. DP1では「社会の基盤にある数理・情報技術とそれがもたらす影響力を理解する力」を身につけることとされているものの、その能力を獲得するために重要な役割を果たすと思われる「線形代数」や「解析学」が選択科目とされていることについて、その理由を明示すること。

また、本学は入試で数学力を問うていないことから、これらの科目を履修するために必要な学力を有していない学生の入学が予想される。設置の趣旨等を記載した書類(本文) P36では「カリキュラムの出発点となる『導入科目』の必修授業を履修するために必要となる基礎学力が不足している場合でも、アドバイザーによる補習授業やオンデマンド教材により大学での学びをサポートする」とあるものの、上記科目が配置される「展開科目」を履修するために必要な補習授業等は行われない計画となっていることから、必要な学力を有していない学生が受講を希望した場合の対応についても説明すること。

(対応)

本学の教育課程において、「線形代数」や「解析学」を選択科目としている理由について明示する。

DP1の意義の一つは、学生が基本的な数理・情報技術のリテラシーを身につけ、現代社会の様々な場面で必要となるデジタルツールの使用に対する抵抗感を減らし、新たな技術への情報感度を高く保つことにある。

本学は日本における高等教育の更なる浸透に寄与することを目的に開学を目指し、より多様で幅広い学生に学びの機会を提供することを教育理念としている。この教育理念に基づき設定されたディプロマポリシーは、学問領域を横断的に学び、複眼的な視野を獲得することで課題解決ができる人材を養成するために設定されたものであり、その一つであるDP1もすべての学生に情報学や数理科学の専門性を身につけることを求めるものではない。変化の激しい社会の中にあって、世界は益々複雑化しており、このような世界で必要とされる人材について、2018年11月の中央教育審議会の答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」(

https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf)では、情報を基盤とした社会においては、数理・データサイエンスの基礎的な素養が必要であり、それを基盤的なリテラシーと捉えて、文理を超えて学生が身につけることが重要であるとしている。本学のDP1も、情報技術の適切な活用を可能とするリテラシーを身につけることを意図したものであり、例えば生成AI等の数理的側面の詳細や具体的なメカニズムに関しては理解が及ばなくても、その活用を適切に行うための数理・情報技術の基礎的なリテラシーを修得し、文理に偏らないものの見方を身につけるためのものである。

このようなリテラシーを身につけられるよう、本学では、DP1の達成のための重要な科目として、導入科目(全て必修)の「現代社会と数学」や「人工知能活用実践」で社会の様々な領域の中に数理的な考え方が用いられることを学びつつ、データの収集・分析に関する基本的な内容や人工知能の活用法を学ぶ。また、同じく導入科目における「ITリテラシー」や「アカデミックリテラシー」においても、人工知能の基礎的な知識とともにデータサイエンスとビッグデータの扱い方についても学びつつ、同時に人工知能活用のメリットとリスクを学ぶカリキュラムとしている。DP1に関するこのような本学のカリキュラムに類するものとして、2020年から開始された「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」が挙げられる。このモデルカリキュラム(

http://www.mi.u-tokyo.ac.jp/consortium/pdf/model_literacy.pdf)の基本的な考え方は「今後のデジタル社会において、数理・データサイエンス・AIを日常生活、仕事等の場で使いこなすことができる基礎的な素養を主体的に身に付けること。そして、学修した数理・データサイエンス・AIに関する知識・技能をもとに、これらを扱う際には、人間中心の適切な判断ができ、不安なく自らの意志でAI等の恩恵を享受し、これらを説明し、活用できるようになること。」とされるが、そのような素養を身につけるモデルカリキュラムにおいても本学で扱うような「線形代数」や「解析学」の修得は前提とされていない。「線形代数」および「解析学」を必修科目とすることは、教育課程全体の数理・情報への比重を大きく高めるが、このことは、本学のカリキュラムを受け入れられる学生を狭め、本学の対象とする多様な学生に不確実性の高い社会で重要となる数理・データサイエンスのリテラシーを教授する機会を損ねる。一方で、数理・情報技術の深い理解のために「線形代数」

や「解析学」が重要であることは疑う余地がなく、より専門性の高い数理・情報領域の科目をカリキュラム上に配置することもまた、多様な学生がそれぞれの関心にあった学びを深めるために重要である。

以上から、本学において「線形代数」や「解析学」は必修科目としてではなく、選択科目とすることが適切である。

次に、「線形代数」「解析学」といった「展開科目」に配置される科目履修を、必要な学力を有していない学生が希望した場合の対応について説明する。まず、学生が科目選択の際に参考にする履修モデルに関しては、科目間の連続性を保ったものを準備し、数理・情報の展開科目が含まれる履修モデルについては、高校までの数学等の前提知識についても記載する。さらに学生向けにカリキュラムの制度、授業の概要、科目一覧、履修の概要等を記載した学生便覧や、クラス・コーチ（CC）が行う履修に関するガイダンスにて注意喚起を行うことで前提知識に関するミスマッチを防ぐ。このような注意喚起を行った上で履修を希望する学生の学修は妨げないが、オンラインシステムZEN Study上のフォーラム等での学生からの質問に対して、指導補助者（ティーチング・アシスタント（TA）およびアカデミック・アドバイザー（AA））はサポートを行う。また、学生の履修状況はシステム上で確認でき、進捗状況の芳しくない学生はクラス・コーチ（CC）が感知することが可能である。クラス・コーチ（CC）からの連絡の際に、学生から相談を受けた場合は、前提となる知識等を、クラス・コーチ（CC）からの共有を受けたアカデミック・アドバイザー（AA）が伝える。また、その際に専門性の高いアドバイスが必要な場合は、教員が質問に対する回答対応を行う。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類（本文）（18ページ）

新	旧
イ 養成の流れ 本学のDP 1 に定める能力の養成は、AP 1 に定めた学力を有する学生を想定して設計する。また、情報や数理に関する各種講義は、多くの学生にとっては新しい学問分野への挑戦となるが、学生はAP 3 に定めた新しい学びや活動に挑戦しようとする姿勢を活かし、必要に応じてアドバイザーによる補習授業やZEN Studyに用意された高等学校までの豊富な動画教材による履修不足の分野の学修や復習を行いながら、これらの学びに取り組む。 CP 1 「導入科目」の「ITリテラシー」においては、ITの必要性を理解し、基本知識を身につけることから出発し、情報技術の基本的な考え方や、社会や生活の中でそれらがどのように使われているかの仕組みを理解する。また「現代社会と数学」や「<u>人工知能活用実践</u>」では、人工知能・データサイエンスの導入のみならず、経済、法律、政治、デザイン、心理などと数学との関わりに触れ、数理の考え方が社会の様々な領域の背後で用いられていることを<u>学び、またデータの収集・分析に関する基本的な内容や人工知能の活用法についても学ぶ。</u>	イ 養成の流れ 本学のDP 1 に定める能力の養成は、AP 1 に定めた学力を有する学生を想定して設計する。また、情報や数理に関する各種講義は、多くの学生にとっては新しい学問分野への挑戦となるが、学生はAP 3 に定めた新しい学びや活動に挑戦しようとする姿勢を活かし、必要に応じてアドバイザーによる補習授業やZEN Studyに用意された高等学校までの豊富な動画教材による履修不足の分野の学修や復習を行いながら、これらの学びに取り組む。 CP 1 「導入科目」の「ITリテラシー」においては、ITの必要性を理解し、基本知識を身につけることから出発し、情報技術の基本的な考え方や、社会や生活の中でそれらがどのように使われているかの仕組みを理解する。また「現代社会と数学」<u>では、人工知能・データサイエンスの導入のみならず、経済、法律、政治、デザイン、心理などと数学との関わりに触れ、数理の考え方が社会の様々な領域の背後で用いられていることを学ぶ。</u>

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (33ページ)

新	旧
b 数理領域 「数理」はDP 1 に強く関連した領域である。社会にどのように数理が関わっているかを理解することは、数理・情報技術の利点と限界の把握につながる。また、変化の激しい時代において、社会の基盤にある数理を知ること、それが軸となり混乱せずに変化に対応することが可能となる。本学では「数理」領域のすべての授業が「基盤リテラシー科目」に設定されている。「現代社会と数学」を入口とし、数学が社会の中でどのように用いられるか、他領域との関わりについて学ぶ。また、数理領域の基本的な知識や考え方を身につけるため「数学的思考とは何か」「数学史」「現代社会とサイエンス」が「基礎科目」として置かれている。 <u>なお、本学のDP 1 は、情報技術の適切な活用を可能とするリテラシーを身につけることを意図したものであり、例えば生成AI等の数理的側面の詳細や具体的なメカニズムに関しては理解が及ばなくても、その活用を適切に行うための数理・情報技術の基礎的なリテラシーを修得し、文理に偏らないものの見方を身につけるためのものであり、そのための導入的な授業を必修・選択必修科目に配置した。学生は、これらの科目によって社会の基盤となる数理を理解して、情報技術の適切な利用に活用するとともに、より専門的に数理を深めたい学生は、後述の「展開科目」から「線形代数」や「解析学」などを選択科目として受講できる。</u>	b 数理領域 「数理」はDP 1 に強く関連した領域である。社会にどのように数理が関わっているかを理解することは、数理・情報技術の利点と限界の把握につながる。また、変化の激しい時代において、社会の基盤にある数理を知ること、それが軸となり混乱せずに変化に対応することが可能となる。本学では「数理」領域のすべての授業が「基盤リテラシー科目」に設定されている。「現代社会と数学」を入口とし、数学が社会の中でどのように用いられるか、他領域との関わりについて学ぶ。また、数理領域の基本的な知識や考え方を身につけるため「数学的思考とは何か」「数学史」「現代社会とサイエンス」が「基礎科目」として置かれている。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (本文) (38～39ページ)

新	旧
(3) 設置の趣旨や学部・学科の特色に沿った科目設定であることについて (略) 本学は幅広い学生を受け入れるため、入学時の学力に差が生じることが想定されるが、カリキュラムの出発点となる「導入科目」の必修授業を履修するために必要となる基礎学力が不足している場合でも、アドバイザーによる補習授業やオンデマンド教材により大学での学びをサポートする。 「基礎科目」においては、各領域からの基礎的な科目の選択により、学びを進め	(3) 設置の趣旨や学部・学科の特色に沿った科目設定であることについて (略) 本学は幅広い学生を受け入れるため、入学時の学力に差が生じることが想定されるが、カリキュラムの出発点となる「導入科目」の必修授業を履修するために必要となる基礎学力が不足している場合でも、アドバイザーによる補習授業やオンデマンド教材により大学での学びをサポートする。 「基礎科目」においては、各領域からの基礎的な科目の選択により、学びを進

る。ここで培われた各領域の基礎をもとに、「展開科目」において、学生は個々の関心に応じて専門性を持った科目群から、主体的な科目選択により横断的・反復的に学びを広げる。そのような学びの中で、新たな領域の学びの必要性を感じた際には、基礎科目に立ち返ることもでき、逆に特定の領域の専門性を身につける場合も、必要に応じて「考究科目」で深めることができる。このような自由度の高いカリキュラムの中で学生が主体的に学びを進められるよう、希望者に対してアドバイザーによる履修支援を行う。また、「社会接続科目」から自身のキャリアや社会との接続に関する意識を高めることにより、学生の自己理解を促し、身につけたい力や進路に応じた科目選択をサポートする。

なお、学生が科目選択の際に参考にする履修モデルに関しては、科目間の連続性を保ったものを準備し、数理・情報の展開科目が含まれる履修モデルについては、高校までの数学等の前提知識についても記載する。さらに学生向けにカリキュラムの制度、授業の概要、科目一覧、履修の概要等を記載した学生便覧や、クラス・コーチ（CC）が行う履修に関するガイダンスにて注意喚起を行うことで前提知識に関するミスマッチを防ぐ。このような注意喚起を行った上で、「展開科目」に配置される科目履修を希望する学生について、その履修は妨げないが、ZEN Study上に開設されるフォーラムでの学生からの質問に対して、指導補助者はサポートを行う。また、学生の履修状況はシステム上で確認でき、進捗状況の芳しくない学生はクラス・コーチ（CC）が感知することが可能である。クラス・コーチ（CC）からの連絡の際に、学生から相談を受けた場合は、前提となる知識等を、クラス・コーチ（CC）からの共有を受けたアカデミック・アドバイザー（AA）が伝える。また、その際に専門性の高いアドバイスが必要な場合は、教員が質問に対する回答を行う。

める。ここで培われた各領域の基礎をもとに、「展開科目」において、学生は個々の関心に応じて専門性を持った科目群から、主体的な科目選択により横断的・反復的に学びを広げる。そのような学びの中で、新たな領域の学びの必要性を感じた際には、基礎科目に立ち返ることもでき、逆に特定の領域の専門性を身につける場合も、必要に応じて「考究科目」で深めることができる。このような自由度の高いカリキュラムの中で学生が主体的に学びを進められるよう、希望者に対してアドバイザーによる履修支援を行う。また、「社会接続科目」から自身のキャリアや社会との接続に関する意識を高めることにより、学生の自己理解を促し、身につけたい力や進路に応じた科目選択をサポートする。

(改善事項) 知能情報社会学部 知能情報社会学科

10. 設置の趣旨等を記載した書類（本文）P36では「カリキュラムの出発点となる『導入科目』の必修授業を履修するために必要となる基礎学力が不足している場合でも、アドバイザーによる補習授業やオンデマンド教材により大学での学びをサポートする」とあるが、実効性が不明確であるため、補習授業等の内容や対象者数及び対象者の特定方法等を明示すること。

(対応)

補習授業等の内容や対象者数及び対象者の特定方法等について、以下に明らかにする。

まず、補習授業等の内容について、以下に説明する。導入科目のうち、オンデマンド科目については、アカデミック・アドバイザー（AA）が授業開始前に事前に収録された授業動画を全てを確認し、高校までに扱われる内容のうち、授業内で用いられている用語や概念について、補習授業で解説すべき内容の洗い出しを行う。また、ライブ映像科目となる「人工知能活用実践」については、8回目以降に扱われるデータの収集・分析に関する授業内容を事前にアカデミック・アドバイザー（AA）が担当教員に確認し、その中で扱われている数学的内容に関して、補習が必要な内容を洗い出す。それらの用語や概念について、アカデミック・アドバイザー（AA）は教員に相談・確認の上、解説や内容を補足するスライド等の補習授業教材を作成し、それに基づき補習授業を行う。なお、補習授業の実施方法は、まず導入科目の各授業に関して、オンラインコミュニケーションサービス上で専用のサポートチャンネルを作成する。そのチャンネルで補習授業の日時等の案内を行い、ビデオ会議システムを用いてアカデミック・アドバイザー（AA）が補習授業を行う。時間的制約等によりリアルタイムで補習授業を受けられない学生にも、アーカイブを残し、事後的に補習授業を受講することができるよう配慮する。また、学生はサポートチャンネルで必修授業に対する個別の疑問について質問することも可能である。補習授業で扱われていない高校までの学習内容を学び直す必要がある場合は、ZEN Studyに用意されている高校までの学習内容のオンデマンド教材を案内するなど、自学自習による大学での学びをサポートする。

なお、ZEN Studyで扱われる予定の高校までの学習内容のオンデマンド教材を以下に記載する。

【表】ZEN Studyで扱われる高校までの内容のオンデマンド教材

講座	コース
高校で学ぶ内容	英文読解
	英文法
	英作文
	数学Ⅰ・A
	数学Ⅱ・B
	数学Ⅲ
	現代文読解
	小論文
	古典文法

	古文読解
	漢文
	物理
	化学（理論）
	化学（有機・無機）
	生物基礎
	生物
	情報 I
	世界史
	日本史
	地理
	政治経済
中学校で学ぶ内容	英語
	数学
	国語
	まずはここから英数国
小学校で学ぶ内容	算数
	国語
パソコンの使い方	基礎から学べる パソコン講座
IT基礎	パソコン
プログラミング	プログラミング入門

このほか、課題の採点や学生のフォーラム等での質問に対してアカデミック・アドバイザー（AA）やティーチング・アシスタント（TA）がサポートを行うことで、進捗状況の芳しくない学生やさらに理解が必要と考えられる場合にリメディアル教育の利用を促す。また、学生の履修指導を行う中でCCが学生から相談を受けた場合は、CCからの共有を受けたアカデミック・アドバイザー（AA）が必要なリメディアル教育を伝えることもできる。

次に、対象者数及び対象者の特定方法等について説明する。

まず、サポートチャンネルには5000人が入ることも可能であり、ビデオ通話システムの授業のアーカイブをサポートチャンネルに掲載できるため、必要な学生が時間的制約を受けることなく補習授業の内容を学ぶことができる。このため、対象者の人数は問題にならない。

毎回の授業に確認テストとレポートがあり、各学生の授業の進行状況はシステムで確認可能である。また、学生に計画的な学修を促すために、各回の授業に対してレポート提出

に関する期限を設け、クラス・コーチ（CC）はそれを一つの目安に学修進捗に関する連絡を行う。多くの対面型授業では、毎週同じ時間に授業が実施され、個々の学生の理解度と授業のペースは必ずしも一致しないが、オンデマンドの映像授業では、学生が各授業に関して個々の理解度に応じたペースで学修を進めると想定されるため、確認テスト・確認レポート提出の状況によって授業科目に対する理解度を把握できる。導入科目を受けるための基礎学力が不足している学生は、授業の各回の確認テストの回答・確認レポートの提出が滞る学生の中に含まれると考えられるため、クラス・コーチ（CC）と連携し、学修進捗に滞りが見られる学生をアカデミック・アドバイザー（AA）がオンラインコミュニケーションサービス上のサポートチャンネルに誘導する。また、サポートチャンネルは授業開始時点で開き、クラス・コーチ（CC）を通じて全学生に通知されるため、希望者は授業開始時点からこれらのチャンネルに参加し、サポートを受けることが可能である。

提出状況が滞っている学生の中には、基礎学力が不足している以外のケースも想定されるが、サポートチャンネルからの退出を自由とすることで、学生は不要な補習授業を受けずにすむ。一方で、基礎学力に不安のある学生は、一度高校までに学習した内容でも、補習授業で必要な知識の理解を深めることができる。このような形で、基礎学力が不足する学生が補習授業を受け、本学での学びを進める体制が担保される。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類（本文） 68～71ページ

新	旧
ア アカデミック・サポート アカデミック・サポートでは、授業を理解するために必要な基礎知識や基礎学力を身につけさせるためのリメディアル教育、学生の興味・関心について学びを深めるための学術活動のサポートを行う。<u>主にアカデミック・アドバイザー（AA）が担当し教員やティーチング・アシスタント（TA）と連携しながら、必要なリメディアル教育の提供を行うとともに、学生の自主的な学びやコミュニティ運営をサポートする。（※欄外の注釈参照）</u> リメディアル教育では、主に必修授業を中心とした授業科目の補習を目的とし、オンラインでの補習講座を定期的に行う<u>とともに、必要に応じZEN Studyに用意されている高校までの学習内容の復習を案内するなど、自学自習による大学での学びをサポートする。</u>オンラインの補習講座とは、アカデミック・アドバイザー（AA）がビデオ会議システムを使って行う解説講座のことを指し、授業を理解するための前提知識の詳しい解説などを行って、学問分野の概念や専門的な考え方を適切に理解できるようにする。 <u>具体的には、導入科目のうち、オンデマンド科目については、アカデミック・アドバイザー（AA）が授業開始前に事前に収録された授業動画を全てを確認し、高校までに扱われる内容のうち、授業内で用いられている用</u>	ア アカデミック・サポート アカデミック・サポートでは、授業を理解するために必要な基礎知識や基礎学力を身につけさせるためのリメディアル教育、学生の興味・関心について学びを深めるための学術活動のサポートを行う。 リメディアル教育では、主に必修授業を中心とした授業科目の補習を目的とし、オンラインでの補習講座を定期的に行う。 オンラインの補習講座とは、アカデミック・アドバイザー（AA）がビデオ会議システムを使って行う解説講座のことを指し、授業を理解するための前提知識の詳しい解説などを行って、学問分野の概念や専門的な考え方を適切に理解できるようにする。

語や概念について、補習授業で解説すべき内容の洗い出しを行う。また、ライブ映像科目となる「人工知能活用実践」については、8回目以降に扱われるデータの収集・分析に関する授業内容を事前にアカデミック・アドバイザー（AA）が担当教員に確認し、その中で扱われている数学的内容に関して、補習が必要な内容を洗い出す。それらの用語や概念について、アカデミック・アドバイザー（AA）は教員に相談・確認の上、解説や内容を補足するスライド等の補習授業教材を作成し、それに基づき補習授業を行う。

なお、補習授業の実施方法は、まず導入科目の各授業に関して、オンラインコミュニケーションサービス上で専用のサポートチャンネルを作成する。そのチャンネルで補習授業の日時等の案内を行い、ビデオ会議システムを用いてアカデミック・アドバイザー（AA）が補習授業を行う。時間的制約等によりリアルタイムで補習授業を受けられない学生にも、アーカイブを残し、事後的に補習授業を受講することができるよう配慮する。

また、ZEN Studyには高等学校までの各科目の動画教材が豊富に用意されており、必修授業などにおいて、学生に高校までの内容について履修不足や復習が必要な科目がある場合にも、それらの動画を案内し、自学自習による大学での学びをサポートする。なお、ZEN Studyで扱われる予定の高校までの学習内容のオンデマンド教材を以下に記載する。

講座	コース
高校で学ぶ内容	英文読解
	英文法
	英作文
	数学Ⅰ・A
	数学Ⅱ・B
	数学Ⅲ
	現代文読解
	小論文
	古典文法
	古文読解

また、ZEN Studyには高等学校までの各科目の動画教材が豊富に用意されており、必修授業などにおいて、学生に高校までの内容について履修不足や復習が必要な科目がある場合にも、それらの動画を案内し、自学自習による大学での学びをサポートする。

	漢文	
	物理	
	化学（理論）	
	化学（有機・無機）	
	生物基礎	
	生物	
	情報Ⅰ	
	世界史	
	日本史	
	地理	
	政治経済	
中学校で学ぶ内容	英語	
	数学	
	国語	
	まずはここから英数国	
小学校で学ぶ内容	算数	
	国語	
パソコンの使い方	基礎から学べる パソコン	
IT基礎	パソコン	
プログラミング	プログラミング入門	
<u>このほか、課題の採点や学生のフォーラム等での質問に対してアカデミック・アドバイザー（AA）やティーチング・アシスタント（TA）がサポートを行うことで、進捗状況の芳しくない学生やさらに理解が必要と考えられる場合にリメディアル教育の利用を促す。また、学生の履修指導を行う中でクラス・コーチ（CC）が学生から相談を受けた場合は、クラス・コーチ（CC）からの共有を受けたアカデミック・アドバイザー（AA）が必要なリメディアル教育を伝えることもできる。</u> <u>なお、サポートチャンネルには5000人が入ることも可能であり、ビデオ会議システムの授業のアーカイブをサポートチャンネルに掲載できるため、必要な学生が時間的制約を</u>		

受けることなく補習授業の内容を学ぶことができる。このため、対象者の人数は問題にならない。

毎回の授業に確認テストとレポートがあり、各学生の授業の進行状況はシステムで確認可能である。また、学生に計画的な学修を促すために、各回の授業に対してレポート提出に関する期限を設け、クラス・コーチ（CC）はそれを一つの目安に学修進捗に関する連絡を行う。多くの対面型授業では、毎週同じ時間に授業が実施され、個々の学生の理解度と授業のペースは必ずしも一致しないが、オンデマンドの映像授業では、学生が各授業に関して個々の理解度に応じたペースで学修を進めると想定されるため、確認テスト・確認レポート提出の状況によって授業科目に対する理解度を把握できる。導入科目を受けるための基礎学力が不足している学生は、授業の各回の確認テストの回答・確認レポートの提出が滞る学生の中に含まれると考えられるため、クラス・コーチ（CC）と連携し、学修進捗に滞りが見られる学生をアカデミック・アドバイザー（AA）がオンラインコミュニケーションサービス上のサポートチャンネルに誘導する。また、サポートチャンネルは授業開始時点で開き、クラス・コーチ（CC）を通じて全学生に通知されるため、希望者は授業開始時点からこれらのチャンネルに参加し、サポートを受けることが可能である。

提出状況が滞っている学生の中には、基礎学力が不足している以外のケースも想定されるが、サポートチャンネルからの退出を自由とすることで、学生は不要な補習授業を受けずにすむ。一方で、基礎学力に不安のある学生は、一度高校までに学習した内容でも、補習授業で必要な知識の理解を深めることができる。

※審査意見17の対応において「設置の趣旨等を記載した書類」に記載する内容であるが、その記載箇所は審査意見10の対応においても記載する範囲であるため、審査意見10の新旧対照表においても記載するものとする。